

亜細亜大学

学術文化紀要

ISSN 2436-9411 (オンライン)

第45号(2025)

ミシシッピ州における政治暴力と1875年の共和党政権転覆計画	杉 測 忠 基	1
Shakespeare and Emotions: Hamlet on Grief.....	Akiko Ikeda	21
口語における破格の絶対最上級について.....	土 屋 亮	39
Japanese University Students' Opinion of Readtheory	Joshua Trued	57
教室内不正行為としての代理出席（「代返」）に対する 大学生の意識	小 湊 真 衣	73
— アナログ方式での出席確認方法を主流とする 学生を対象とした調査から —		
役者似顔絵の可能性.....	佐 藤 知 乃	140
[研究ノート]		
PBLによるビジネス日本語教育の実践報告.....	小 竹 直 子	93
— 大学学部留学生を対象とした就業体験型授業の試み —		

総合学術文化学会

2025年3月刊行 PDF 版

亜細亜大学

学術文化紀要

第 45 号

2025 年

総合学術文化学会

ミシシッピ州における政治暴力と 1875年の共和党政権転覆計画

杉 渕 忠 基

Political Violence and the 1875 Plot to Overthrow the Republican Government in Mississippi

Tadaki Sugibuchi

Abstract

This paper addresses the issue of political violence in Mississippi between 1871 and 1875, focusing on the process that led to the “revolution” of 1875, during which KKK violence, previously under control, resurfaced in 1873. To this end, the paper analyzes both the KKK’s political violence and the background leading up to the political violence occurring in 1875. The post-Civil War amendments, passed under Republican leadership, were reluctantly accepted by Democrats, who viewed them as imposed constraints and sought to circumvent them when opportunities arose. Unable to bypass this framework legally, Democrats turned to violence as an instrument against Republicans and Black citizens. Even when KKK trials led to convictions, severe sentences were rarely imposed, which likely preserved the potential for later violence. This latent violence emerged more visibly under the Ames administration. The heavy tax burden, combined with protests and the embezzlement by some Republican officeholders, fueled discontent that often targeted innocent Republican officials, regardless of race. Although efforts to remove Republican officeholders had been seen even during the KKK’s earlier activities, the KKK was not organized enough during Reconstruction to operate statewide. However, by 1875, the campaign to overthrow the Republican Party and the Democrats’ organized violence had a significant impact on the political climate across Mississippi.

はじめに

南北戦争後の再建期に、南部諸州に導入された人種平等の理念は暴力誘発の可能性を孕んでいた。連邦政府は軍政を敷き、暴力の抑止と社会変革に取り組んだが、南部諸州が連邦に復帰し、軍政が終結すると抑止力は弱体化した。ミシシッピ州でのクー・クラックス・クラン（KKK）による1871年の暴力は全米の注目を集め、その後、連邦議会はKKKを取り締まるためのより厳しい法律を制定した。KKKの取締りにより同州の共和党政権は一時的に安定したが、1875年には再び暴力的な選挙運動が展開された。再建期の研究では、1875年のミシシッピ州における選挙運動は大きな転換期と捉えられており、この時期を扱う研究では「革命」と見なされている。それは、政権が平和的な手段ではなく、力によって転覆させられたからである。州政府は一旦、連邦政府の介入によりKKKを抑え込むことができたが、どうして1875年には暴力的な選挙運動を抑えることができなかったのか。これが本稿の問いである。

1875年の革命に至るプロセスが加速したのは1873年である。この年の知事選挙は、KKK対策の違いから共和党からの二候補が争った。緩やかなKKK対策に徹した元知事ジェームズ・L・アルコーン（在任期間1870-1871）と、厳格な対策を主張する、軍政期の知事を務めたアデルバート・エイムズ（軍政期は1868-1870、文民政権時1874-1876）が対決したのである。アルコーン知事の時代には黒人の公職任命をできるだけ避け¹⁾たが、勝利したエイムズは、多くの黒人を地域の公職に就けた。それが白人の黒人に対する反感と人種的な憎悪を刺激し、白人至上主義を信奉する革命への道が敷かれていったのである。本稿ではアルコーン政権とエイムズ政権の政治暴力への対応の差異、および政治暴力の形態の変化に着目し、革命に至るプロセスを明らかにしたい。

ジェームズ・ガーナーは、1901年に『ミシシッピ州の再建期』（*Reconstruction in Mississippi*）において、複眼的な分析視点を持ちつつも、KKKの暴力は連邦議会の再建政策にその原因があるとし、1875年の革命では

エイムズへの批判的な視点に重点を置き、結局この革命を支持している²⁾。

ヴァーノン・L・ウォートンは1947年に、『ミシシッピ州の黒人、1865-1890年』(*The Negro in Mississippi, 1865-1890*)において、1871年、1872年、1873年は民主党の弱体化と連邦政府介入の可能性により、暴力は州全体で抑制されていたが、1873年になると次第に、公職に就く黒人が増加したことを指摘している。ウォートンは、仮に連邦政府の介入で抑制され、1875年の暴力的な選挙運動が一時的に抑えられても、根本的な人種問題解決には至らなかったと見ている³⁾。

ウィリアム・C・ハリスは1979年、再建期のミシシッピ州を扱った700ページを超える、『カーペットバッガーの時代—ミシシッピ州における共和党の再建政策』(*The Day of the Carpetbagger: Republican Reconstruction in Mississippi*)において、1875年の革命に至る事件や政治の動きを丹念に記述している⁴⁾。しかし、暴力事件の頻度に過度に焦点を当てた結果、暴力が政治に与えた深刻な影響を十分に評価できていない⁵⁾。

エリック・フォーナーは1988年、再建期の研究の決定版と言われる『未完の革命、1863-1877年』の中で、ミシシッピ州の民主党が1875年に、連邦法と連邦憲法に違反して州の政治を支配したと捉えている。また、同年、ユリシーズ・グラント大統領がミシシッピ州に介入しなかったことを、再建政策からの撤退を象徴する画期的な出来事と見なしている⁶⁾。

近年では、ニコラス・レマンが2006年に『救済—南北戦争の最後の戦い』(*Redemption: The Last Battle of the Civil War*)の中で、いかに暴力が政治を動かしてきたかという点に焦点をあてている⁷⁾。しかしレマンは、1875年の暴力的な選挙運動を、1871年のKKKによる暴力と結びつけては捉えていない。

上述の歴史家の中で、1871年と1875年の政治暴力を直接関係づけて論じているのは、ウォートンである。『ミシシッピ州の黒人、1865-1890年』の出版に先立ちウォートンは論文で、民主党の指導者たちにとって、KKKによって1871年に引き起こされたメリディアンでの暴動は、その後

の1875年の暴動において、戦略的に重要な役割を果たしたとしている。⁸⁾

この2つの事象、つまり1871年のKKKの政治暴力と1875年の政治暴力との関連を紐解くために、本稿では次の三つの節を設ける。第1節では、1871年にメリディアンで起きたKKKによる暴動を中心に扱い、暴動に対し連邦政府が介入し、KKKが逮捕され、裁判で処罰を受け、一旦は暴力的な動きが鈍化した状況を考察する。第2節では、転機となった1873年の知事選挙で樹立された共和党急進派のアデルバート・エイムズ政権の政策に対し反感を抱いた白人が団結し、暴力事件が増加した状況を考察する。第3節では、1875年の暴力的な選挙運動と投票日以降も続いた、共和党とつながりのある公職者の追放活動について、これまであまり触れられてこなかったエミート郡の事例を考察する。こうした考察を通じて、暴力は一旦鎮静化しても、再建期においては、暴力を誘発する政治的な要因が、人種問題と絡み合っており、複雑な様相を呈していたことを示したい。

1. KKKの活動と連邦政府の介入

ミシシッピ州でKKKの活動が活発化したのは、アラバマ州との州境寄りの地域、つまり東部、東部の中でもとりわけ北部における次の諸郡においてであった。ローンデス、モンロー、オクティベハ、チョクトー、ウィンストン、ケンパー、イタワンバ、ティショミング、アルコーン、プレントイス、ポントック、リー、リーク、ティッパー、ユニオン、チカソー、およびローダーデールという合わせて18郡である。⁹⁾ ミシシッピ州の西側をミシシッピ川が流れ、アーカンソー、ルイジアナ州との境界を形成している。東側はアラバマ州と接している。このミシシッピ州を縦と横の線で4つにほぼ等分したとすると、KKKの活動地域は右上の部分に該当する。

モンロー郡では1871年3月9日、オハイオ州出身の課税額査定官であり、州議会議員でもあるA・P・ハギンズがKKKに襲撃された。ハギンズはその夜、名望のある民主党員ジョージ・R・ロス宅に招待され宿泊していた。KKKの目的は共和党員の連邦職員を脅して、郡外へ転出させることであ

った。120名ほどのKKKが家の周囲を囲んだ。門から、あるいは塀を乗り越え、20名ほどがハギンズから武器を奪い、ハギンズは数百メートル離れた丘に連れていかれた。郡外への転出を頑なに拒むハギンズに対し、首つり縄を見せつけ、脅したが、ハギンズは動じなかったため、上着を脱がされ、鞭で背中に75回もの殴打を浴びることになった。¹⁰⁾

モンロー郡ではまた、アメリカ宣教師協会から派遣されたイリノイ州出身のサラ・A・アレンという女性教師は教えていた黒人学校をKKKによって辞めさせられたため黒人学校で4カ月教える予定が、6週間で終わってしまった。¹¹⁾同郡では、1871年3月29日の夜、黒人アレック・ページが自宅から連れ去られ、首を括られたあとに、穴に埋められるという事件が起きた。¹²⁾

ポントトック郡では、1871年5月12日、KKKが、ロバート・W・フルールノアの共和党系の新聞社を破壊する目的で襲撃した。ウィンストン郡では1871年3月、アレグサンダー・W・マーフ牧師が、脅され、共和党によって任命された教育長の職を辞した。¹³⁾

1871年3月6日、ローダーデール郡メリディアンで、判事が裁判中に射殺され、その後の暴動で、黒人の被告3名が殺害されるという事件が起きた。

事の発端はアラバマ州のKKKと関係があった。ミシシッピ州ローダーデール郡と隣接するアラバマ州サムター郡および、サムター郡の東側に隣接するアラバマ州グリーン郡からKKKの暴力を逃れるために多数の黒人がメリディアンに避難してきた。アラバマ州リビングストンからの避難民の中にダニエル・プライスという共和党の白人指導者がおり、メリディアンで黒人学校の教員になった。¹⁴⁾

アラバマ州側では暴力を避けるために黒人が逃亡した結果、労働力不足という事態を招いていた。労働力不足解消を目的にアラバマ州の徒党によりメリディアンから黒人が連れ去られるという事態に対処するために、メリディアン近辺では黒人が武装組織を編成した。1871年1月から2月に

かけて、アダム・ケナードという黒人がサムター郡の保安官代理という肩書で黒人避難民を逮捕・送還するという事件が数回起きたが、これは事実上の誘拐であった¹⁵⁾。

ケナードはメリディアン滞在中、KKKのように変装した集団により襲撃を受けた。ケナードによれば、その集団は、プライスを除き黒人であった。その結果、プライスは1870年のミシシッピ州のKKK法により、逮捕された¹⁶⁾。地区検事長のJ・P・ウォーカーはケナードとプライスは、アラバマ州への黒人連れ戻しについて、もめていたようだと言っている¹⁷⁾。

保安官、警察署長および町の有力者が共和党のウィリアム・スタージズ市長にプライスを裁判にかけないように要請した。濡れ衣を着せられたプライスを裁判にかければ、暴動が起きるとというのが理由であった。その結果、プライスは密かに釈放されメリディアンから立ち去った。3月3日（金）、黒人から成る委員会が州都ジャクソンでジェームズ・アルコーン知事に事態を報告した。団長は州議会下院議員の黒人牧師アーロン・ムーアが務めた。翌4日（土）、裁判所を会場にして共和党が大衆集会を開いた。その席上、教師ウォーレン・タイラー、ウィリアム・デニス、および上述のムーア牧師という黒人指導者たちが演説を行った。その演説が扇動的であるとされ、この三者が逮捕された。4日夜、シオドア・スタージズ所有の店舗が放火され、翌5日（日）は、町中が興奮の渦の中にあった。6日（月）午前、白人たちが大衆集会を開き、黒人たちの演説を非難する決議を採択し、午後¹⁸⁾に上記3名の黒人たちの裁判の進行中に発砲事件が起きたのである。

E・L・ブラムレット判事がウォーレン・タイラーらを尋問していた。証言台に立っていたのがジェームズ・ブラントリーであった。証言したブラントリーへの異議申し立てのためにタイラーが2名の証人を召喚したいと述べると、ブラントリーは手を伸ばし、裁判に立ち会っていたW・S・パットンの杖をつかもうとしたが、パットンはブラントリーの手をつかみ、それをやめさせた。そのときに最初の銃弾が発射された。次の瞬間、頭の

左側を撃ち抜かれたブラムレット判事が倒れていた。パットンはそのように証言した¹⁹⁾。パットンは、銃が発射される場面を見ていないが、撃ったのはタイラーであると示唆している。法廷にいた A・G・フレイダリッセは、タイラーが判事を狙って最初の一発を撃ったと証言した²⁰⁾。タイラーの一発で、法廷内で撃ち合いが始まり騒然となったのである。

ローダーデル郡の保安官ロバート・J・モウズリーの証言、および、メリディアン暴動について州の調査委員会を率いた O・C・フレンチの証言を併せて上記 3 名の被告の身に起きたことを述べてみたい。タイラーは法廷のあった二階のベランダから地面に降りて約 200 メートル離れたところにある靴屋に逃げ込んだところ、保安官代理に導かれた武装隊によって殺害された²¹⁾。デニス²¹⁾は二階の窓から放り投げられ、保安官室に保護のために運び込まれたが、そこで、喉を掻き切られた²²⁾。ムーアは頭を撃たれたブラムレット判事の傍らに倒れたので死んだと思われていたが、騒動が静まると法廷を抜け出して森に逃れ、ジャクソンまで逃げ延びた²³⁾。しかし、ムーアの自宅と教会は放火され、焼け落ちた²⁴⁾。後を追われているという知らせを受けたスタージズ市長が、メリディアンから脱出するという事態になった²⁵⁾。

ミシシッピ州北部担当の地区検事長 G・ワイリー・ウェルズは、1871 年 5 月 15 日頃から精力的に起訴手続きを始め、11 月半ばには、KKK を 200~300 人を起訴した。その過程で明らかになった KKK の目的は黒人を恐怖に陥れ、投票させないか、あるいは民主党への投票を強要することであった。ウェルズの証言によれば、起訴されるという恐れを抱かせることによって KKK はその活動を控えるようになった²⁶⁾。1871 年の 7 月にはすでに KKK の温床である州東部でも KKK の活動は終わっていた²⁷⁾。一方、ウェルズは KKK 起訴の最盛期 (1872-1874 年) には、命が狙われていたため、武器の携帯を勧める手紙を受け取っている²⁸⁾。

KKK 裁判では、多くが有罪判決に導かれたが、下されたのは厳罰ではなかった。同州オックスフォードの連邦裁判所で裁判長を務めたロバート・

A・ヒルは、裁きの厳格さよりも犯罪を防止する確実な処罰の重要性を主張した。²⁹⁾一方、共和党急進派のアデルバート・エイムズ連邦上院議員は寛容な裁きに不満をもち³⁰⁾らした。

エイムズは連邦議会の審議でKKK法を支持していた。一方、アルコーン知事は1871年4月2日、ミシシッピ州選出の連邦議会議員に宛てた電報で「連邦軍は不要であり、文民政府が州民の生命を保障できる」と述べ、KKK法案への反対の意向を示していたのである。この電報は、エイムズには宛てられているがもうひとりの黒人上院議員ハイラム・R・レヴェルには宛てられていない。ミシシッピ州選出の下院議員全員にも宛てられている。³¹⁾しかし、連邦下院ではミシシッピ州選出のレグランド・W・パーズが、かつての反乱11州で生命・財産・自由が確保されるか否かの問題³²⁾としてKKK法案を支持した。1873年の知事選では、KKKに対する穏健な対応をして白人を刺激しない政策のアルコーンと、厳罰で臨むべきだと考えるエイムズが対決することになった。

2. アデルバート・エイムズ政権下の暴動

連邦法による訴追は、KKKの活動を抑止する効果をもたらし、その効果は1871年、1872年と続いた。³³⁾1871年11月にアルコーンが知事を辞して連邦上院議員に就任したため、副知事のR・C・パワーズがその職務を引き継ぐことになった。パワーズは前任者と同様の政治的立場を維持したが、1873年の知事選の結果により状況は一変した。連邦上院議員になっていたアルコーンは知事選出馬を決めたが、ミシシッピ州の共和党は、メイン州出身のカーペットバッガーと称される北部出身の政治家エイムズを選出した。そのため、アルコーンは独立共和党として選挙戦を戦ったが、選挙結果は、エイムズ69,870票、アルコーン50,490票で20,000票近い差をつけてエイムズが当選した。³⁴⁾エイムズとアルコーンの就任演説を比べてみると両者の黒人の捉え方の相違が際立つ。

1874年1月22日、エイムズは就任演説で黒人に法的に与えられている

権利と特権を認めることを推奨し、黒人の無学と貧困は欠点ではなく不運のせいだとして、公正な対処が必要だと述べた³⁵⁾。一方、アルコーンは、1870年3月10日、解放黒人を「幼稚な人々」(an infant people)と表現し、自身の記憶では、その「幼稚な人々」に迷惑を被ったが、いまその人たちの自分への信頼には心を打たれる。しかし、知事就任にあたり、「もっとも深い不安」は黒人を法的に平等にすることが、言葉だけでなく、³⁶⁾現実に存在していることだと述べた。

1867年に再建法が適用されたミシシッピ州には、連邦復帰の要件として黒人投票権を州憲法で保障することが求められていた。その間、新しい州憲法が成立するまでは軍政が敷かれ、軍政府の知事をエイムズが務めた。その後、ミシシッピ州は要件を満たし、連邦に復帰して民政下で知事を選出することが可能となった。そして1870年、共和党のアルコーンが知事に選出された。しかし、アルコーンがKKKの暴力を抑えるために連邦軍出動を要請することに消極的であったため、黒人有権者の支持はエイムズに移り、1873年にはエイムズが知事に選出されたのである。

1874年の春から夏にかけて、エイムズがミシシッピ州から離れている時期に黒人の副知事アレグサンダー・K・デイヴィスが、エイムズによって任命された役人を自身の友人に代えたり、重罪人に恩赦を与えたり、あるいは賄賂を受け取り、囚人を釈放したりして、エイムズとの亀裂を生じさせた。共和党内部のこの分裂は民主党の共和党政権を打倒しようという時期と重なっていたのである³⁷⁾。

納税者はエイムズ政権へ圧力をかけた。ヴィックスバーグの改革共和党(アルコーン派)を核に1873年に結成されていた納税同盟は、1874年末になると全州に張り巡らされていた。納税同盟は民主党が主体であるが、共和党急進派(エイムズ派)のロバート・W・フルールノアも納税同盟支持に回った。共和党による納税強要に対する民主党保守派からの不満は誇張されていたという歴史家たちに対し、ウィリアム・ハリスは、税率以外の要因を提示した。生活必需品を入手するための借金に課される高い利率な

どを考慮すれば、再建期の住民にとっては重い負担になっていたと指摘した。³⁸⁾

1875年1月、高い税金に抗議する人々がジャクソンで大会を開き、「納税者の議会への要望書」を採択した。エイムズ政権の反応はその動機について懐疑的であったが、州司法長官のジョージ・E・ハリスはその要望書を強く支持し、人々が貧困と絶望の中にいることを認めた。しかし、州議会で主導権を握っていた共和党急進派（つまりエイムズ派）は、1874年12月、ウォーレン郡の郡都ヴィックスバーグでの人種問題の絡む騒乱事件（後述）を念頭に、要望書だけでなくエイムズ知事からの税に関する控え目な勧告さえも受け入れなかった。³⁹⁾

地方政府において保安官は税の徴収権と警察権を掌握していた。この要職に就いていたのがピーター・クロズビーという30歳の黒人であった。エイムズが北部で休暇を過ごしていた1874年7月4日、独立記念日を祝う白人たちが暴徒と化し、町は一触即発の状態に陥った。事態の悪化を受け、副知事デイヴィスが、そして急遽ミシシッピ州に戻ったエイムズも大統領に連邦軍をヴィックスバーグへ派遣するよう要請した。しかし、グラント大統領は連邦軍の派遣を見送った。派遣を見送った要因の一つは、州議会上院のチャールズ・E・ファーロンが、エイムズの要請は是認できないとして大統領に打電し、連邦軍派遣に反対する意見を表明していたためであった。一方、エイムズは、グラントが三期目の大統領選を視野に入れ、南部民主党の支持が意識したのではないかと推測した。⁴⁰⁾

クロズビー保安官は職に就くにあたり十分な保証金を預けていないということが知られていた。また、共和党の州会計検査員の調査により黒人の衡平裁判所事務官の不正が発覚した。さらに元巡回裁判所事務官で州の黒人教育長が公金横領で起訴され、有罪判決の証拠品が保安官室と衡平裁判所事務官室から無くなるという事件が起きたが、これらの書類は、衡平裁判所事務官の自宅に埋められているのが発見された。このような状況で、納税者大会が催され、1874年12月2日、上記の保安官と衡平裁判所事務

官の辞任を要求した。クローズビー辞任拒否の報が納税者大会に伝わると、500人強の人々が裁判所に大挙して、クローズビーを屈服させた。衡平裁判所事務官も辞任して州外に逃れた。クローズビーは州都ジャクソンにいるエイムズ知事と協議したが、知事は、具体案は提示できなかつた。⁴¹⁾『ニューヨーク・タイムズ』紙によれば、エイムズは、黒人民兵に武器が渡れば人種間戦争が起き、黒人が虐殺される結果になると予測し、クローズビーを復職させず、ヴィックスバーグの白人を非難しようとしなかつたのである。⁴²⁾

ウォーレン郡に戻ったクローズビーは、保安官職を取り戻すために黒人に向け、彼を支援するようにとの訴えを印刷して配布した。12月6日(日)、クローズビーは集会を開き、裁判所までデモ行進をする計画を支持者に訴えた。しかし隣接するルイジアナ州の白人らは黒人の行進阻止に動いた。翌7日(月)、早朝からヴィックスバーグ全域で鐘が鳴らされ事態の急が伝えられた。ヴィックスバーグにつながる道3本に黒人たちが集まりだしたのである。⁴³⁾総勢500名から600名という証言がある。⁴⁴⁾ヴィックスバーグ市長は戒厳令を発令し、もと南軍のホーラス・ミラー大佐を市の管理任務に就けていた。ミラーはクローズビーを発見・逮捕し、牢獄に入れた。12月7日に、黒人たちがこのままヴィックスバーグに向かえば、流血沙汰は避けられないとみたミラー大佐は、馬で乗り付け、黒人たちを率いていた元北軍の退役軍人アンドルー・オーウェンに黒人たちの解隊を命じた。オーウェンはウォーレン郡の保安官の命令だと抗議した。それに対し、ミラーは、クローズビーは職を解かれ囚人として刑務所内にいる旨を告げると、オーウェンはクローズビーとの面会を求めた。⁴⁵⁾牢獄にいたクローズビーはオーウェンに対し、騒動を起こさず、集まった黒人たちを家に帰してほしいと伝えた。⁴⁶⁾しかし無抵抗な黒人に対し白人は発砲を続けた。⁴⁷⁾その後数日にわたり、300名の黒人が殺害されたと見られている。⁴⁸⁾

以下の3例は、黒人夫婦について、妻のいるところで夫を殺害された妻の証言である。アン・トールズは、12月10日、夫が自宅から白人によつ

て連れ出され殺害された⁴⁹⁾。12月7日、ジェイコブ・バーローは、ヴィックスバーグ騒動の中心地からは大分離れていたが、命乞いもむなしく、馬で乗り付けた3人の白人の1人によって、妻の面前で頭を撃ち抜かれた⁵⁰⁾。同日、妻と買い物に来ていたミングル・グリーンは、馬で乗り付けた6名の白人に撃たれて殺害され、買った品物と金を奪われた。騒動とは無関係の殺人事件であった⁵¹⁾。

騒動が起きた翌8日、クローズビーは刑務所の中で、二度目の保安官辞任を迫られ、やむなく応じた。辞任の書類に署名しなければ、24時間以内に命を奪われると脅されたのであった。12月16日までクローズビーは拘束され、その後、護衛を付けられ列車でジャクソンに連れていかれた⁵²⁾。

12月17日、知事が臨時議会を招集し、上下両院は大統領に連邦軍の派遣を要請する合同決議を採択した。1月4日には、さらに調査委員会設置が決まり、選挙で選ばれた保安官はクローズビーの後任として就任する予定だった。しかし、黒人が投票を拒否したことで、さらに人種対立が鮮明化した。1月6日には連邦軍がヴィックスバーグに派遣され、1月18日には、連邦軍が現職の保安官を追い出し、クローズビーを復職させたのである⁵³⁾。

3. 1875年の選挙運動とその後

ミシシッピ州では連邦復帰の要件として1869年に憲法が批准されたため、州、地区、および郡の職員の定期選挙は奇数年に行われることになった。一方、国政選挙は偶数年に実施されることになっていたのも、ミシシッピ州では当時毎年選挙が行われることになっていた。しかし、経費節約のために1875年11月には連邦下院議員の選挙も含めて実施されることになった⁵⁴⁾。

1875年の選挙運動中、共和党の候補者たちは、群衆からの組織的な妨害や脅迫、さらには暗殺の危険にさらされていた。9月1日、ヤズー市で共和党員の保安官アルバート・T・モーガンの演説中に暴動が発生し、白

人1名と黒人3名が死亡するという惨事が起きた。さらに、9月4日、ハインズ郡クリントンで行われたバーベキュー大会では、共和党と民主党の候補者が演説を行っていたが、共和党候補者の発言が民主党支持者によって妨害され、暴動に発展した。コアホーマ郡フライアーズ・ポイントでは、黒人が公職を占めることに反対していたアルコーン連邦上院議員が、民主党のジェームズ・R・チャーマーズと手を組んだ結果、人種対立が助長され暴動に発展した。また、9月13日にはチャールズ・コールドウェル州議会上院議員が、会食中に後方から銃撃を受けて暗殺されるという事件が発生した。さらに、ヴィックスバーグのクローズビー保安官の場合と同様に、脅迫によって保安官に辞任を迫る圧力が各地で頻発していたのである。⁵⁵⁾

本節では、これまであまり触れられてこなかったエミート郡⁵⁶⁾での、暴力的な選挙運動やその後も続いた共和党とつながりのある公職者への執拗な立ち退き強要について考察する。

エミート郡は、ミシシッピ州南西部に位置し、南側でルイジアナ州のウェスト・フェリーシア郡と接している。エミート郡の保安官 A・パーカーは、1875年9月13日、エイムズ知事に書簡を宛て、次のように報告した。エミート郡の南部と接しているルイジアナ州のウェスト・フェリーシア郡では、5週間前に郡の公職者を襲い、すべて追放したが、州知事は保護したり、復職させたり動きはしていない。その恐怖政治の余波がエミート郡にもたらされ、民主党を勢いづけている。クリントンやヤズーでの衝突が全州に広がりそうだ。連邦軍の出動がなければ流血の事態は避けられないだろうというものであった。⁵⁷⁾投票日のおよそ2カ月後、1876年1月6日、パーカー保安官は、ミシシッピ州選出の黒人上院議員ブランチ・K・ブルースに宛てて次のように民主党の選挙戦術を伝えた。

民主党は全郡で中隊を組織し、中には軍事訓練をしているところもあり、軍隊式に士官を選出し、銃やライフル、ピストルで武装させました。日が暮れると、馬を乗り回し、黒人の家々を訪れ、共和党の候補

者に投票すれば、殺すと脅していました。(中略)郡都リパティに「50人委員会」というものを投票日の1カ月前に立ち上げ、毎週月曜に会合を開いていました。(中略)彼らはとんでもない決議をしましたが、その1つは、私(パーカー保安官、筆者注)と他の、郡の公職者を連れ出して、タールを塗って羽根を付けるという公開の刑罰を科し、郡境まで連れて行くというものであり、もう1つは私の首を吊るというものでした。(中略)これらの決議が執行されなかったのは、H・P・ハースト氏のもとで編成された小規模な民兵隊のおかげなのです。⁵⁸⁾

ハーストがエイムズ知事から准将に任命されたのは1875年10月1日のことである。ハーストは当時同郡サミット市の市長でもあった。ハーストが組織した民兵隊は白人の民主党員から成り立っていた。ただし、1名だけ共和党の候補者に投票した民兵を含んでいた。ハーストによれば、黒人の政治クラブは組織されていたが、武器は乏しかった。一方、白人の政治クラブはよく組織されてはいなかったが、武器は、銃やライフル、回転式拳銃などは充実していた。投票日当日、ハーストはローズ・ヒルに行った。問題が起きそうな地区であった。投票が始まると、民主党の政治クラブ員たちが整列して、選挙監査員の入れ替えを要求したが、ハーストは、自らは見物人だとして介入はしなかった。ハーストが投票箱に付けようとした見張り役を、入れ替わった選挙監査員は断ったのは、なんらかの不正を行うためであった。この不正に絡んでいたのが、ルイジアナ州ジャクソン出身のフランク・パワーという人物である。パワーが州境を越え、エミート郡南部を影響下に置くという状況の中で、ハーストは3名の共和党の公職者に身の安全を確保するためにエミート郡から逃れることを勧めた。3名とは、パーカー保安官、フレデリック・バレット教育長、ウィリアム・B・レッドモンド内国税収入庁副収税官であった。ハーストが相談したエイムズ知事はこの事態に対し無力であった。そのためハーストは、州民主党執行委員会委員長長のJ・Z・ジョージに直接相談した。ジョージは共和党の

公職者への脅迫は民主党の大義に反するとして、ハーストにその旨の書簡を携えさせた。11月3日、つまり投票日翌日のことである。⁵⁹⁾

副収税官ウィリアム・B・レッドモンドは連邦職員である。そのため、連邦職員としての義務遂行のために連邦軍に助力を要請する目的で、上司である内国税収入庁収税官 M・ショーネシーに 1875 年 12 月 27 日、報告書を送った。その中でレッドモンドは、11 月 2 日の投票日の 5、6 週間前からエミート郡の人々の組織的な武装抵抗により合衆国の法律で定められた義務を遂行できないと報告し、次のように述べた。

武装したデモ行進を頻繁に行い、暴力を振るうとの脅し、通りや公共の場所で、粗雑で無法な振る舞いをして群れを成し、文民当局を威圧し、共和党の公職者や名声のある市民も、暗殺の危険にさらされながら、このコミュニティで生活しています。⁶⁰⁾

ハーストはレッドモンドの身を案じて「ここではあなたの命は、保安官のパーカーの命よりも安全なんてことはありません」と告げたのである。⁶¹⁾

エミート郡の選挙結果について、レッドモンドに拠れば、共和党は、保安官、巡回裁判所事務官、衡平法裁判所事務官、財務担当者、検死官、5名の郡議会議員のうち3名が白人で占めた。課税額査定官と2名の郡議会議員に黒人が選出された。共和党への票の5分の4は黒人票であったため、黒人公職者皆無ということはありません。しかし、黒人の選出は民主党には我慢がならなかったのである。⁶²⁾

このように、ミシシッピ州エミート郡では 1875 年は選挙運動中だけでなく、11 月 2 日の投票日を過ぎても、共和党と関わりのある公職者の命を執拗に狙ったり、郡外へ追放しようとしたりした。さらに、政党間の対立には人種の偏見が分かちがたく絡み合っていたのである。

おわりに

本稿は、一旦収束した KKK による暴力が 1873 年のエイムズ政権発足を契機に再燃し、どのようなプロセスを経て 1875 年の「革命」に至ったかを究明した。その過程で、1871 年から 1875 年にかけてのミシシッピ州における政治暴力の問題を扱い、KKK の政治暴力と 1875 年の政治暴力の背景について分析している。修正第 13 条による奴隷解放、修正第 14 条による州による法の平等の保護、修正第 15 条による投票権の保障は、アメリカが奴隷制から脱却し、あらたな人種平等の可能性を切り開くために成し遂げた成果である。しかしこれらの修正条項はすべてのアメリカ人に歓迎されたわけではない。人種平等をめざす枠組みは共和党主導で形成されたものである。民主党はその枠組みを押し付けられたものとして受け入れたが、機会があればその制約を回避したいと考えていた。しかし、合法的な手段ではその枠組みを変えることができないため、民主党は暴力を用いて、共和黨員や黒人に対抗したのである。

一政党内の派閥は、ときに他党にとって有利に働くことがある。アルコーン知事の消極的な KKK 対策は、連邦政府の介入回避を目的にしていた。それは民主党の政策と一致していた。アルコーン知事および後任のパーワーズ知事の下では、共和党急進派のエイムズ政権時と比べて暴力が抑制されていたのである。これは、民主党の意向と共和党穏健派の利害が一致していたことが背景にある。

一方、KKK 裁判では有罪判決が下されても、重い量刑はほとんど科されなかった。このことが、のちの暴力を潜在的に温存させたと考えられる。この潜在していた暴力が、エイムズ政権下で表面化した。重い税負担へ抗議運動や一部共和党公職者の横領といった問題も重なり、結果として、人種にかかわらず、潔白な共和党公職者にも不満の矛先が向けられるようになったのである。

共和党の公職者を排除しようとする動きは、KKK が活発だった時代にも見られたが、後年のような組織的な活動ではなかった。再建期の KKK

には州全体で活動するほどの組織性がなかったのである。しかし、1875年のミシシッピ州では、共和党打倒というスローガンと民主党の組織的な暴力が州全体の政治情勢に大きな影響を与えていた。そんな中、民主党員でありながらエイムズ知事によって民兵隊の編成を任されたH・P・ハーストは、共和党員であるA・パーカー保安官や同じく共和党員の連邦職員ウィリアム・B・レッドモンドの安全を守るために尽力した。その際、ミシシッピ州民主党執行委員会委員長のJ・Z・ジョージに助力を得ることができたのである。

レッドモンドの証言によれば、ミシシッピ州民主党は黒人の公職者に対して強い拒否感を抱いていた。1876年にはエイムズを辞任に追い込み、黒人を政治から排除しようとする派閥が勢力を増していったのである。この流れの中で、1890年に州憲法が改正され、黒人の投票権が剥奪されることになった。この憲法改正を主導したのは、かつてハーストに対し、「民主党の大義に悖る暴力は容認できない」という文書を書いたJ・Z・ジョージであった。暴力によらずに黒人から合法的に投票権を奪うことで、政権を維持する手段を選んだのである。しかし、これは言うまでもなく、再建期の修正条項が掲げた理念から程遠く、奴隷制の理念に近いのである。

注

- 1) Vernon L. Wharton, *The Negro in Mississippi, 1865-1890* (New York: Harper & Row, Publishers, 1947), 167.
- 2) James W. Garner, *Reconstruction in Mississippi* (New York: Macmillan Company, 1901), 338-53, 372-414.
- 3) Wharton, *The Negro in Mississippi*, 198.
- 4) William C. Harris, *The Day of the Carpetbagger: Republican Reconstruction in Mississippi* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1979), 650-90.
- 5) エリック・フォナーはハリスの研究(上記注4)の670-87頁に関し、「ハリスの記述は、1875年の暴力の程度とその衝撃が結果に与えた影響を深刻なほどに過小評価している」と主張している(Eric Foner, *Reconstruction: America's Unfinished Revolution, 1863-1877* (New York: Harper & Row, Publishers, 1988), 562, note 90)。

- 6) Foner, *Reconstruction*, 562, 563.
- 7) Nicholas Lemann, *Redemption: The Last Battle of the Civil War* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 2006), xi.
- 8) Vernon L. Wharton, "The Race Issue in the Overthrow of Reconstruction in Mississippi: A Paper Read before the American Historical Association, 1940," *Phylon*, vol. 2 (4th Qtr. 1941): 368-369.
- 9) United States Congress, *Report of the Joint Select Committee to Inquire into the Condition of Affairs in the Late Insurrectionary States*, vol. 1 (Washington D. C.: U.S. Government Printing Office, 1872), 73.
- 10) Testimony of A. P. Huggins, *United States Congress, Testimony Taken by the Joint Select Committee to Inquire into the Condition of Affairs in the Late Insurrectionary States*, vol.11 (Washington D. C.: U.S. Government Printing Office, 1872), 270-73; Garner, 347-48. 連邦議会は1871年、KKKの実態を調査するために両院特別合同委員会を設置した。委員会はワシントンと南部諸州で公聴会を催し、報告書を第1巻に、第2巻から第13巻までは証言集としてまとめ、1872年に連邦議会に提出した。ミシシッピ州については第11巻と第12巻にまとめられている。本稿では、以下、それぞれ *KKK Report 11* および *KKK Report 12* と表記する。
- 11) Testimony of A. P. Huggins, *KKK Report 12*, 820.
- 12) Testimony of Joseph Davis, *KKK Report 12*, 810; Everette Swinney, *Suppressing the Ku Klux Klan: The Enforcement of the Reconstruction Amendments, 1870-1877* (New York: Garland Publishing, Inc., 1987), 250.
- 13) Testimony of G. Wiley Wells, *KKK Report 12*, 1151, 1152. Wells は地区検事長。
- 14) Allen W. Trelease, *White Terror: The Ku Klux Klan Conspiracy and Southern Reconstruction* (Baton Rouge: Louisiana State University Press), 290.
- 15) *Ibid.*
- 16) *Ibid.*, 291.
- 17) Testimony of J. P. Walker, *KKK Report 11*, 31.
- 18) *KKK Report 11*, 8, 31, Garner, *Reconstruction in Mississippi*, 349, 350
- 19) Testimony of W. S. Patton, *KKK Report 11*, 127.
- 20) Testimony of A. C. Freideritce, *KKK Report 11*, 155-56.
- 21) Testimony of O. C. French, *KKK Report 11*, 10.
- 22) Testimony of Robert J. Mosely, *KKK Report 11*, 25.

- 23) Testimony of O. C. French, *KKK Report* 11, 10.
- 24) Testimony of French, *KKK Report* 11, 10; Testimony of R. J. Moseley, *KKK Report* 11, 134.
- 25) Trelease, *White Terror*, 293.
- 26) *KKK Report* 12, 1148, 1149.
- 27) Harris, *The Day of the Carpetbagger*, 403.
- 28) Stephen Cresswell, "Enforcing the Enforcement Acts: The Department of Justice in northern Mississippi, 1870-1890," *Journal of Southern History* 53, no. 3 (August 1987), 433.
- 29) *Ibid.*, 435, 438, 439.
- 30) Harris, *The Day of the Carpetbagger*, 404.
- 31) *Congressional Globe*, 42nd Congress, 1st Session, 571.
- 32) *Ibid.*, 511, 512; Herbert Aptheker, "Mississippi Reconstruction and the Negro Leader Charles Caldwell," *Science & Society*, no. 4 (Fall, 1947), 356; Trelease, *White Terror*, 300.
- 33) Swinney, *Suppressing the KKK*, p. 268; Wharton, *The Negro in Mississippi*, 182.
- 34) *Report of the Select Committee to Inquire into the Mississippi Election of 1875*, vol. 1 (Washington, DC: Government Printing Office, 1876), *Documentary Evidence*, 138. 連邦議会上院は1876年3月31日、人種による投票権剝奪を禁ずる修正第15条違反を調査する5名から委員会設置の決議を行った。マサチューセッツ州選出のGeorge S. Boutwellを委員長とする同委員会は、1876年に証言と文書証拠を含む2巻本の報告書としてまとめた。本稿では以下、同報告書を *Boutwell Report* と表記する。
<https://archive.org/details/mississippiin18701unit/mode/2up>
- 35) *Journal of the Senate of the State of Mississippi*, 1874, 25.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uiug.30112118316295&seq=31>
- 36) *Journal of the Senate of the State of Mississippi*, 1870, 53.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=uiug.30112118311692&seq=59>
- 37) Harris, *The Day of the Carpetbagger*, 620-21; Garner, *Reconstruction in Mississippi*, 298, 299.
- 38) *Ibid.*, 624-27.
- 39) *Ibid.*, 630, 631.
- 40) Lemann, *Redemption*, 71-4; Harris, *The Days of the Carpetbagger*, 636.
- 41) Garner, *Reconstruction in Mississippi*, 331-32; Harris, *The Days of the*

Carpetbagger, 646, 647.

- 42) *New York Times*, December 25, 1874.
- 43) Harris, *The Day of the Carpetbagger*, 647, 648.
- 44) Testimony of C. E. Furlong, *Report of the Joint Special Committee Appointed to Investigate the Late Insurrection in the City of Vicksburg, Warren County* (Jackson, Mississippi: Pilot Publishing Company, 1875), 234. この史料はヴィックスバーグでの騒動についてミシシッピ州議会が公聴会を開いてまとめた調査報告書である。以下、本稿では *Insurrection* と表記する。
<chrome-extension://efaidnbnmnibpcjpcglclefindmkaj/https://tile.loc.gov/storage-services/public/gdcmassbookdig/reportofjointspe00miss/reportofjointspe00miss.pdf>
- 45) Lemann, *Redemption*, 87, 88.
- 46) Testimony of Peter Crosby, *Insurrection*, 46.
- 47) Lemann, *Redemption*, 88.
- 48) Foner, *Reconstruction*, 558.
- 49) Testimony of Anne Toles, *Insurrection*, 196.
- 50) Testimony of Herlita Barlow, *Insurrection*, 204.
- 51) Testimony of Sarah Jane Green, *Insurrection*, 200.
- 52) Testimony of Peter Crosby, *Insurrection*, 47, 48
- 53) Garner, *Reconstruction in Mississippi*, 335, 336.
- 54) John R. Lynch, *The Facts of Reconstruction*, 127, 128.
- 55) Garner, *Reconstruction in Mississippi*, 375-81; Harris, *The Days of the Carpetbagger*, 659-74.
- 56) エミート郡については Garner が *Reconstruction in Mississippi* で、394-95 頁にかけてわずか 11 行で扱っているのみである。
- 57) *Boutwell Report*, vol. 2, *Documentary Evidence*, 6.
- 58) *Ibid.*, 7.
- 59) Testimony of H. P. Hurst, *Boutwell Report*, vol. 1, 86-91.
- 60) Testimony of William B. Redmond, *Boutwell Report*, vol. 1, 85.
- 61) *Ibid.*
- 62) *Ibid.*, 7

Shakespeare and Emotions: Hamlet on Grief

Akiko Ikeda

Abstract

We all experience grief in response to the loss of someone with whom we have a connection. The psychiatrist Elisabeth Kübler-Ross (1926–2004) proposed the now-popularized five stages of grief, consisting of Denial, Anger, Bargaining, Depression and Acceptance. She originally developed this model for terminal patients as they faced their mortality, but it has since been applied broadly to the experience of loss. *Hamlet* is believed to have been written between 1599 and 1601. Many suggest that Shakespeare drew on his own life to develop the grief depicted in *Hamlet*. In the play, Hamlet mourns the loss of his father. Shakespeare himself had just lost his son, Hamnet, at the age of eleven, who is believed to have been buried in 1596. While there are pros and cons for an autobiographical reading, we all agree that grief is represented in *Hamlet*. This paper focuses on Hamlet's grief, examining it using the five stages of grief as a lens.

The reality is that you will grieve forever. You will not 'get over' the loss of a loved one; you will learn to live with it. You will heal and you will rebuild yourself around the loss you have suffered. You will be whole again but you will never be the same. Nor should you be the same, nor would you want to.¹⁾

We all experience grief in response to the loss of someone with whom we have a connection. The word is derived from the Latin word "gravis", meaning heavy, and the verb "grieve" (from "gavare") meaning "to burden".²⁾ Indeed, the deep sadness of grief makes your heart heavy and burdens your

mind. In Early Modern England, it was thought that extreme sadness or grief could be a cause of death, leading to physical dysfunction, which in fact has been confirmed by contemporary research.³⁾ Sullivan then suggests the concept of worldly grief and godly sorrow in reference to Aristotle's interpretation. The former refers to things from earthly misfortune, "such as financial hardship or the death of a loved one," whereas the latter arises from "awareness of one's spiritual inadequacies and corruption"⁴⁾. Sorrow from earthly misfortune has since evolved and one contemporary interpretation of grief is the acute pain accompanying loss or bereavement. Above is a quote from Elisabeth Kübler-Ross, who proposed the now-popularized five stages of grief, consisting of Denial, Anger, Bargaining, Depression and Acceptance.⁵⁾ She originally developed this model for terminal patients as they faced their mortality, but it has since been applied broadly to the experience of loss. Here, a common misunderstanding is that going through the different phases of grief leads to a resolution. However, as the quote above reflects, there is no final resolution: you have to recreate your world bearing the loss.⁶⁾

Hamlet is believed to have been written between 1599 and 1601.⁷⁾ In fact, many suggest that Shakespeare developed the grief depicted in *Hamlet* by drawing from his own life. In the play, Hamlet loses his father. Shakespeare himself had just lost his son, Hamnet, at the age of eleven, who is believed to have been buried in 1596.⁸⁾ A modern writer, Maggie O'Farrell dove into her imagination and created an intriguing story called *Hamnet*, which won the 2020 Women's Prize for Fiction. It was put on stage at the Royal Shakespeare Company in 2023. Meanwhile, Greenblatt points out that the Reformation, during which the Church of England broke away from the Catholic Church, changed the funeral ceremony.⁹⁾ Catholic rituals previously permitting mourners to express their grief in certain ways were now banned. This might have exacerbated Shakespeare's grief over his son. Certain ceremonies have always been essential in coping with grief. Ceremony allows you to share your grief and can ease your pain.¹⁰⁾ When you are deprived of such an opportunity, you need to have a substitute. Then Shakespeare may have turned to theatre as its substitute.¹¹⁾ While there are pros and cons for an auto-

biographical reading, we all agree that grief is represented in *Hamlet*¹²⁾. In the play, a ghost informs Hamlet how his father, the king, died. Hamlet's unresolved grief intensifies the political violence and social chaos. This paper focuses on Hamlet's grief, examining it using the five stages of grief as a lens.

Anger

Having lost his father four months prior, Hamlet has been grieving the loss and wearing black. He has also been angry, as the court of Denmark is in a festive mood to celebrate the wedding of his uncle Claudius, the new king, and his mother Queen Gertrude. Claudius announces their marriage as a necessary union to stabilize Denmark, "this warlike state" (1.2. 9) or the "state to be disjoint and out of frame" (1.2. 20), caused by the death of King Hamlet. After asking Laertes, Ophelia's brother, about his request and intimately calling his name many times, Claudius addresses Hamlet at last. He calls Hamlet "my son" (1.2. 64), but casually accuses his continued state of mourning for his dead father. Gertrude, who is supposed to share the deep sadness with Hamlet, even says to him:

Good Hamlet, cast thy nighty color off
And let thine eye look like a friend on Denmark.
Do not for ever with thy veiled lids
Seek for thy noble father in the dust.
Thou knowst '*tis common* [emphasis added]— all that lives must die,
Passing through nature to eternity. (1.2. 66-71)¹³⁾

Hamlet acknowledges that "it is common" that people eventually die. She follows up, asking "Why *seems it so particular* [emphasis added] with thee?" (1.2. 74-75): If you agree then why does it seem so personal to you? This is when, Hamlet becomes very upset:

'Seems', madam? Nay, it is. I know not 'seems'.

'Tis not alone my inky cloak, good mother,
 Nor customary suits of solemn black,
 Nor windy suspiration of forced breath,
 No, nor the fruitful river in the eye,
 Nor the defected 'haviour of the visage,
 Together with all forms, moods, shows of grief,
 That can denote me truly. These indeed 'seem',
 For they are actions that a man might play;
 But I have that within which passeth show,
 These but the trappings, and the suits of woe. (1.2. 74-84)

Hamlet is right. The deep sadness that comes from losing someone will always remain, as well as the attachments and memories linked to that person. We can all acknowledge that everyone will experience this. *It is common*, as Kübler-Ross says that "each grief has its own imprint, as distinctive and as unique the person we lost"¹⁴. Hamlet states his grief is real, rising from the soul, it is not just appearance or a show you can perform. However, Claudius argues as follows:

'Tis sweet and commendable in your nature, Hamlet,
 To give these mourning duties to your father,
 But you must know your father lost a father,
 That father lost, lost his- and the survivor bound
 In filial obligation for some term
 To do obsequious sorrow. But to preserver
 In obstinate condolment is a course
 Of impious stubbornness, 'tis *unmanly grief*,
 It shows a will most *incorrect to heaven* [emphasis added],
 A heart unfortified, a mind impatient,
 An understanding simple and unschool'd; (1.2.87-97)

While he sees a certain period of mourning as a son's duty and obligation, it should be limited. Claudius thinks Hamlet should get over his deep sadness

or risk not being “manly”. Continuing to be immersed in “unmanly grief” as he is doing now is not natural and even incorrect behavior towards heaven, especially given the state of Denmark, which needs order.

In those days and arguably still today, some held the belief that women have more difficulty holding in grief or expressing it in words.¹⁵⁾ Thomas Wilson (1524–1581) described that the least rational people mourn the most, and more specifically as women commonly rather than men, rude people rather than godly folk, the unlearned rather than the learned, foolish folk sooner than wise men, children rather than young men.¹⁶⁾ Adopting this perspective, Gertrude overcomes her grief in a manly and proper manner, making the next move swiftly, whereas Hamlet is simply prolonging it and becoming unmanly. Hamlet’s attitude is even seen as defying Heaven or rather the accusing tone of Gertrude and Claudius may be a response to the discomfort the experience in the presence of Hamlet’s pain. This is because it leads others to consider their own: “it reminds them of how precarious their lives are too”¹⁷⁾. Gertrude may feel her own awkwardness about marrying again so soon or the fact that she is marrying her brother-in-law. Of course, Claudius, the mastermind creating the pain, does not want to be reminded of what he did to his own brother. In any case, no matter how the new king and his mother protest, Hamlet is angry and cannot stand his current reality: how can they forget the late king, his father, so quickly?

Denial

“The denial often comes in the form of our questioning our reality: is it true?”¹⁸⁾ Right after Claudius and Gertrude leave, Hamlet laments:

How weary, stale, flat, and unprofitable
Seem to me all the uses of this world!
Fie on ’t, ah fie; ‘tis an unweeded garden
That grows to seed; things rank and gross in nature
Process it merely. That it should come to this!
But two months dead-nay, not so much, not two-

So excellent a king,

(1.2. 133-139)

Hamlet remembers how loving his father was to his mother, so much so that he wouldn't even allow the gentle breeze of heaven to blow too roughly on her face (1.2. 140-141). He cannot bear with his parents' memory, saying "Must I remember?" (1.2. 123). Hamlet also recalls how Gertrude loved the late King father so much, adored him, as though the more she had of him the more she wanted him (1.2. 143-144), but how quickly she changed and see how it is now! These words lead to Hamlet's well-known line: "Frailty, thy name is woman" (1.2. 146). He is so upset over the reality in the aftermath of his father's death and cannot believe how things have developed. "The time is out of joint" (1.5. 196).

Also, the existence of the deceased person can be felt as very real even though time has passed. In the play, Hamlet remarks "how cheerfully my mother looks, and my father died within these two hours" (3.2. 119-120), observing Gertrude and Claudius. Ophelia protests that it's been "twice two months" to which Hamlet replies:

So long? Nay, then, let the devil wear black, for
I'll have a suit of sables! O heavens – die two months
ago and not forgotten yet? Then there's hope a great
man's memory may outlive his life half a year! But by'r
Lady, 'a must build churches then, or else shall 'a
suffer not thinking on –

(3.2. 122-127¹⁹)

The sarcastic tone of these lines reveals how he feels. He also misunderstands or slips saying "two months" in the previous lines. In any case, Hamlet cannot believe his father has already been gone for four months. He feels like it happened just yesterday. It was so sudden that Hamlet has not been able to catch up with the change. Having lost my father suddenly a while ago, I understand this feeling. A friend who lost her father about 25 years ago told me that the sense of time hasn't changed. There may be individual differences, but psychological time influences everyone to a certain degree.

For Hamlet, his father still exists in his reality, and he cannot believe how everyone else, especially his mother, seems to have forgotten about him.

Hogan suggests we sometimes unconsciously anticipate interaction with the deceased through cognitive routines. For example, his mother was watching a TV show that her mother would have found interesting. So she picked up the phone and began dialing the number, forgetting that her mother was gone.²⁰⁾ Here, even for a short period, his mother was expecting to talk to her mother, forgetting she was no longer alive. He then suggests this kind of experience may cause more pain “because it involved a sudden and sharp shift from anticipated security to the complete loss of that sense of security, from anticipated comfort, warmth, and so on to the complete loss of these. Such violated expectations may be part of the reasons for the tendency of grief to occur in waves.”²¹⁾

Similarly, we can think of dreams involving seeing or meeting deceased loved ones. For example, my father appeared in a dream a little while ago. I was sitting alone on an airplane, when I saw my father boarding. I asked him why he was on the plane, and he replied that he was traveling to a conference. The relief and happiness I felt thinking that I could finally talk to him again and arrange a time to catch up. I woke up with that in mind, but realized it was just a dream, and he was gone. The sadness I felt went deep. I imagine Hogan’s mother felt something similar. You may want to deny the world without the loved one, but in reality the person is gone. As Hogan suggests, the wave of experiencing the sharp shift from security or relief to the pain of loss leaves us feeling a profound sadness.

What you miss most in this context is communication. You may have many photos and memories of the loved one, but the communication only goes one way. We may want to have a dream to meet and talk to a deceased loved one, but it does not happen so often. It may progress to a wish for them to have the ability to appear as a ghost or spirit. In fact, this is how the bereaved can feel after losing a loved one during an earthquake or tsunami.²²⁾ In the play, a ghost resembling the late king appears to talk to Hamlet. This is examined in the following section.

Bargaining

Bargaining here will be used slightly differently than the way described by Kübler-Ross. According to her, during this phase, “we want life returned to what it was” so we are trapped in “if only” or “what if” statements. If only I had noticed the change? What if I quit drinking for the rest of my life? Maybe then reality could revert back to as it was or we might be able to “negotiate our way out of hurt”. However, I would take a literal meaning here and start by examining the ghost scene.

Hamlet hears from Horatio and two others that they have seen a ghost very much resembling the late king, Hamlet’s father. Hamlet eventually meets the ghost who beckons him closer. Horatio and others try to stop Hamlet, who is willing to follow the ghost, warning that the spirit could cause him harm and make him go mad. However, Hamlet, wishing to know the truth and the ghost’s intention, decides to confront it and follows it. Then, the ghost presents itself as his father’s spirit and informs Hamlet of the horrible truth: his father was murdered by his uncle Claudius and urges Hamlet to take revenge. Learning the shocking news, Hamlet is at a loss as to what to do. Moreover, he is uncertain whether this is really his father’s spirit.

After a while, players begin arriving at the court. Hamlet is moved by the emotional performance of a player. This individual was passionate with “tears in his eyes, distraction in his aspect,/ a broken voice” (2.1. 549-550) without any motivation other than a fictionalized role. He then blames himself for having done nothing despite having cause and motivation.

Yet I,
A dull and muddy-mettled rascal, peak
Like John-a-dreams, unpregnant of my cause,
And can say nothing – no, not for a king,
Upon whose property and most dear life
A damn’d defeat was made. Am I a coward? (2.2. 561-566)

Remember, however, that he is uncertain whether the ghost is his father's spirit and does not know whether he is telling the truth: "The spirit that I have seen/ May be a devil, and the devil hath power/ T'assume a pleasing shape" (2.2. 594-596). Hamlet, then, devises a plot. He asks the players to perform a scene mirroring the circumstances of his father's death, as recounted by the ghost. Hamlet asks Horatio to observe Claudius:

If his occulted guilt
Do not itself unkennel in one speech,
It is a damned ghost that we have seen,
And my imaginations are as foul
As Vulcan's stithy. Give him heedful note;
For I mine eyes will rivet to his face,
And after we will both our judgments join
In censure of his seeming. (3.2. 80-87)

In a way, Hamlet encourages the performance as a way to bargain and discover the truth about both his father's spirit, whether it really is his father, and the cause of the late King's death. He also feels guilty for having done nothing. Guilt can arise during the bargaining phase. Eventually, Hamlet believes he uncovers the truth by observing Claudius' reaction to the play, and he is determined to exact revenge.

Depression

Depression is not a sign of mental illness. It is the appropriate response to a great loss. We withdraw from life, left in a fog of intense sadness, wondering, perhaps, if there is any point in going alone. Why go on at all?²⁶⁾

Once Hamlet meets the ghost, he decides to pretend to be mad to examine the situation. However, without his disguise, it becomes evident that he has been extremely depressed about his father's death and subsequent events,

particularly his mother's hasty marriage. Hamlet is incredibly weary of the world from the start.

Oh that this too too sullied flesh would melt,
That and resolve itself into a dew,
Or that the Everlasting had not fix'd
His cannon 'gainst self-slaughter. (1.2. 129-132)

He wishes he could disappear from the world. Regarding his lethargic state, he says: "I have of late, but where/fore I know not, lost all my mirth, forgone all custom of exercises; and indeed it goes so heavily with my disposition" (2.2. 295-298). He even assumes his "weakness" and "melancholy" might be the reason he sees "the spirit" resembling his father, but that it "may be a devil" (2.2. 594-597). He states that his depression is so profound that it may have caused him to believe the ghost resembles his father. In fact, W. W. Greg considers communications between the Ghost and Hamlet to be "no more than hallucinations of Hamlet's own mind"²⁷⁾. However, this suggestion forgets that Horatio and two other guards also saw the ghost.

Meanwhile, many scholars have discussed how Hamlet's mental state may have delayed his ability to exact revenge for his late father. For example, the well-known critic A. C. Bradley thought that Hamlet's inability to find resolution was due to profound melancholy, advising readers to see melancholia as mental disease.²⁸⁾ There are various opinions, but some say melancholy in the seventeenth century would be much like today's depression, so one could say Hamlet was suffering from depression, which delayed his revenge.²⁹⁾ Regarding this issue, Sadowsky, who traces back the concept of depression back to the ancient Greek physician, Hippocrates, points out that neither melancholia nor depression has "a perfectly stable meaning".³⁰⁾ While they "cannot be identical," he does admit a relation between them. He then suggests that the two terms have been connected historically. According to him, doctors started using "depression" to replace "melancholia," which implied "a known cause for a sickness with uncertain causes"³¹⁾ in the early 1900s. He continues:

For most of European history,³³ “melancholia” and “melancholy” were used interchangeably to refer to an illness. Depression came into use in the eighteenth century, but originally referred to a mood. Then around the turn of the twentieth century, “melancholy” and “depression” began to trade places. Depression could still refer to [a] mood, but often meant illness. Melancholy came more often to refer to [a] mood.³²⁾

As Bradley also points out, the definition and use of “melancholy” and “depression” has changed over time.³³⁾ In any case, Hamlet’s state reflects the symptoms above, so one could claim his “depressive illness” delayed the revenge.³⁴⁾

Regarding the transition from grief to depression, Fuchs suggests not seeing it as an increase in the amount of grief, but rather as the inability to maintain an attitude of melancholic acceptance towards transience.³⁵⁾ Grief as an immediate reaction to the loss of a loved one implies not only intense feelings of pain, sorrow, and longing for what has been lost, but also includes a pattern of symptoms that, to a certain extent, resembles depression. These cover feelings of dejection, despair, sometimes also remorse and guilt, which are directed toward omissions or faults that one has committed regarding the deceased.³⁶⁾

Sadowsky also tries to figure out when or how sadness in response to a loss becomes an illness, demonstrated by more pervasive and persistent symptoms, known as melancholia and then depression. His research covers many cultures and asserts that there is no single way or cure given the complexity of the issue. Take the Japanese term for depression, “utsu”, for example. We lack motivation and experience sleeplessness or weariness while in a state of “utsu”. In addition, we lack the conscious awareness of what has been lost while in this state. This contrasts greatly from “mo” (or mourning). While the symptoms of the mourning process may resemble those of “utsu”, mourners know what they have lost. The emptiness they feel is a necessary part of the process.

The issue has also been discussed by Freud in his well-known paper,

“Mourning and melancholia”, in which mourning is a conscious work knowing the lost target, whereas in melancholia, the process takes place at an unconscious level without knowing the specific target³⁷⁾. During the mourning process, we need time to accept reality without the lost loved one, which is a healthy psychological process. In this context, Hamlet may have been in mourning with symptoms of depression, but it was a proper process to get through his grief. Struggling with reality by being angry, denying, and bargaining marks a difference from simply being “depressed,” which finally leads him to accept reality as the following shows.

Acceptance

There is special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come. The readiness is all. (5.2. 215-218)

Hamlet utters these lines just before a duel with Laertes. Until this point, Hamlet has gone through so much after his father's death. Aware that his life is in danger, Claudius sends Hamlet to England all the while plotting to kill him. Noticing something afoul, Hamlet “devis'd a new commission,” (5.2. 32) conspiring to kill Rosencrantz and Guildenstern, his former friends who are acting as spies for Claudius, and returns. If he were just depressed, he couldn't have acted so energetically. On the way back to Denmark, Hamlet and Horatio come across Ophelia's funeral procession. Ophelia, once loved by Hamlet then rejected because he thought she betrayed him, must have also been experienced extraordinary grief, losing her own father suddenly and being rejected by her ex-lover. Hamlet accidentally killed her father, Polonius, mistaking him for Claudius. She then ends up losing her mind and drowns herself. Right before finding out that the procession is for Ophelia, Hamlet and Horatio watched the grave digger and begin a conversation. They find “Yorick's skull, the King's jester” (5.1. 175), and Hamlet's thoughts go to one's life. He also thinks of Alexander the Great, who “returneth to dust,

the dust is earth, of earth we make laom,” and “Imperious Caesar, dead and turn’d to clay” (5.1. 206). How fleeting our life is.

All this time, Hamlet has been very active although he has often been regarded as lacking in decisive action. During the stage of acceptance, we accept “the reality that our loved one is physically gone and” recognize “that this new reality is the permanent reality.”³⁸⁾ Events happen one after another, and Hamlet has been trying to survive there, dealing with each incident. In a way, he has tried to rebuild his new reality and not hang on to the past. The play ends with a duel scene between Laertes and Hamlet. Just before it starts, Hamlet has an ill feeling, but keeps going despite Horatio’s protest, not to fight. Hamlet then says the above lines as if he realizes that what will be, will be.³⁹⁾

Laertes, having lost his father and sister because of Hamlet directly and indirectly, feels like he is also losing his mind. He curses Hamlet and laments Ophelia’s death: “O, treble woe/ Fall ten times treble on that cursed head/ Whose wicked deed thy most ingenious sense/ Depriv’d thee of” (5.1. 239-242). His grief has turned into anger towards Hamlet, and Claudius tries to exploit it.

During the fight, the queen dies of poisoned wine that Claudius had prepared for Hamlet, Laertes strikes Hamlet with a poisoned sword, also plotted by Claudius, which ultimately claims Hamlet’s life. Hamlet strikes back at Laertes with the same sword, and finally, kills Claudius before dying.

This paper has examined Hamlet’s grief using Kübler-Ross’s five stages of grief as a lens. Hamlet moves through all of the stages though perhaps not in order. He experiences anger and wants to deny what’s happening around him. He then tries to bargain with the ghost as a way to confront reality. He has been depressed throughout all of this, but this was the necessary path to mourn his father. Finally, he accepts reality and is about to rebuild his new world. You could apply the stages of grief not only to Hamlet, but to all of the major characters in the play who has lost a loved one and see how it works. It is not necessary to progress through these stages in linear order, nor does every stage have to be experienced, but they are helpful in examining

one's grief. After all, grief is inescapable. You must deal with the loss and construct a world again with the loss. It is a tragedy that Hamlet dies before having a chance to rebuild his world again.

Notes

- 1) Elisabeth Kübler-Ross & David Kessler, *On Grief and Grieving* (Kindle edition), location no. 3152.
- 2) Grief(n.) *Online Etymology Dictionary* (<https://www.etymonline.com/word/grief/>); “Experiencing the Mortification: Jung on Grief, Grieving and Mourning” (<https://jungiancenter.org/experiencing-the-mortification-jung-on-grief-grieving-and-mourning/>).
- 3) Erin Sullivan, “Grief: Passion, Action, and the Possibility of Self-knowledge” *Beyond Melancholy: Sadness and Selfhood in Renaissance England*. 2016; Stephen Pender, “Rhetoric, Grief, and the imagination in Early Modern England” *Philosophy & Rhetoric*. 2010, vol. 43 (1), pp. 54-85; Stephanie Hairston, “How Grief Shows Up In Your Body” *WebMD.com* (<https://www.webmd.com/special-reports/grief-stages/20190711/how-grief-affects-your-body-and-mind>). 2019.
- 4) Sullivan, pp. 29-30.
- 5) “Five stages of Grief” *Grief.com* (<https://grief.com/the-five-stages-of-grief/>).
- 6) “The Stages of Grief – Some misconceptions about Kübler-Ross’s work” *Futurelearn.com* (<https://www.futurelearn.com/info/courses/dealing-with-loss-covid-19/0/steps/114543>).
- 7) Harold Jenkins, “Date.” *Hamlet*. (The Arden Shakespeare Second Series), p.1; RSC. “Date and Sources.” (<https://www.rsc.org.uk/hamlet/about-the-play/dates-and-sources>).
- 8) Paul Edmondson, “Is All of this True?” *Shakespeare Birthplace Trust blog*, 2019. (<https://www.shakespeare.org.uk/explore-shakespeare/blogs/is-all-of-this-true/>).
- 9) Stephen Greenblatt, *Will in the World: How Shakespeare Became Shakespeare*. 2005, pp. 311-322.
- 10) Susumu Shimazono, Toji Kamata, & Tsunetaka Sakuma, *Grief Care no Jidai* (The Times of Grief Care). 2019.
- 11) Greenblatt, pp. 311-322.
- 12) Patrick Hogan suggests writing Hamlet could have eased the pain of loss Shakespeare suffered in his book *What Literature Teaches Us about Emotion*. 2011, p. 122. Whereas James Shapiro warns to interpret autobiographical aspects in *Contested Will: Who Wrote Shakespeare?* 2011, pp. 300-301.
- 13) All citations from *Hamlet* taken from *Hamlet* (Arden Shakespeare Third Series, ed. Neil Taylor & Ann Thompson, 2006).
- 14) Kübler-Ross & Kessler, location no. 2838.

- 15) Robert Burton, "Symptoms of Maids', Nuns', and Widows' Melancholy," *The Anatomy of Melancholy*. (1621), 2023, pp. 403-404.
- 16) Plutarch. *Moralia*. 2.165-67. Cited in Wilson, *The Art of Rhetoric*, p. 112.
- 17) Kübler-Ross & Kessler, location no. 3134.
- 18) Kübler-Ross & Kessler, location no. 305.
- 19) This is the scene in which Hamlet has *The Murder of Gonzago* performed, through which he tries to reveal whether Claudius killed his father, and people are chatting before the play starts.
- 20) Hogan, pp. 117-118.
- 21) Hogan, p.118.
- 22) Eisuke Wakamatsu, *Nakimonotachi no Otozure (The Visit of the Deceased)*. 2022, p. 21. In Iwate prefecture (Japan), this commonly shared wish has led to the popularity of the 'wind phone' for those who wish to speak to deceased loved ones. Created by Itaru Sasaki, he set up an old telephone booth in his garden in order to "talk" to a deceased cousin. Following the 2011 Tōhoku Earthquake and Tsunami, many people have visited there.
- 23) Kübler-Ross & Kessler, location no. 407.
- 24) Kübler-Ross & Kessler, location no. 419.
- 25) Ibid.
- 26) Kübler-Ross & Kessler, location no. 466.
- 27) He discusses the issue with respect to other works, including *Macbeth and Richard III*. p. 407.
- 28) John Russel Brown, *A. C. Bradley on Shakespeare's Tragedies : A Concise Edition and Reassessment*. 2006, p. 47.
- 29) A. B. Shaw. "Depressive illness delayed Hamlet's revenge" *Medical Humanities*. 2002, 28, pp. 92-96.
- 30) Jonathan Sadowsky, *The Empire of Depression*. 2020, p. 25.
- 31) Sadowsky, p. 26.
- 32) Sadowsky, p. 28.
- 33) A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* 2nd ed. 1924, p. 121.
- 34) Shaw, p.92.
- 35) Fuchs, p.12.
- 36) C.M. Parkes, 1972, p.60ff cited in Fuchs, p. 13.
- 37) Sigmund Freud, "Mourning and Melancholia."1917, pp. 239-258.
- 38) Kübler-Ross & Kessler, location no. 512.
- 39) The lines remind people of Matthew 10:29.

Works Cited

- Bradely, A.C. *Shakespearean Tragedy* [2nd ed]. St Martine's Press, 1924.
- Brown, John Russell. *A. C. Bradley, on Shakespeare's Tragedies: A Concise Edition*

- and *Reassessment*. Palgrave, 2006.
- Burton, Robert. Ed. Angus Gowland. *The Anatomy of Melancholy*. Penguin Classics, 2023.
- Edmondson, Paul. "Is All of this True?" *Shakespeare Birthplace Trust blog* (<https://www.shakespeare.org.uk/explore-shakespeare/blogs/is-all-of-this-true/>). 2019. accessed 12 March 2024.
- "Experiencing the Mortificatio: Jung on Grief, Grieving and Mourning" (<https://jungiancenter.org/experiencing-the-mortificatio-jung-on-grief-grieving-and-mourning/>). accessed 31 Oct. 2024.
- "Five stages of Grief" *Grief.com* (<https://grief.com/the-five-stages-of-grief/>). accessed 9 Sep. 2024.
- Freud, Sigmund. "Mourning and Melancholia." 1917, vol.XIV, pp. 239-258. In *The Standard Edition of the Complete Works of Sigmund Freud*. The Hogarth Press, 1994.
- Fuchs, Thomas. "Grief, melancholy, and depression: An existential phenomenology of reaction to transience" *Cultural, Existential and Phenomenological Dimensions of Grief Experience*. Ed. By Allan Koster and Ester Holte Kofod. Routledge, 2022.
- Greenblatt, Stephen. *Will in the World: How Shakespeare Became Shakespeare*. W. W. Norton & Co. Inc., 2005.
- Greg, W. W. "Hamlet's Hallucination" *Modern Language Review*. 1917, vol. 12, pp. 393-421.
- "Grief(n.)" *Online Etymology Dictionary* (<https://www.etymonline.com/word/grief/>). accessed 31 Oct. 2024.
- Hairston, Stephanie. "How Grief Shows Up In Your Body" *WebMD.com* (<https://www.webmd.com/special-reports/grief-stages/20190711/how-grief-affects-your-body-and-mind>). 2019. accessed 9 Sep. 2024.
- Hogan, Patrick Colm. *What Literature Teaches Us about Emotion*. Cambridge UP, 2011.
- Jenkins, Harold. "introduction," *Hamlet*. (Arden Shakespeare Second Series). Ed. Harold Jenkins. 1982, pp. 1-159.
- Kübler-Ross, Elisabeth.& David Kessler. *On Grief and Grieving* (Kindle edition). Simon & Schuster, 2014.
- Parkes, C.M. *Bereavement: Studies of grief in adult life*. Tavistock Publications, 1972.
- Pender, Stephen. "Rhetoric, Grief, and the imagination in Early Modern England." *Philosophy & Rhetoric*. 2010, vol.43 (1), pp. 54-85.
- Sadowsky, Jonathan. *The Empire of Depression: A New History*. Polity, 2020.
- Plutarch. *Moralia*. 2.165-67. Cited in Wilson, *The Art of Rhetoric*, 112.
- RSC. "Date and Sources." (<https://www.rsc.org.uk/hamlet/about-the-play/dates-and-sources>). accessed 31 Oct. 2024.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. (Arden Shakespeare Third Series). Ed. Neil Taylor

- and Ann Thompson. 2007.
- . *Hamlet*. (Arden Shakespeare Second Series). Ed. Harold Jenkins. 1982.
- Shapiro, James. *Contested Will: Who Wrote Shakespeare?* Faber & Faber, 2011.
- Shaw, A. B. “Depressive illness delayed Hamlet’s revenge” *Medical Humanities*. 2002, 28. pp. 92-96.
- Shimazono, Susumu, Toji Kamata, & Tsunetaka Sakuma. *Grief Care no Jidai* (The Times of Grief Care). Kobundou, 2019.
- “The Stages of Grief – Some misconceptions about Kübler-Ross’s work” *Futurelearn.com* (<https://www.futurelearn.com/info/courses/dealing-with-loss-covid-19/0/steps/114543>). accessed 16 Aug. 2024.
- Sullivan, Erin. “Grief: Passion, Action, and the Possibility of Self-knowledge” *Beyond Melancholy: Sadness and Selfhood in Renaissance England*. 2016.
- Wakamatsu, Eisuke. *Nakimonotachi no Otozure* (The Visit of the Deceased). Aki Shobou, 2022
- Wilson, Thomas. *The Art of Rhetoric*. Benediction Books, 2009.

口語における破格の絶対最上級について

土 屋 亮

On ungrammatical uses of superlative-forming suffixes in colloquial Spanish

Ryo Tsuchiya

Abstract

The Spanish superlative-forming suffix *-érrimo* changes a limited number of adjectives into their superlative forms like: *áspero*→*aspérrimo*, *célebre*→*celebérrimo*, *íntegro*→*integérrimo*, *pobre*→*paupérrimo*, etc. It has been seen, traditionally, that this suffix sounds Latin and educated, so some of them are replaced, in daily conversation, by another superlative-forming suffix *-ísimo*, which is a more popular and colloquial form. Of those superlatives formed in such a way, there are several which the Royal Spanish Academy (*la Real Academia Española* in Spanish) thinks are to be avoided from the prescriptive point of view. Méndez Santos y Linares Bernabéu (2022), however, reports that the suffix *-érrimo* is now experiencing a revitalization in colloquial Spanish and texts written colloquially, being used to form the superlatives of adjectives which it can't prescriptively be attached to, like: *guapérrimo* (<*guapo* “good-looking”), *monérrimo* (<*mono* “cute, lovely”), *buenérrimo* (<*bueno* “good”). Their study is based on an electronic database of colloquial Spanish, focusing on single words becoming superlatives with *-érrimo*.

This paper, on the other hand, focuses on two-word expressions that became superlatives with the suffixes *-érrimo* and *-ísimo*, which include examples such as *a gustérrimo/a gustísimo* (<*a gusto*), *nimodérrimo/nimodísimo* (<*ni modo*), *por supuestérrimo/por supuestísimo* (<*por supuesto*) etc., in which the suffixes are used ignoring the grammatical

category of the words which they are attached to. In our modest study, we attempt to collect examples formed in this “seemingly ungrammatical” way, using the Academic corpora CORPES XXI and CREA, Twitter, etc., for future research.

序

現代スペイン語における接尾辞 *-ísimo/a/os/as* (以下 *-ísimo*) と *-érrimo/a/os/as* (以下 *-érrimo*) は、形容詞と一部の副詞から絶対最上級を構成する際に用いられるが、自由交替が許されている訳ではなく、次の (1) や (2) のように大部分の形容詞と一部の副詞には *-ísimo* が、そして (3) のように、ごく少数の形容詞には *-érrimo* が付加される。

(1) *-ísimo* を取る形容詞

bueno → buenísimo (bonísimo)¹⁾

difícil → difícilísimo

importante → importantísimo

joven → jovencísimo³⁾

(2) 副詞

tarde → tardísimo

cerca → cerquísima

lejos → lejísimos (lejísimo)²⁾

raramente → rarísimamente

(3) *-érrimo* を取る形容詞

áspero → aspérrimo célebre → celebérrimo íntegro → integérrimo

libre → libérrimo mísero → misérrimo pobre → paupérrimo

(1) や (3) に見られる形容詞の強意表現について、Butt *et al.* (2019) は、次のように述べ、一部の語については、古いテキストや装飾語句の多い文体で見られるとしている。

Some of the following forms are occasionally found in older texts and/or in flowery written styles: the current form (if any) follows the literary form:

amigo friendly / keen *amicísimo/amiguísimo*
libre free *libérrimo/muy libre*
célebre famous *celebérrimo magnífico* magnificent *magnificentísimo*
cruel cruel *crudelísimo/cruelísimo pobre* poor *paupérrimo/pobrísimo*
fértil fertile *ubérrimo/fertilísimo sabio* wise *sapientísimo*
fiel faithful *fidelísimo/fidelísimo*⁴⁾ [*sic.*] *sagrado* sacred *sacratísimo*
 (Butt *et al.* 2019: 64)

引用の中で、強意形が2つ記されているものは、“the current form (if any) follows the literary form”ということであるから、左が the literary form である。これによれば、*celebérrimo* には対抗する the current form がなく、*libérrimo* に対抗するのは原級に *muy* を冠した *muy libre* ということだが、実際の言語運用の場面では、*celebrísimo* や *librísimo* という語が頻繁に見聞きされ、研究の対象にもなっている (Goldschmitt y Hesselbach 2022)。しかし、RAE y ASALE (2005) は、次のように述べ、ここに挙げた語のうち *librísimo* については、そのような語は存在せず、誤用だとしている。

Junto a la forma en *-érrimo*, algunos adjetivos presentan también un superlativo en *-ísimo* (→ *-ísimo -ma*) creado sobre la forma española del adjetivo, como *asperísimo, negrísimo, pobrísimo* y *pulcrísimo*, igualmente válidos y aceptados en la norma culta; en otros casos, solo existe una forma (*libérrimo*, no existe **librísimo*) o solo se admite una de ellas en la norma culta (*misérrimo*, no [®]*miserísimo*).

(RAE y ASALE 2005: 267)

Butt *et al.* (2019) は学習者が参照するための文法書であることから、この RAE y ASALE の指摘を採用しているのだと考えられる。引用したこれら

2つの指摘からは、*-érrimo* の語尾はやがて *-isimo* によって取って代わられるのではないかという予測が成り立ちそうであるが、*bueno* から *buenérrimo* が形成されるなど、元来 *-érrimo* の語尾が付加されない形容詞にこれが付加される例の存在を報告する研究がある他、筆者も特にツイッター⁵⁾ におけるツイート上において、次のように二語からなる表現に *-érrimo* が付加される例を観測している。次の (4) は、特にメキシコで多用される成句 *ni modo* に *-érrimo* が付加されたものであり、一語として表記されている。以下、用例中の当該箇所⁵⁾ に下線を引く。なお、(4) ではアクセント記号は付されていない。

- (4) Tienes que ofrecer todo tu amor sin pedir reciprocidad ni nada a cambio. Tú también solo ofreces lo que tu corazón puede dar y nadie que te quiera te ha pedido nada a cambio. Nimoderrimo.

(Twitter, 2024/10/24)⁶⁾

-érrimo が付加するのは本来形容詞や副詞であるが、*ni modo* は「副詞＋名詞」からなる成句である。筆者が本稿において関心を持っているのは、この *nimodérrimo* (<*ni modo*)⁷⁾ のように、元来の統語範疇を無視した上で付加される絶対最上級の語尾 *-érrimo* である。しかし、既存のどのような表現にこの語尾 *-érrimo* が付加されるのかについて筆者は手がかりを有していない。そこで本稿では、スペイン王立アカデミー（以下 RAE）の電子コーパスである CORPES XXI と CREA およびツイッター、Google 等を使用し、口語的な文体で書かれるテキストにおいて使用される表現に当たりを付け、用例を蒐集した。また、必要に応じて、*-érrimo* 以外の語尾、特に *-isimo* についても言及することにする。なお、本稿では計量的な分析には関心を持たない。

1. 先行研究

序で、元来 *-érrimo* の語尾が付加されるはずのない形容詞にこれが付加される例を分析している研究が存在することを指摘した。ここでは RAE y ASALE (2009) と Méndez Santos y Linares Bernabéu (2022) を概観する。

1.1. RAE y ASALE (2009)

RAE y ASALE (2009) は、絶対最上級を構成する *-érrimo* の語尾について、序で引用した Butt *et al.* (2019) 同様、元来の運用について記述した後で、本来付加されることのない形容詞に付加される用法を、簡潔に以下のように紹介している。

En el español coloquial de muchos países se usan con intención sarcástica o paródica *buenérrimo*, *elegantérrimo*, *guapérrimo*, *tristérrimo* y algunos otros derivados. (RAE y ASALE 2009: 527)

元来は付加されることのない形容詞にこの *-érrimo* の語尾を付加する表現について、皮肉やパロディー的な意図でもって使用されると指摘している。また、ここに挙げられている4つの例のうち、*elegantérrimo* 以外の3つは、後述の Méndez Santos y Linares Bernabéu (2022) においても言及されている語であり、使用頻度の高さがうかがえる。

1.2. Méndez Santos y Linares Bernabéu (2022)

次に、Méndez Santos y Linares Bernabéu (2022) を取り上げる。この研究は、その題目“El revival del sufijo *-érrimo*”が語るように、絶対最上級を作る *-érrimo* の語尾が、口語的な文体で書かれるインターネット上のテキストにおいて、いくつかの特定の語に付加されて多用され、「リバイバル」の途上にあると指摘する。同じテーマの研究は他にも存在するが、

管見の限り、これが最新のものであるように思われる。著者らは、インターネット上にあるデジタル化されたデータ（ウェブ記事・ブログ・ツイッターのツイート等）やウィキペディア、各種政体が公表する資料等から作られた CdE: Now と呼ばれるコーパス上での調査に基づき、この *-érrimo* という語尾の新しい使われ方を分析している。この研究によれば、本来であれば *-érrimo* の語尾が本来付くことのない形容詞に付加され、絶対最上級の役割を担っているという（*-érrimo* actuaría con un valor de superlativo absoluto con el objetivo de enfatizar el mensaje comunicativo. (*op.cit.*: 12)）。そして、*guapérrimo* (<guapo)、*monérrimo* (<mono)、*buenérrimo* (<bueno)、*tristérrimo* (<triste)、*estupendérrimo* (<estupendo) の5つが、最もその使用が確認される語であり（*Ibid.*: 10）、地域としてはスペインとメキシコで特にその使用が顕著ということである（*Ibid.*: 8）。元来、絶対最上級の語尾として *-érrimo* が付加される形容詞は、最終音節に *-r-* を含んでいる必要があり、すでに序で見たように、その数も限定的であるが、著者らが挙げた5つの形容詞には *-r-* がなく、いずれも規範的には *-ísimo* を伴う語である。彼女らの研究に基づいているコーパスにおいては、*-érrimo* が *-ísimo* に駆逐されるどころかそれに代わって使用され、さらに、*-ísimo* よりも強意の程度が強いという他の研究の指摘もあるという（*El significado de -érrimo* parece situarse en el polo máximo de la escala de intensificación (Albelda Marco 2007), consiguiendo un grado más que el sufijo *-ísimo*, es decir, no serían equivalentes semánticamente. (*Ibid.*: 14)）。本稿ではこの点には踏み込めないが、これが事実であるとする、*-érrimo* を使用する話し手にはこれを使用する語用論上の動機があるということになる。この話し手の動機に関し、先に引用した RAE y ASALE (2009) では、話し手の皮肉やパロディーの意図についてはふれられていたものの、強意の程度については言及がなかったのを確認しておく。

このとおり、Méndez Santos y Linares Bernabéu (2022) は、単一の形容詞に *-érrimo* が付加される事例を蒐集し検討しているが、本稿で筆者が

試みるのは、先の(4)のように、二語からなる表現に、その統語範疇を無視した上でこの *-érrimo* が付加されている口語表現の蒐集である。次節で検討する。

2. 用例の蒐集および検討

本節では、*-érrimo* の語尾が規範を逸脱し、口語的な文体で書かれるテキストにおいて多く使用されているという、前節で紹介した先行研究の指摘をふまえ、二語からなる表現に *-érrimo* が付加されている用例を蒐集する。これまでに繰り返し「二語からなる表現」「二語の表現」と書いているが、本稿で扱う二語の表現とは、「前置詞+名詞」、「前置詞+代名詞」、「名詞+過去分詞」、「前置詞+形容詞」、「形容詞的な間投詞+名詞」からなる定型表現である。これらの大半において、*-érrimo* の語尾が統語範疇を無視し、単独の形容詞ではないものに付加されるが、筆者はまさに、統語範疇が無視されているという理由で、この現象に関心を抱く。

さて、二語の表現を調査対象とする *-érrimo* についての先行研究は、管見の限り存在せず、そのため、どのような表現に *-érrimo* の語尾が付加され現れるかについての手がかりがない。そこで、序で述べたように、RAE の電子コーパスである CORPES XXI と CREA、ツイッター、Google 等を使用し、口語的に書かれるテキストにおいて使用される二語の表現に見当をつけ、その用例を蒐集した。続く 2.1. から 2.6. までの 6 つである。

2.1. a gusto>a gustérrimo

a gusto は「快く・喜んで」を意味する成句で、「前置詞+名詞」からなり、本来は *-érrimo* が付加される表現ではないが、以下のように用例が見つかる。

- (5) El viernes estuve a gustérrimo en Komic dibudedicando “El Rey de la Carretera”. Si estáis por Compostela, podéis seguir encar-

gándolo con firma (Twitter, 2019/03/14)⁹⁾

- (6) Me vuelvo ya a Valencia, pero menudo viaje a Barcelona, amics: una charla en la que he estado a gustérrimo, he desvirtualizado a peña guay, me he reencontrado con amigos de toda la vida, he visto a compañeros del doblaje... Tres días estupendos, la verdad. (Twitter, 2019/12/06)¹⁰⁾

CORPES XXIにおいて、地理的および媒体上の条件をかけずに検索したところ、a gustérrimoは見つからなかったが、*-ísimo*を付加したa gustísimoに関しては2例、縮小辞の語尾である*-ito*を付加したa gustitoは37例が見つかる。RAEのツイッターアカウントは、ある人物の“tenemos una duda. El aumentativo de "a gusto" sería "a gustísimo" o "agustísimo".”¹¹⁾という質問(抜粋)に対し、次の(7)のように答えている。

- (7) Lo adecuado es escribir «a gustísimo» (igual que «a gustito» o «por supuestísimo»¹²⁾).

ここでは、a gustísimoが前置詞句であるから、前置詞aと後続の名詞を離して書くように、という正書法上の観点にのみ言及があり、そもそも名詞gustoに*-ísimo*が付加されている事実¹³⁾については言及がないことから、RAEも容認しているように見える。

2.2. de acuerdo>de acuerdérriimo

de acuerdoは「～に賛同して・賛成で」という意味の表現で、やはり「前置詞+名詞」からなる。これに*-érrimo*が付いたde acuerdérriimoも、以下のように用例が得られた。

- (8) Muy de acuerderrimo, cuantos trabajadores están/estamos sin

ningún tipo de prestación y sin respeto a nuestros derechos laborales // Por si se les olvida también somos trabajadores y ojalá también se interesen por nuestros derechos, aunque pues yo que ¿verdad? Yo ya voy de salida (Twitter, 2024/07/04)¹⁴⁾

ツイッター上では *de acuerderrimo* の一言、あるいは、これに間投詞や絵文字を加えた程度のツイートが多い中、(8) は引用するに値する文章が書かれていると判断した。なお、このアカウントの運用者はプロフィールに *Oaxaqueño* とあることからメキシコの人であると推察される。この *de acuerderrimo* も *a gusterrimo* 同様、CORPES XXI では例が見つからないが、*de acuerdísimo* に関しては、2 例がヒットする。¹⁵⁾

名詞 *acuerdo* の母音 /ue/ は、語源的には /o/ であったものが、音韻変化を通じて二重母音化したものであるが、*-errimo* や *-ísimo* の語尾を添加すると強勢が移動することになる。そこで、*de acorderrimo*、*de acordísimo* を調べてみたところ、前者はツイッター上にはなく、Google で検索をしても 1 例もヒットしなかったが、後者は、多数のポルトガル語の例に紛れ、極めて少数ではあるものの、(9) のように例が見つかる。

(9) ... *de acordísimo*. A estas alturas hay que razonar mejor. Ir por candidatos, no por partidos (Twitter, 2015/03/10)¹⁶⁾

なお、(9) の引用元は、メキシコの Escatepec de Morelos 市政府の不正を追及するアカウントである。

2.3. *de nada*>*de naderrimo*

de nada は「前置詞 + 代名詞」からなり、対話者からの謝辞に対し「どういたしまして」の意味を表すほか、動詞句と共起し「全く～ない」を意味する。これに *-errimo* を付加した *de naderrimo* は、CORPES XXI にお

いてはヒットしなかったが、ツイッター上では2例が見つかった。次の(10)が前者の意味、(11)が後者の意味であると判断できる。なお、(11)は全て大文字で書かれている。

(10) de nadérrimo (Twitter, 2023/04/17)¹⁷⁾

(11) DOS SEMANAS EN LAS QUE EL GOBERÑO NO ESTUVO A LO QUE YA TENÍA QUE ESTAR. DOS SEMANAS DE PREPARATIVOS DISCUSIONES COORDINACIONES SE SABE QUE NO EXISTIERON PORQUE EL 9M NO HABÍA NADA. NI DECRETO DE ALARMA NI NADA DE NADA DE NADA DE NADÉRRIMO. (Twitter, 2020/03/27)¹⁸⁾

Googleでこの文字列を検索すると、Facebookのページが2件ヒットするが、リンク先ではこの表現を見つけることができなかった。一方、de nadísimoとすると、

(12) A ver rubia yo te acuso a vos de que robaste en el trabajo y vos tenés que presentar las prueba de que no lo hiciste ? Se ve que no sabes absolutamente nada de nada de nadísimo de derecho penal. Todo ciudadano se presume inocente. Y el fiscal debe probar. (Twitter, 2020/01/16)¹⁹⁾

(12)のような例が得られ、de nadérrimoよりもずっとヒット数が多い。しかし、CORPES XXIではやはり例が見つからなかった。

2.4. pan comido>pan comidérrimo

pan comidoは「名詞+過去分詞」からなる成句で「非常に容易である・おちゃのこさいさい」という意味である。comidoはcomerの過去分詞で

あるので、形容詞と同様、*-érrimo* や *-ísimo* が添加しても破格ではない。しかし、意味の観点から考えれば、[pan comid]-*érrimo*/*-ísimo* という構成を考えるのが自然である。さて、この pan comido は、pan comidérrimo および pan comidísimo 共に、CORPES XXI には用例がなく、さらに前者はツイッター上にも用例がなかった。後者、pan comidísimo はツイッター上での使用例 (13) が見つかる。

- (13) Esta semana nos tocó dibujar rostro y me parece que la tarea esta tremendamente básica... debían habernos dado un millón de gestos para practicar ... espero que se esten ahorrando lo jodido para las últimas clases... en general el módulo me pareció pan comidísimo... (Twitter, 2024/06/13²⁰)

また、筆者が検索した印象では、この表現は次の (14) のように、縮小辞との相性のほうが良いかもしれない。

- (14) No te presiones, tu personita te ama tal cual eres. Recuerda eso. ADEMÁS, si no estás conforme puedes ir probando ser cariñosa a propósito con tus más cercanos hasta que se te haga costumbre. Pan comidito. (Twitter, 2022/06/21²¹)

2.5. por supuesto>por supuestérrimo

次に、「もちろん」を意味する *por supuesto* を検討する。この成句は「前置詞 + 過去分詞」からなる。*supuesto* は動詞 *suponer* の過去分詞であるので、*-érrimo* や *-ísimo* が添加しても文法的に問題はない。先述の pan comido は、この形でなければ「容易である」を意味し得ないが、*por supuesto* に関しては、(dar algo) *por* [supuesto] (何かを想定されているものとみなす) と考え得るため、ここでは *por* [supues-térrimo/*-ísimo*] とい

う構成を考えるべきであるかもしれない。²²⁾

さて、por supuestérrimo は CORPES XXI には例がないものの、ツイッター上および Google での検索結果では用例が見つかる。一般のウェブページから次の (15) を引こう。

(15) Es que no sabes cuánto echamos de menos ese espacio! Un besote y por supuestérrimo que os mantengo informados :D²³⁾

一方、por supuestísimo は、CORPES XXI において 14 例がヒットする上、テレビなどでも耳にする。また、先に引用した RAE のツイッターアカウントによる (7) でも言及されており、かなり使用されているという印象を受ける。

(16) P: ¿Cree que eso se ha exacerbado en estos años de crisis?

R: Sí, claro, por favor. Por supuestísimo. Hay gente muy extrema.

(CORPES XXI, El Confidencial. Madrid, 2016/10/26)

(16) は 2016 年 10 月 26 日の新聞 El confidencial から取られたものが、CORPES XXI 上でヒットしたものである。なお、この por supuestísimo を CREA で検索したところ、用例が 6 件あり、古いもので 1984 年の小説の中で使用されているものがヒットし、この表現の定着度合いを裏付ける。

(17) Don Leopoldo te reconoce vagamente al verte: “¡por supuestísimo que sé quién eres!”

(CREA, Andrés Berlanga, La gaza, 1984)

2.6. vaya tela>vaya telérrima

vaya tela は「なんて厄介なことだ！」を意味する。この表現は、動詞

ir の接続法現在 *vaya* に女性名詞 *tela* からなる。この *vaya* は単独で間投詞的に用いられるほか、名詞を伴い話者の否定的な評価を加える。両語のうち、どちらが形容詞的かといえ、先行する *vaya* のほうであると言える。

さて、結論から言えば、*vaya telérrima* はどのコーパスおよびウェブ上においてもヒットしなかったが、*vaya telísima* は RAE のコーパスにはないもののツイッター上には少ないながら例がある。

- (18) *Vaya tela. Vaya telísima. Dos envíos que tenían que llegar hoy. DOS ENVÍOS. Y NI UNO.* (Twitter, 2020/01/25)²⁴⁾

だが、検索結果からは、絶対最上級とするよりも、縮小辞を付加した *vaya telita* のほうがより使用されている印象が強い。

- (19) *De verdad que hasta hoy no se han dado cuenta que se lo dijeron a Yolanda? Curiosamente hoy cuando ya todo el mundo sabe que ellos lo sabían? Vaya telita y que vergüenza tener que ver cómo usan esta MIERDA para arañar 4 putos votos.* (Twitter, 2024/10/28)²⁵⁾

また、先述のとおり、*vaya tela* においては *vaya* のほうが形容詞的であるため、次の (20) のように *vayísima tela* の例が散見される。なお、*vayérrima tela* は見当たらない。以下の (20) には、アクセント記号の書かれていない語が複数あるが、元の表記のまま引用する。

- (20) *Vaya tela con el Chris Evans subido al toro mecánico, vayísima tela. Menudo espectáculo dio mi chaval, no puedo* (Twitter, 2019/06/17)²⁶⁾

2.7. 小括

本節では、二語から表現 *a gusto*、*de acuerdo*、*de nada*、*pan comido*、*por supuesto*、*vaya tela* に関して、絶対最上級を構成する接尾辞 *-érrimo* ないし *-ísimo* が付加されて用いられている実例が存在するかどうか調査を行い、*pan comidérrimo*、*vaya telérrimo* 以外はその実在を確認することができた。筆者の関心は、これらの語尾が元の表現の統語範疇を無視して付加される点にあったが、この範疇の無視に関しては、Vigara Tauste (1992) が、次のように、*-ísimo* が現在分詞や過去分詞、名詞に付加される興味深い実例を示してはいるものの、*-érrimo* については言及がなく、二語の表現に *-ísimo* が付加される例も取り上げられていない。²⁷⁾²⁸⁾

En las diferentes categorías gramaticales. -- Quebrantando las reglas y restricciones de superlación en las diversas categorías gramaticales. Por ejemplo, la que dice que verbos y sustantivos sólo admiten superlación cuantitativa adverbial y adjetiva (respectivamente), según los modelos «ve poco» y «demasiados obstáculos». Así, [el hablante 引用者註] utiliza el sufijo -- ísimo en ciertas formas verbales (no personales):

-- Ufff, estás sudando

-- *Sudandísimo*

-- ¿Pero lo has buscado?

-- Lo he *buscadísimo* mil veces, cien mil, ¡un millón!

[中略]

No fue un gol, fue un *golísimo*

Sí, pues había una *colísima* de coches hasta dar la vuelta al recodo

(Vigara Tauste 1992: 153-154)

本稿は、このような記述の穴を埋めるべく書かれたものである。

3. 結論

本稿では、絶対最上級を構成する語尾である *-érrimo* や *-ísimo* が二語からなる成句に付加される用例を、RAE のコーパスやツイッター、その他ウェブ上で蒐集する試みを行い、前節で示したようにいくつかの興味深い例を拾うことができた。

-érrimo は、元来、限られた数の形容詞に付加し、その絶対最上級を構成する機能を有するが、この語尾を伴う絶対最上級は、レジスター上は文語的であり、教養語としての側面があった。ところが、今、特にスペインやメキシコにおいて、この語尾が口語および口語的に書かれるテキストにおいて復権を果たし、本来は付くことのなかった形容詞にまで付加され、新語を生み出しているという指摘がある。本稿で確認した先行研究では単一の語に *-érrimo* が付加される例についてのみ言及されていたが、本稿では二語からなる成句に、その統語範疇を無視する形で、*-érrimo* ないし *-ísimo* が付加される例を探した。どのような表現に *-érrimo* ないし *-ísimo* が付加されるのかについて手ごかりはなかったが、第2節で示したように、*a gusto>a gustérrimo*、*de acuerdo>de acuerdórrimo*、*de nada>de nadérrimo*、*pan comido>pan comidísimo*、*por supuesto>por supuestérrimo* については実例を得ることができた。*vaya tela* については、絶対最上級の語尾が付加された実例はなく、縮小辞の *-ita* が付加された例のみが得られた。以上の表現を今回の調査の対象としたのは、筆者がこれまでに聞き出したことがあるものの他は、直観で選んだに過ぎなかったが、小稿を足掛かりとして、今後の調査で研究の深化を図ることとしたい。

参考文献

- Butt, John, Carmen Benjamin and Antonia Moreira Rodríguez (2019) *A New Reference Grammar of Modern Spanish -6th ed.*, Routledge, New York.
- Goldschmitt, Stefanie y Robert Hesselbach (2022) “Norma, analogía y variación: perspectivas empíricas sobre las formas irregulares del superlativo en español”, *Energeia* VII, pp.118–136.

- Méndez Santos, María del Carmen y Esther Linares Bernabéu (2022) “El revival del sufijo *-érrimo*”, *Verba: Anuario Galego de Filoloxía*, 49, ISSN-e: 2174-4017.
- RAE y ASALE (2005) *Diccionario panhispánico de dudas*, Santillana, Madrid.
- RAE y ASALE (2010) *Nueva gramática de la lengua española -Manual-*, Espasa, Madrid.
- Rojo, Guillermo (2024) “El futuro de los corpus de referencia”, *Studia linguistica romanica* 2024.12, pp.18-33.
- Serradilla Castaño, Ana (2004) “Superlativos cultos y populares en el español clásico”, *Edad de Oro*, XXIII, pp.95-133.
- Vigara Tauste, Ana M.^a (1992) *Morfosintaxis del español coloquial -Esbozo estilístico-*, Gredos, Madrid.

使用コーパス

- CORPES XXI 「21世紀スペイン語コーパス」 (<https://www.rae.es/banco-de-datos/corpes-xxi>) (最終閲覧日 2024年11月8日)
- CREA 「現代スペイン語参照コーパス」 (<https://corpus.rae.es/creanet.html>) (最終閲覧日 2024年11月7日)

注

- 1) 伝統的に bueno の絶対最上級は bonísimo とされてきた。接尾辞 *-ísimo* が付加される結果、強勢が二重母音 /ue/ から外れ、これが語源的な形態である /o/ に戻るとされるからである。ただ、運用の実態としては buenísimo がはるかに多く用いられる。
- 2) RAE y ASALE (2010: 139) によれば、一部の地域で語末の *-s* が無い形態 *lejisimo* となる。
- 3) *-n* で終わる形容詞には、*-císimo* が付加される。
- 4) この箇所は、双方ともに *fidelísimo* となっているが、本来右側の語は *fielísimo* でなければならないはずである。左の語、つまり *fidelísimo* が語源的に「正統な」形式であり、RAE もその辞書 DRAE に収録しているが、口語では子音の /d/ が脱落した右の語 *fielísimo* が用いられる。実際、インターネット上などでも使用例は枚挙にいとまがない。
- 5) 現在は、「X のポスト」と呼ぶのが正式であるが、筆者はこれに抵抗しているため、本稿では「ツイッター」および「ツイート」と記す。なお、Rojo (2024) も *Twitter* と記している。
- 6) <https://x.com/Alitzelja/status/1850371482595029170> (2024年10月27日最終確認)

- 7) この *nimodérrimo* という表現については、初出は不明であるものの、特にメキシコにおいてこれが人口に膾炙するのに大きな影響力を持った人物（有名な reality show の出演者）が特定されている。次の web ページを参照。
<https://www.radioformula.com.mx/estilo-de-vida/2023/8/11/nimoderrimo-que-significa-esta-palabra-viral-cual-es-su-origen-775737.html> (2024 年 11 月 2 日最終確認)
- 8) Rojo (2024) によれば、2023 年 9 月にデータが更新された結果、CdE: Now は、73 億語（形態）を有するようになったという。
- 9) <https://x.com/JoseAngelARES/status/1102558840468529154> (2024 年 10 月 27 日最終確認)
- 10) <https://x.com/javipalarcon/status/1202633066126159872> (2024 年 10 月 27 日最終確認)
- 11) <https://x.com/Maquiiiiita/status/913043869834543104> (2024 年 10 月 26 日最終確認)
- 12) <https://x.com/RAEinforma/status/913308653419196416> (2024 年 10 月 26 日最終確認)
- 13) これらの表現について筆者は、[a gust]-ísimo、[a gust]-ito という構成を考えているが、縮小辞語尾の *-ito* はもとより、*-ísimo* にも、古くから名詞に付加される用法が存在する（以下引用中の下線部）。Serradilla Castaño (2004) から *Don Quijote* の以下のような例を引いておく。なお、以下には形容詞 + *-ísimo* も含まれている。

Confiada estoy, señor poderosissimo, hermosissima señora y discretissimos
 circunstancias, que ha de hallar mi cuytissima en vuestros
 valerosissimos pechos acogimiento, no menos placido que generoso y
 doloroso; porque ella es tal, que es bastante a enternecer los marmoles,
 y a ablandar los diamantes, y a molificar los azeros de los mas endurecidos
 coraçones del mundo; pero antes que salga a la plaça de vuestros
 oydos, por no dezir orejas, quisiera que me hizieran sabidora si
 está en este gremio, corro y compañía, el acendradissimo cauallero
 don Quixote de la Manchissima, y su escuderissimo Pança.
 «El Pança», antes que otro respondiese, dixo Sancho, «aquí está, y
 el don Quixotissimo assimismo; y, assi, podreys, dolorosissima dueñissima,
 dezir lo que quisieridissimis; que todos estamos prontos y
 aparejadissimos a ser vuestros seruidorissimos.» (2ª Parte, cap. XXXVIII)

とはいえ、“es fácil observar que se hace un uso extremo del superlativo en -ísimo, por su fuerte valor paródico” (Serradilla Castaño 2004: 97) の指摘のとおり、本稿で我々が検討している例とは様相は異なる。

- 14) <https://x.com/LeonRiosManuel/status/1808578621348450598> (2024年10月26日最終確認)
- 15) 数字上は2例だが、同じ著者による同一作品の別のフォーマットがカウントされている。
- 16) https://x.com/Alerta_Ecatepec/status/575029525412626432 (2024年11月2日最終確認)
- 17) https://x.com/tiznado_/status/1647741847324770306 (2024年11月2日最終確認)
- 18) <https://x.com/qtyop/status/1243244338852888576> (2024年11月2日最終確認)
- 19) <https://x.com/walтинhotmail1/status/1217504310856122368> (2024年11月2日最終確認)
- 20) <https://x.com/abejandratheone/status/1801072371643630039> (2024年11月2日最終確認)
- 21) <https://x.com/shipsyasukr/status/1538983852827353092> (2024年11月2日最終確認)
- 22) もしそうであれば、これについては破格ではないということになる。
- 23) <https://www.drivinghome.com/2015/09/nos-mudamos.html> インテリアデザイナーのブログのコメント欄である。(2024年11月7日最終確認)
- 24) <https://x.com/cthalhan/status/1220763496662675467> (2024年11月3日最終確認)
- 25) <https://x.com/helenag001/status/1850878396697289005> (2024年11月3日最終確認)
- 26) <https://x.com/LadyRachella/status/1140545310500052992> (2024年11月4日最終確認)
- 27) もちろんこの研究がやや古いためでもある。
- 28) ただし、he buscadísimo の例は、buscar の直説法現在完了形 he buscado に *-ísimo* が付加されている例とみなすこともできる。

Japanese University Students' Opinion of Readtheory

Joshua Trued

Abstract

This study examines Japanese university students' opinions of Readtheory (readtheory.org), an online reading comprehension platform used as part of weekly homework in a Freshman English course. Readtheory, which adapts reading levels based on user performance, aims to improve reading comprehension skills through short texts, interactive quizzes, and gamified elements such as points and levels. Over a semester, 17 Japanese university students completed reading assignments on the platform, and their experiences were subsequently assessed through a survey. Both quantitative data from a Likert-scale survey and qualitative responses were analyzed. Results indicate that a majority of students found Readtheory beneficial for enhancing their reading ability, motivation, and overall learning experience. However, mixed opinions emerged regarding the ease of use and willingness to recommend the platform to peers. Despite limitations related to sample size, findings support the potential of Readtheory as a supplementary tool for individualized reading practice in EFL contexts. Further studies with larger sample sizes are recommended to validate these preliminary findings and explore the impact of such platforms on long-term language acquisition outcomes.

Introduction

Recent studies highlight the growing importance of online tools for EFL teachers, especially during the COVID-19 pandemic. These tools offer flexibility and support various aspects of language learning, including speaking, pronunciation, vocabulary, and writing skills (Sotomayor Cantos

et al., 2023). EFL teachers have utilized diverse online resources such as learning management systems, assessment tools, chat platforms, video conferencing tools, and content creation tools (Sari & Putri, 2022). When selecting online tools, teachers consider factors such as ease of use, accessibility, cost-effectiveness, and engagement potential (Sari & Putri, 2022). The increasing availability of these tools necessitates ongoing exploration, selection, and evaluation by researchers and practitioners to effectively implement them in various language teaching contexts (Son, 2011).

Readtheory.org is a free online platform designed to enhance reading comprehension skills through gamification elements such as badges, knowledge points, levels, and feedback (Alalwany, 2021). It involves the reading of short texts followed by comprehension questions. Based on the results of the comprehension questions, reading difficulty is automatically lowered or raised. Studies have shown that students generally have positive perceptions of using Readtheory for improving their reading abilities (Ismawati & Syafryadin, 2022). Readtheory's effectiveness is attributed to its accessibility, allowing students to practice reading anytime and anywhere, making it an alternative to traditional reading methods, which may require instructors to prepare books for each student and assign them individual reading sections (Alalwany, 2021). The platform's approach aligns with the concept of theory development in cognition, where multiple hypotheses are tested to find the most effective method for text analysis and retrieval (Adi et al., 2009). Overall, Readtheory appears to be a valuable tool for enhancing reading skills and motivating students to engage in independent reading practice. While studies exist that examine the effectiveness of Readtheory, there is a need for studies which measure students' perceptions of the site's impact on their own improvement and enjoyment.

Methodology

Participants & Methods

Readtheory was assigned as part of a weekly homework regimen for all

17 students of the author's Freshman English class over a 13-week semester. The course utilized a four-skills approach with an emphasis on fluency. Students met four times per week for 50-minute lessons. They were each given their own user ID and password in order to access the site, and were asked to complete three reading passages each week after an explanation of the website at the beginning of the semester. The reason three passages were chosen was to balance engagement without overwhelming students. A previous study found that ten passages per week was difficult for students, and after some revisions settled on 5 passages per week (Tempest, 2018). Because the author of the current study wanted to assign other homework tasks in addition to the Readtheory passages, it was decided that three was a reasonable amount. Students were asked to complete quizzes, but not necessarily pass them. Another study using Readtheory mandated that subjects pass tests in order to avoid picking answers randomly (Tempest, 2018). However, for this study, students received points for only completing texts and not passing them in order to assess how well Readtheory was able to engage students and hold their attention. Completion of the site's reading texts accounted for 5 percent of the students' semester grade.

Multicultural Communication students from a university in Tokyo were surveyed at the end of the first semester during the 2023-2024 academic year. Students reflected on their experiences using Readtheory. In total, 17 students took part in this survey. Data was collected using a Likert-scale survey at the end of the first semester. All participants gave informed consent, and were informed that the survey results would be kept anonymous and have no impact on their grades.

Data Collection & Analysis

Both quantitative and qualitative methods were used. Quantitative data was collected using seven Likert-scale questions on a Google Forms survey, while qualitative data concerning students' general impressions was collected via written responses. Questions were asked in English only, as the English comprehension level of this class was high enough to understand the questions without difficulty. While Likert-scale data was tabulated

automatically, qualitative items were scanned thematically using keywords and compared with student's quantitative data to check for discrepancies.

Results

This section of the paper will show the results of each question from the questionnaire.

Question 1 - Readtheory helped to improve my reading level.

Question 1 attempted to discern students' impressions of using Readtheory. Research on primary school students' readiness to engage with mobile learning apps revealed strong correlations between perceived usefulness and behavioral intention to use educational technologies (Camilleri & Camilleri, 2019). Furthermore, factors such as usefulness, knowledge improvement, and enjoyment are significant determinants of students' preference for gamified learning activities (Filippou et al., 2018). Given that 76% of students agreed or strongly agreed that Readtheory helped improve their reading level, this positive response is a crucial indicator of the platform's perceived effectiveness. Students' written comments reveal that some found value in specific features, such as the exposure to idiomatic expressions and the structured practice in reading comprehension. However, a few students expressed uncertainty about whether completing three readings per week was enough to noticeably enhance their reading level. This feedback suggests that while Readtheory may be useful, it might require a higher frequency of engagement or supplemental support to fully meet students' improvement expectations.

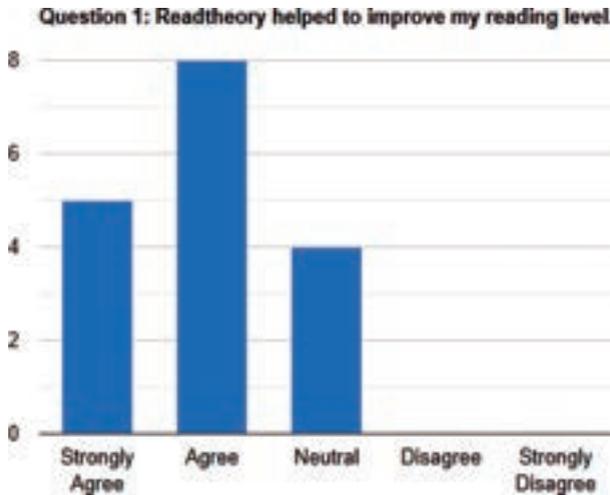
-“I think it developed my English idioms and read skill.”

-“I think Readtheory is a good application, but I do three reading practices per week, maybe not enough to feeling about my level is upped or not.”

-“I think it's really good and helpful for me. Because my reading skill is very bad.”

-“I think it's a good website to practice English, I found many of new vocabularies after I did an exercise.”

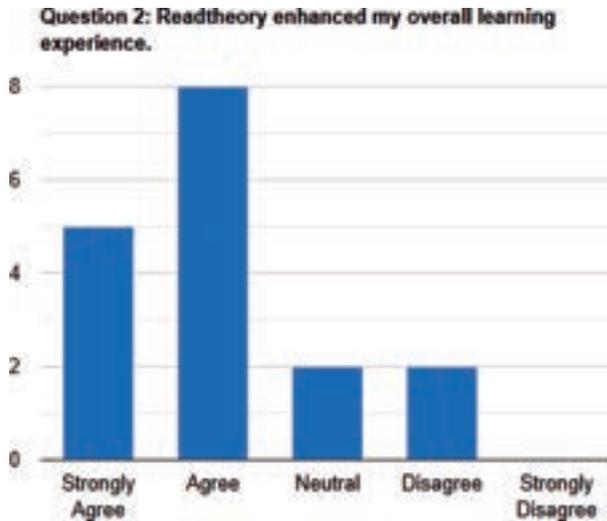
-“I think it is good tool for me to study English and improve English



skills.”

Question 2 - Readtheory enhanced my overall learning experience.

The focus of question 2 was on whether or not students perceived Readtheory.org as a positive factor in the overall context in the class. The results showed that over 75% of students either agreed or strongly agreed. Two students had a neutral answer, with 2 students disagreeing with the statement. One student who disagreed stated that they like using the website, however they often forgot to access it. Furthermore, they wished that it was available on the university learning management system for easy access. Several additional factors might explain student disagreement. First, students with a lower intrinsic interest in reading may view weekly assignments on the platform as an obligation rather than an engaging activity, leading to less enthusiasm about its role in their learning. Additionally, Readtheory’s focus on individualized, self-paced reading might lack the social or collaborative aspects that some learners find motivating in a classroom setting. These students may prefer interactive discussions or group activities that allow them to engage with peers, rather than the solitary nature of online reading exercises. Finally, some students



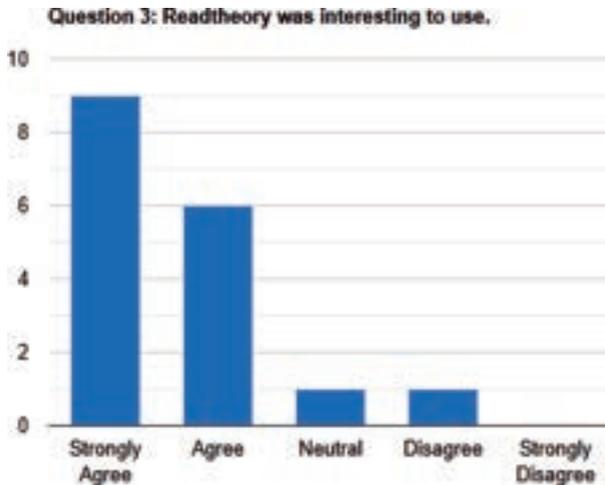
may have experienced challenges with the content or reading level adjustments, perceiving the materials as either too difficult or not sufficiently challenging, which could lead to frustration or disengagement.

-“Very good, help me so much on the reading exercises.”

-“It was a good experience. I don’t have motivation to read in english, so it was really nice to have a platform where I can read short passages every week.”

Question 3 - Readtheory was interesting to use.

Research suggests that students generally prefer and benefit from gamified learning applications, which include elements like points, leaderboards, and progress bars, can increase engagement, enjoyment, and motivation (Filippou et al., 2018). Research on primary school students’ readiness to engage with mobile learning apps revealed strong correlations between perceived usefulness and behavioral intention to use educational technologies (Camilleri & Camilleri, 2019). However, the same study found no significant relationship between how easy its use was perceived and enjoyment of educational apps used in school settings. Respondents



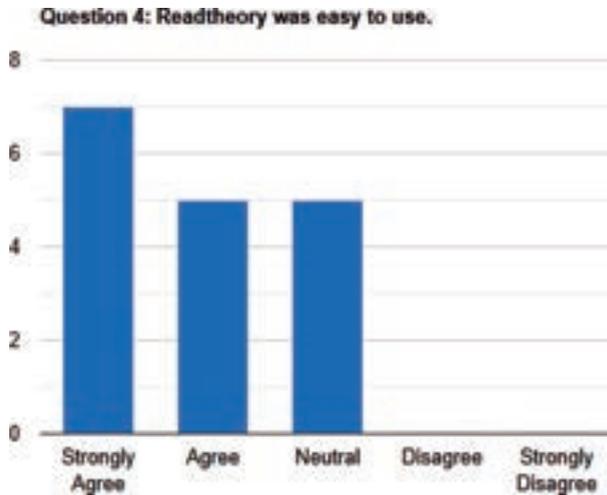
overwhelmingly responded positively with 88% fitting into either the strongly agree or agree category. One student remained neutral, and one disagreed.

-“It is good. Once you start, you can’t stop”

-“Good. Because I can learn English with short sentences.”

Question 4 - Readtheory was easy to use.

While five students remained neutral, while the remainder of the respondents answered positively with seven agreeing strongly and five agreeing. Students’ comments highlighted the straightforward layout and manageable question difficulty, which made it easy to navigate through the platform without needing extensive guidance. However, the five neutral responses suggest that some students may have encountered minor usability challenges, possibly related to the adaptive difficulty level, which adjusts based on performance and may feel unpredictable. Additionally, some students may prefer more visual aids or hints to guide their understanding of the reading passages. One student stated, “It’s ok but my way when doing reading is to read the question first then find the keyword in the paragraph so it would be easier for me if they highlight the words they mention in the



paragraph.” Overall, while the platform was largely perceived as intuitive, some small enhancements in user experience could make it even more approachable for a broader range of learners.

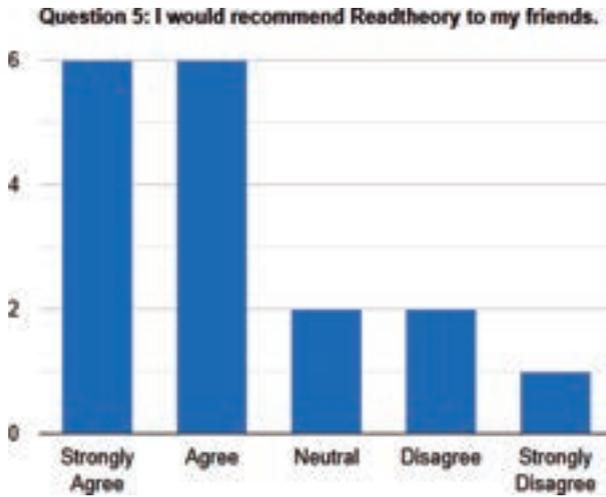
-“It’s very easy to use and the question is not too difficult. So I think it’s good.”

-“Fun and easy to use”

-“It’s good. Because it can be done in a short time.”

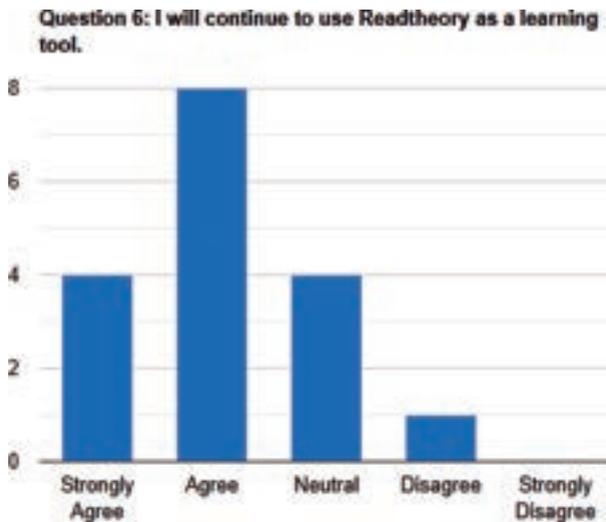
Question 5 - I would recommend Readtheory to my friends.

This question received the most divergent responses, as 70% agreed or strongly agreed, yet some students were uncertain about recommending the platform as one student disagreed and another strongly disagreed. A closer look at their comments reveals potential reasons: while students personally benefited from Readtheory, they may have hesitated to recommend it due to individual preferences for learning styles or interest in reading. One student mentioned that although they did not feel compelled to recommend it, they did appreciate how the platform helped them develop a habit of reading longer texts. This mixed feedback suggests that while Readtheory is effective, it might need additional motivating elements or personalized



options to appeal more universally.

-“I think very good. Because I get in the habit of reading long sentences thanks to Readtheory.”

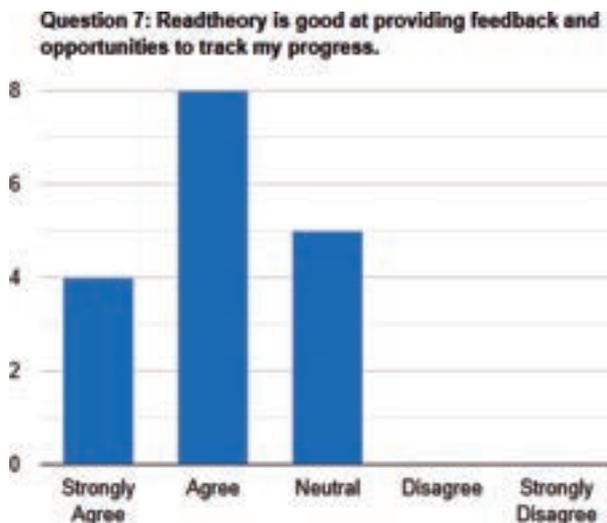


Question 6 - I will continue to use Readtheory as a learning tool.

Question 6 was included in order to determine whether or not students would continue to use the website independently after the end of the semester. Perceived usefulness, ease of use, and enjoyment significantly impact user satisfaction and intent to use the tool again, which in turn affect learning effectiveness (Johannsen et al., 2023). Four students remained neutral. However, 70% of students either agreed or strongly agreed, while one student disagreed.

Question 7 - Readtheory is good at providing feedback and opportunities to track my progress.

Positive feedback plays a crucial role in enhancing students' learning experiences and outcomes. Research indicates that it significantly improves students' motivation, engagement, and academic performance (Faulconer et al., 2021). Positive feedback has been shown to increase students' confidence, self-efficacy, and academic skills (Asryan, 2019). In online settings, combining positive feedback with performance-gap feedback can lead to substantial improvements in grades (Faulconer et al., 2021). 70% of



students agreed or strongly agreed with this statement, with approximately 30% neutral.

-“It was fun watching my score and also the graph made me motivate.”

Discussion

For all of the questions, over 70% of the 17 students surveyed either agreed or strongly agreed with the research questions. This indicates that students found that using Readtheory was mostly positive. Question 5 received the highest percentage of negative responses (17%) and was related to whether students would recommend the website to their friends. This finding may reflect individual variability in engagement with the tool, suggesting that although the site’s features appeal to some, they may not be equally motivating for all students. Still, 70% of students agreed or strongly agreed with the statement showing that a majority of the students appreciated these features. A potential reason for this reluctance to recommend the tool could be related to the repetitive nature of weekly assignments, which may feel more obligatory than engaging, particularly for students without a strong intrinsic motivation to read in English. Some students noted they lacked interest in reading, making it likely that even an accessible, user-friendly platform may not fully address underlying motivational barriers. This insight aligns with research indicating that perceived enjoyment and relevance are crucial for sustained engagement in online learning environments (Filippou et al., 2018).

Moreover, although the platform’s adaptive reading levels may create a sense of progress, students might have varying perceptions of their improvement, which could also impact their recommendation. While many found the experience beneficial, comments from students expressing uncertainty about their reading progress suggest that Readtheory’s progress indicators may not be universally compelling. The variability in students’ perceptions of their progress highlights an important aspect of Readtheory’s utility in an EFL setting: while many students appreciated the platform’s adaptive feedback, some felt uncertain about the extent of their improve-

ment. This disparity suggests that the progress indicators, though beneficial for tracking individual achievement, may not resonate equally with all users, potentially impacting their motivation. Research has shown that visible markers of progress can enhance learner engagement, yet overly standardized indicators might lack the personalization needed to fully captivate diverse student groups (Faulconer et al., 2021). These findings indicate that Readtheory could better support student motivation by incorporating more customized feedback options that align with individual learning goals, thereby fostering a stronger sense of achievement across a range of proficiency levels. This approach could transform the platform into a more adaptable tool that addresses both immediate learning needs and longer-term engagement in EFL contexts.

Interestingly, a few students mentioned their intention to continue using Readtheory independently, pointing to the platform's potential as a tool for autonomous learning. One student in particular continued to use the site for months after the semester ended. Some students even performed more than the required number of reading tasks per week. However, the lack of a strong consensus to recommend it may indicate that Readtheory could benefit from additional features to boost motivation and appeal, such as more interactive or socially engaging elements. Overall, while the positive feedback affirms the platform's utility in building reading skills, the reluctance among some students to endorse it underscores a broader need for adaptable, student-centered tools that accommodate diverse motivational and engagement profiles.

The results suggest that while Readtheory provides a structured, gamified approach to reading practice, its limited engagement features may impact students' long-term motivation, particularly among those with lower intrinsic interest in reading. Although the platform adapts reading levels and offers feedback, it may benefit from more dynamic elements such as personalized learning paths, collaborative tasks, or peer interaction opportunities. These features could address varying motivational needs and help students feel more connected to the material. Additionally, the tendency for some students to use Readtheory autonomously beyond the course

indicates that its convenience and adaptability may appeal to self-motivated learners. Such a tool could serve as a bridge for students aiming to build consistent reading habits, though further developments in personalization and community-building features would help strengthen Readtheory's role in EFL contexts.

Conclusion

This study examined Freshman English students' opinions of using the website Readtheory.org. The feedback from the survey conclusively showed that students hold a favorable view of the website. Combined with other research which shows that Readtheory has a positive impact on students' reading comprehension, it is this researcher's belief that Readtheory should be considered as a homework tool to use over the course of a semester or academic year. Because of the variety of the texts, the way students' progress is tracked, and the automatic way that the site calibrates to each student's proficiency level, Readtheory seems well-equipped to provide individualized reading practice for students.

However, the mixed responses to recommending Readtheory to peers suggest that while it fulfills its educational purpose, the platform may benefit from enhancements to its engagement mechanisms. Adding features such as interactive group activities, personalized feedback, or even peer comparison dashboards could make Readtheory more engaging for students with varying motivational levels. These additions could potentially transform the platform from a routine homework tool into a more compelling, socially supportive learning environment, particularly for those students who may struggle with intrinsic reading motivation.

This study had limitations regarding the small sample size. As a result, the findings may not apply to other universities, and should be interpreted with caution. A more extensive investigation would include information from a broader array of institutions both in Japan and internationally. Furthermore, more research should be done on the efficacy of Readtheory. While it is useful for students to enjoy using a learning tool, there are

increasingly more tools which can be easily found online that serve similar purposes. Educators should select those that students enjoy but are also found to produce the greatest results.

Looking forward, further research is recommended to examine the effectiveness of Readtheory in comparison to other online reading platforms. Studies with larger and more diverse sample sizes would offer deeper insights into the platform's utility across different demographic groups and educational settings, potentially strengthening the case for its broader use as an EFL tool. Additionally, a longitudinal approach could assess whether sustained use of Readtheory over multiple semesters influences long-term reading proficiency and retention. By exploring these areas, future research can better inform educators on how best to integrate online tools like Readtheory into EFL curricula to maximize both student engagement and learning outcomes.

Citations

- Adi, T., Ewell, O. K., Adi, P., & Vogel, T. (2009). A new theory of cognition and software implementations in information technology. *Journal of Information Technology Research*, 2(2), 65-89. <https://doi.org/10.4018/jitr.2009040105>
- Ani, A. (2019). Positive feedback improves students' psychological and physical learning outcomes. *Indonesian Journal of Educational Studies*, 22(2). <https://doi.org/10.26858/IJES.V22I2.11776>
- Camilleri, M. A., & Camilleri, A. C. (2019). The acceptance and use of mobile learning applications in higher education. In *Proceedings of the 2019 3rd International Conference on Education and E-Learning* (pp. 25-29).
- Cantos, K. F. S., Coello, M. B. B., & Pintado, J. A. C. (2023). Using online tools in teaching English as a foreign language. *Ciencia Latina Revista Científica Multidisciplinar*, 7(5), 5783-5794. https://doi.org/10.37811/cl_rcm.v7i5.8176
- Faulconer, E., Griffith, J., & Gruss, A. (2022). The impact of positive feedback on student outcomes and perceptions. *Assessment & Evaluation in Higher Education*, 47(2), 259-268. <https://doi.org/10.1080/02602938.2021.1910140>
- Filippou, J., Cheong, C., & Cheong, F. (2018). A model to investigate preference for use of gamification in a learning activity. *Australasian Journal of Information Systems*, 22. <https://doi.org/10.3127/AJIS.V22I0.1397>
- Handayani, F., & Handayani, N. D. (2020). The potential of online writing tools for EFL university students during the Covid-19 pandemic. *Journal of English Educa-*

- tion, 6(1), 9-9. <https://doi.org/10.30606/jec.v6i1.406>
- Ismawati, K., & Syafriyadin, S. (2022). Students' perceptions of using Readtheory.org in reading comprehension. *Journal of Applied Linguistics and Literacy*, 6(2), 170-180. <https://doi.org/10.25157/jall.v6i2.8067>
- Johannsen, F., Knipp, M., Loy, T., Mirbabaie, M., Möllmann, N. R., Voshaar, J., & Zimmermann, J. (2023). What impacts learning effectiveness of a mobile learning app focused on first-year students?. *Information Systems and e-Business Management*, 21(3), 629-673. <https://doi.org/10.1007/s10257-023-00644-0>
- Sari, M. I., & Putri, A. A. (2022). Exploring online learning tools used by EFL teachers during the COVID-19 pandemic. *Journal of Foreign Language Teaching and Learning*, 7(1), 61-76. <https://doi.org/10.18196/ftl.v7i1.13407>
- Settiawan, D. (2017). EFL students' vocabulary development: using leveled texts in online reading instruction. *Journal of English and Arabic Language Teaching*, 8(2), 124-132.
- Sewelem Alalwany, F. (2021). Enhancing reading skill via Readtheory.org: students' attitudes, Motivation, Autonomy and Perceptions. *Alalwany, FS (2019). Enhancing Reading Skill via Readtheory. org: Students' Attitudes, Motivation, Autonomy and Perceptions, University of Leeds, school of education, UK (MA Thesis). Retrieved from Arab World English Journal (ID Number: 273), 1-81. https://doi.org/10.24093/AWEJ/TH.273*
- Son, J. B. (2011). Online tools for language teaching. *TESL-EJ: The Electronic Journal for English as a Second Language*, 15(1), 1-12.
- Tempest, C. (2018). Implementation of Readtheory in a university EFL context. *OnCue Journal*, 11(1), 81-91.

教室内不正行為としての代理出席（「代返」）に 対する大学生の意識

— アナログ方式での出席確認方法を主流とする学生を対象とした調査から —

小 湊 真 衣

College Students' Attitudes toward Substitute Attendance ("Daihen") as an Academic Dishonesty

— From a survey of students who predominantly use analog methods to
check attendance. —

Mai Kominato

Abstract

“Daihen” is a Japanese word that refers to a form of academic dishonesty in which another person replies in place of the absent student in order to feign attendance in classes. Generally, “daihen” is considered minor compared to cheating on exams or plagiarism in reports. However, the opportunities for students to engage in “daihen” are much greater than those for exams and reports. This small accumulation of such behavior can lead to a decline in students’ sense of normalcy and result in negative behavior. Therefore, it is not an issue that can be ignored. In this survey, students’ attitudes toward “daihen” were investigated, and the educational designs to prevent them were examined. The survey results revealed a lower percentage of respondents who had requested or been requested to “daihen”. However, the results also indicated that there are some students who request “daihen” by casual means because they do not want to lose credits. In the future, it will be important to educate students to raise their awareness of academic integrity, and it will also be necessary to develop teaching methods and classroom management practices that prevent “daihen” from occurring.

はじめに

代理出席（代返）とは

田中・川澄（1995）も指摘しているように、文部法令には大学の授業における出席確認に関する規定は無い。しかし、大学設置基準の第21条において1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とするという文言があることから、最終試験等の受験資格を付与する要件として出席に関する規定を設けている大学や学部は少なくない²⁾。

近年、大学ではシラバス作成時に成績評価に出席点を含めないよう指導がされている。しかし特別な理由によらない欠席³⁾が全授業時間数に対してある一定を超えると最終試験等の受験を認めない、もしくは単位を認定しないことがシラバスで明言されている科目においては、学生の欠席回数を教員が把握するために出欠確認を行う必要がある。その確認作業の場において、出席回数ないし欠席回数を誤魔化するために学生によって行われる出席の偽装行為が「代返」である⁴⁾。

出席確認方法の種類とその変遷および代返の手段

代返の手段や方法は、どのような出席確認方法が行われるかによって異なる。大学における出席確認方法について村山（2006）⁵⁾は、出席確認自体を行わない講義と、何らかの方法で出席確認を行う講義があることに触れつつ、出席確認を行う場合の主な方法として「出席確認用の個別の出席カードを配布し学生がそのカードに学籍番号と氏名を記入する方法」⁶⁾と「講義内での小テストによる出席確認方法」⁷⁾を紹介し、近年は専用端末に学生証をかざすことによる出席確認が各大学で導入されつつあることを報告している。専用端末にICチップが内蔵された学生証をかざす以外の出席確認方法としては、携帯電話から独自のアプリケーションを起動させ、GSP機能を利用したり特定の番号を入力させたりすることで出席確認を行う方法も導入され始めている⁹⁾。

このように、技術の発展に伴い大学における出席確認方法は口頭ないし紙媒体を用いるアナログな方法から ICT を活用した方法へと変化してきている。また、新型コロナウイルス感染症の流行以降に一般的となったオンライン授業やオンデマンド授業でも、対面授業とは異なる様々な出席確認方法が考案されている¹⁰⁾。

しかしこうした出席確認方法の変化に合わせ、代返方法も変化している。例えば朝日新聞の天声人語（2022年2月18日）は、「代返」を「我が国の大学で盛んだった文化」と紹介しつつ、声色を変えて出席の返事をごまかすような従来の「代返」が、近年の出欠確認方法に合わせて「ピ逃げ¹¹⁾」や「同時再生¹²⁾」といった形に変化してきていることを紹介している。

このように大学側では様々な出席確認方法が考案されているものの、教員側が学生の顔と名前を完璧に一致させることが難しい規模の受講生を抱える科目においては、代返を完全に防ぐことは困難であるのが現状である。例えば鬘谷・鈴木・鈴木（2016）¹³⁾は、学生証を用いた出席確認方法について、他大学でも大規模に普及している方法であり、出席を確認して記録を残すという点では完璧なものであるとしつつ、代返に対しては大きな課題があることを指摘している¹⁴⁾。

代返に対する罰則規定

学生の不正行為には罰則規定が設けられているものの「代返」に対する罰則を明文化している大学は多くない^{15), 16)}。「代返」に対する罰則が明文化されていない大学において、代返の取り扱いや、それが発覚した場合の処分や指導およびその対策は主に各科目担当教員の裁量に任されている。しかし、こうした教員間の代返に対する対応および考え方の違いや不一致は学生の代返行動や意識に影響を与えている可能性が考えられる¹⁷⁾。

代返を取り上げることの意義

各科目の単位をどのように認定するかは、その科目の内容によっても異

なり、本来教員の裁量に任されるべきである。したがって、学生の出欠状況の確認をすべての講義において義務づけることは適当ではないだろう。また、学生が代返を行うことを前提とした対策は、学生と教員の相互の信頼関係を損ないかねない。しかし、それでも大学において学生の「代返」に対する意識や現状を明らかにし、対策を講じることには意義がある。第一に、代返は各学生の本来の修学状況の確認を行う上でのノイズとなるためである。例えば出欠席に関する情報は、学生の健康状態や生活状況を把握するための貴重な手がかりとなるが¹⁸⁾、代返によって出席の偽装が行われることにより、適切な介入のタイミングを逃してしまう可能性が考えられる。また、社会に貢献しうる善良な市民を輩出するという側面から考えれば、大学生活の中で行われる不正行為を放置することは、代返を行う本人にとっても、それを行う学生の存在を認知しているその他の学生にとっても、望ましいとはいえない¹⁹⁾。また、海外の学生を対象とした先行研究では、大学における不正行為は将来の犯罪行為を予想するという可能性も示されている²⁰⁾。日本と異なる文化圏において実施された研究結果を無批判に日本の現状に当てはめることには当然慎重であるべきだが、大学在学中に高頻度で学業不正行為を行うことが、その学生の将来における望ましい社会生活態度を予測しうるとは考えづらい。したがって、学生の健全育成という観点からも、「代返」を調査テーマとして取り上げることに一定の意義はあると考えられよう²¹⁾。

代返をとりあつかった先行研究としては、代返を予防するためのツール開発に関するものが多く²²⁾、代返に対する学生ないし教員の意識や現状に関しては、これまであまり注目されてこなかった。そこで本調査では、大学において学生が行う不正行為のうち代返に着目し、学生が代返に対してどのような態度ないし意識を持っているのかを明らかにすることを目的とした。大学における出欠確認方法はアナログな方法から ICT を活用する方法へと変化してきているが、今回はまずコロナ禍以前に収集したデータをもとに、アナログな出欠確認方法に対して行われる代返についての学生の

意識を明らかにすることを目指した。

【調査目的】

アナログな方法で出席確認が行われている大学に在籍する学生が、代返に対しどのような態度および意識を持っているのかを明らかにすること。

【調査方法】

201X年7月から8月にかけて、関東近郊の4年制大学の文系学科で学ぶ大学生に対し、授業時間外の時間を用いてアンケート調査を実施した。本調査は新型コロナウイルス感染症が流行する2020年以前に実施された。対象となった学生の主な出席確認方法は、リアクションペーパーに学籍番号、氏名および授業内で提示された課題の回答を記入して提出し、教員がそれをもとに出席状況をチェックする方法である。

調査紙のタイトルは「代返（代理出席）に関する調査」とし、フェイスシートでは本人の年齢と性別、これまでに代返に関わった経験の有無（「代返したことがある」「頼んだことがある」「代返したことも頼んだこともある」「どちらも経験がない」の4件法）と、関わった経験がある場合はそのきっかけ（「良い成績を取りたかったから」「単位を落としたくなかったから」「授業に出たくなかったから」の3件法）と方法（「直接」「メールやラインで」「電話で」の3件法）について尋ねた。次に、代返に対する考え方に関する質問項目として、代返への抵抗感や良心の呵責に関する質問項目（例：「代返をしても良心は痛まない」）、代返が起きやすい環境や授業の構成に関する質問項目（例：「代返が起こるのは、大教室であるせいだ」）、代返にかかわる人物に対するイメージに関する質問項目（例：「世渡り上手な人ほど代返を利用している」）にダミー項目を加えた計25項目（ダミー項目以外の具体的な質問項目については表2に示した）について、それぞれ「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の5件法で尋ね、最後に代返行為についての考えを自由記述式で尋ねた。回収した質問紙の回答はMicrosoft OfficeのExcelを用

いてデータ化し、そのうち量的データは Excel および jamovi を用いて分析を行った。自由記述に対する質的分析の結果は別稿にて報告予定のため、本稿では量的分析の結果について報告する。

調査を実施するにあたり、調査対象者には調査目的および趣旨と倫理的配慮に関する説明を行った。調査では個人が特定できる情報は収集せず、データは教育・研究目的以外には使用しないこと、回答内容が成績等に反映されることは一切ないこと、調査への参加は完全に任意であり、回答の有無による利益および不利益は一切生じないこと、調査報告後のデータおよび調査紙は適切に処理すること等を書面および口頭にて説明し、同意が得られた対象者へのみ質問紙を配布し回答を依頼した。なお、調査内容および手続きは調査実施時の勤務校において「人を対象とする研究倫理基準」を遵守していること、また個人情報保護等の倫理的配慮を考慮した内容であり、学内の倫理審査を必要としないものであることが確認された。

【結果】

学生 294 名（男性 294 名・女性 60 名）からの回答を得た。²³⁾ 回答者の平均年齢は 19.7 歳（SD=0.90）であった。回答の一部のみに欠損があったデータに関しては、その項目のみを分析から除外して分析を行った。

代返に関わった経験の有無について

代返の経験に関する集計結果を表 1 に示す。「あなたは今まで授業の代返にかかわったことがありますか」という問いに対し、「代返したことが

表 1. 代返の経験に関する度数分布表 (n=278)

	度数	%
代返したことがある	14	5.0 %
頼んだことがある	7	2.5 %
代返したことも頼んだこともある	24	8.6 %
どちらも経験がない	233	83.8 %

ある」「頼んだことがある」もしくは「代返したことも頼んだこともある」と答えたのは、回答者 278 名のうち約 16.2%にあたる 45 名であった。

「代返を頼んだきっかけは何でしたか」という問いに対しては 33 名から回答があった。3 件法で示した理由のうち一番多く選択されたのは「単位を落としたくなかったから」の 25 名 (75.8%) であった。このことから、成績評価の低下に対する危惧ではなく、単位を落とすかもしれないという不安や恐怖が、代返を依頼する動機となっている可能性が示唆された。

「どのような方法で代返を頼みましたか」という問いに対しては 35 名の学生から回答があった。依頼方法のうち一番多く選択されたのは「メールやラインで」の 27 名で、回答者の約 77%がメールやラインといった気軽なツールを用いて代返を依頼していた可能性が示唆された。このことから、代返を依頼する学生は、事前に準備をするなどして計画的に違反行為を犯しているというよりも、気軽に思いつきのような形で友人に違反行為をすることを強いている可能性が示唆された。

代返に対する意識や考え方について

代返行為に関する質問項目について、ダミー項目を除き確認的因子分析を行った結果を表 2 に示す。適合度検定の結果は $\chi^2(167) = 549, p < .001$ 、CFI = .840, RMSEA = .097 で、モデル適合度が十分とは言えなかったことから、今回は因子ごとの得点集計や因子間の関連の検討はせず、各質問項目の回答の分布から大学生の代返に対する意識の傾向を検討することとした。代返に関する質問項目の回答結果について質問内容別にまとめたものを図 1～図 3 に示す。

代返が起きやすい環境や授業の構成に関しては、毎回出席をとる授業や、名前や学籍番号のみを書く出席カードであると代返が起きやすくなると考える学生が多く、特に授業評価が出席重視であるなど授業評価に出席が含まれることが代返の発生を助長しているという考えをもつ学生が多い可能性が示唆された。

表 2. 確認的因子分析結果

	因子負荷 推定値	標準誤差	Z	p
(因子 1) 代返が起きやすい環境や授業の構成				
「代返が起こるのは、授業で毎回出席をとるせいだ」	0.824	0.070	11.78	< .001
「代返が起こるのは受講者数が多いせいだ」	0.726	0.067	10.88	< .001
「授業評価に出席が含まれなければ代返は起こらないだろう」	0.721	0.072	9.95	< .001
「代返が起こるのは授業評価が出席重視であるせいだ」	0.686	0.069	10.01	< .001
「代返が起こるのは、大教室であるせいだ」	0.618	0.083	7.45	< .001
「授業がつまらないと代返を頼みたくなる」	0.585	0.079	7.41	< .001
「名前や学籍番号を書くだけの出席カードだと代返は楽だ」	0.478	0.061	7.90	< .001
(因子 2) 代返に対する抵抗感や良心の呵責				
「代返をしても良心は痛まない」	0.784	0.061	12.92	< .001
「代返はそれほど恥ずべきことではない」	0.756	0.065	11.67	< .001
「代返はカンニングほど緊張しない」	0.663	0.062	10.65	< .001
「代返行為に、道徳心や良心は関係していない」	0.518	0.067	7.71	< .001
「代返は人助けだ」	0.496	0.068	7.33	< .001
「代返がバレても、それほど大変なことにはならない」	0.386	0.070	5.51	< .001
「代返よりもカンニングの方が罪は重い」	0.350	0.074	4.77	< .001
(因子 3) 代返にかかわる人物に対するイメージ				
「真面目な人も代返はする」	0.746	0.072	10.31	< .001
「世渡り上手な人ほど代返を利用している」	0.725	0.061	11.80	< .001
「成績が良い人ほど、代返をうまく使っている」	0.714	0.076	9.34	< .001
「前の方の席に座っている人は代返をしない」	0.300	0.076	3.93	< .001
「優しい人ほど代返を断れない」	0.296	0.070	4.26	< .001
「友達が少ない人の方が、よく代返を頼まれる」	0.209	0.068	3.06	0.002

図 1. 代返が起きやすい環境や授業の構成について (人数)

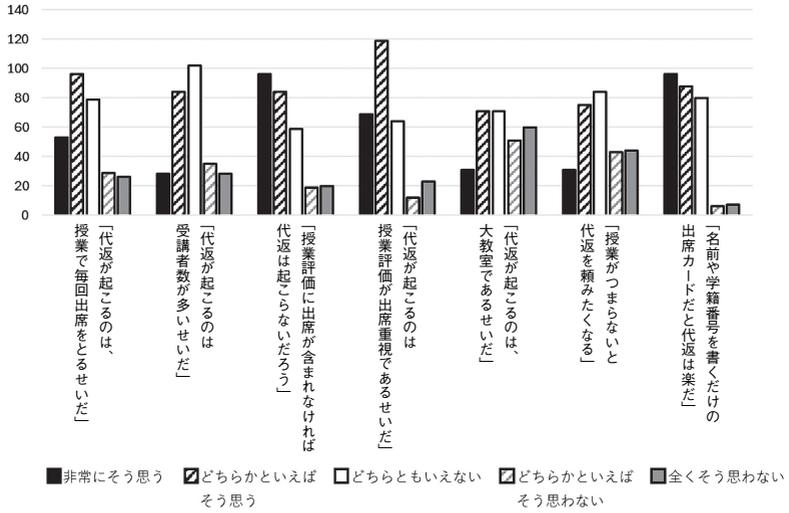


図 2. 代返に対する抵抗感や良心の呵責について (人数)

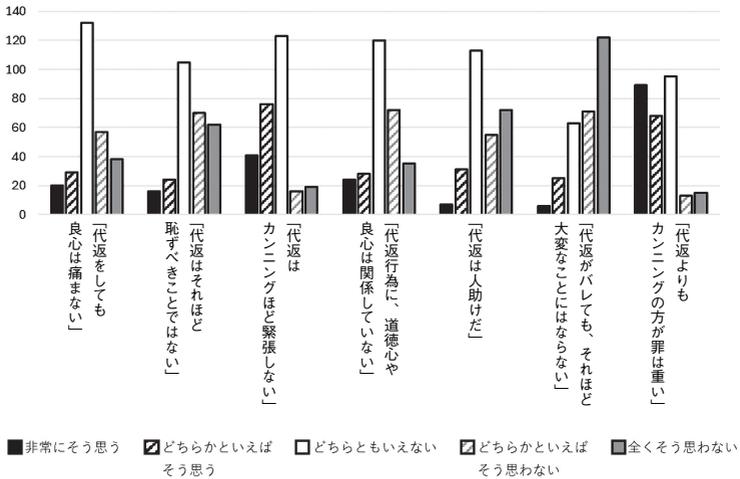
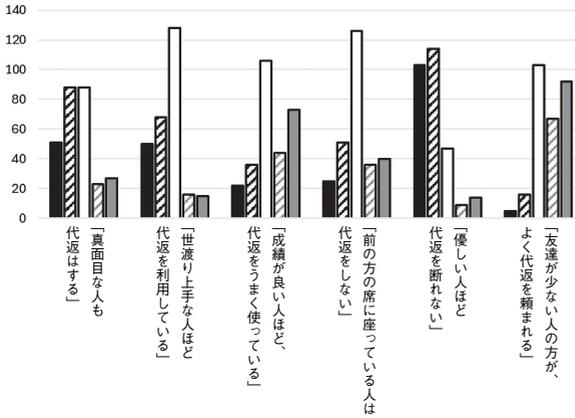


図3. 代返にかかわる人物に対するイメージについて（人数）



■非常にそう思う □どちらかといえばそう思う □どちらともいえない □どちらかといえばそう思わない ■全くそう思わない

代返に対する抵抗感や良心の呵責に関しては、代返よりもカンニングの方が罪が重いと考えている学生が過半数を占めていた。これはすなわち、カンニングと比べると代返の方が罪が軽いと考えている学生が多いという可能性を示唆していると言えるが、「代返がバレても、それほど大変なことにはならない」という問いに対しては「全くそう思わない」と答える学生が多いことから、代返行為が良くない行為であるという認識自体は、学生間での共通認識となっている可能性が考えられた。

代返にかかわる人物に対するイメージとしては、真面目な人も代返はするという考えをもつ学生が一定数存在することが確認された。また、友達が多かったり、優しくかったりといった、本人にまつわる属性や特徴が、代返を頼まれた際にそれを断れない要因として作用している可能性があると考えられる学生が多いことも確認された。

【考察】

本調査の目的は、「代返」に対する大学生の意識、特にコロナ禍以前のアナログ方式での出欠確認が行われていた大学における学生の代返の現

状と意識について明らかにすることであった。調査の結果、代返を行う理由や依頼の方法に関しては、単位を落としたくないという理由により、携帯電話のメッセージアプリなどを經由して友人に代返を依頼している学生が存在していたことが確認された。

代返に対する意識として今回は、代返が起きやすい環境、代返に対する良心の呵責、代返にかかわる人に対するイメージという3つを取り上げて調査を行った。その結果、受講者数や授業自体の面白さといった要因よりも、毎回の授業における出席確認の有無や、授業評価における出席の重視といった要因が代返と関連している可能性が示唆された。また、出席票に名前や学籍番号を書く形式の出欠確認の場合、欠席者本人が書いたように見せかけるために筆跡を偽装する必要があるが生じるが、そうだとしても代返を行うことは楽であると考えられる学生が多かったことから、ICチップが搭載された学生証等をカードリーダーにタッチするだけの出欠確認方法は従来のアナログな方法以上に気軽な代返を誘発しかねない可能性があると考えられる。授業中にランダムなタイミングで出席確認のための暗証番号等を示して端末からその番号を入力させたり、通信端末に搭載されたGPS機能を用いて出欠確認を行うといった方法も開発されてはいるが、それも学生同士が暗証番号等の情報をやりとりしたり、端末自体の貸与を行ったりすることによって代返は可能である。したがって、顔認証や指紋認証といった大掛かりなシステムを導入しない限り、代返行為をシステム上で完全に防止することは、現実的には困難であると考えられる。

代返に対する抵抗感や良心の呵責に関しては、代返の方がカンニングよりも相対的にみて罪が軽いと考えている学生が多かった。しかし代返行為が発覚した際のリスクに関しては、多くの学生の間で共有されている可能性が示唆された。このことはつまり、代返を頼まれた学生は、それを行うリスクを自覚しながら友人の代返の片棒をかついでいるということであり、代返を行う際に相応の心理的負担や不安を経験している可能性があることを示しているともいえる。「代返行為に道徳心や良心は関係していない」「代

返は人助けだ」といった項目に対しては「どちらともいえない」という回答が最も多かったことを踏まえると、代返行為を行うことの正当性は、場合や状況によって変わってくると考えている学生が多い可能性も考えられ、この点については今後の検討が必要である。

代返にかかわる人物に対するイメージとしては、その学生が座る位置や成績といった要因は「どちらともいえない」という回答が多かった。友達が多い人や優しい人ほど代返を断れないイメージがあることが確認され、また真面目な人であっても代返をすることがあると考えている学生も多い可能性が示された。

今回の結果から、学生は代返を、カンニングよりは罪が軽い行為であると考えている一方で、それが発覚した際のリスクについては理解している可能性も同時に示唆された。そのため、友人から代返を頼まれてそれを断れず、罪の意識を感じながら友情のために代返行為に手を染める学生を減らすためにも、学生一人ひとりの道徳心だけを頼りにするのではなく、代返をできるだけ難しくするための方法ないし対策を考えていく必要があるだろう。

代返が成功した（発覚せずに代返できた）という事実は学生を今後さらなる代返行為へと駆り立てる可能性が考えられる。また、代返を行っている学生の存在が他の学生に認知されることにより、代返を行っていない学生が不公平感を覚えたり、教員や大学に対する不信感を抱く可能性も考えられる。それは学生全体の学業意欲を低減させる可能性があるほか、学生に対する指導の行き届かなさは大学全体のマイナスイメージにもつながりかねない。

こうしたことを踏まえると、今後は国内外の様々な規模の大学ないし短期大学や専門学校において代返はどのように取り扱われており、どのような対策がとられているのかを調査する必要がある。また、それぞれの大学に所属する教員が代返行為に対してどのような意識をもち、どのような対策を行い、またどのような罰則が妥当であると考えているのかについて調

査することも必要であろう。学習理論の観点からいえば、厳しい罰によって行動を統制しようとすることの利点は少なく、むしろ望ましい行動に強化を与えるやり方で学生が代返に頼らない態度を身に着けられるよう支援していく必要がある。したがって、代返は決して見過ごされるべき軽微な違反ではないことを示すとともに、リスクを冒して代返をすることによるメリットよりも、代返を依頼しないことの方が自分自身にとってメリットが大きいということを、学生一人ひとりが認識するための機会ない仕組みが必要であろう。例えば初年次の全体オリエンテーションや初回授業時のガイダンスなどにおいて、カンニングや盗作・剽窃の禁止に加え、代返行為についても取り上げたり、大学における不正行為の問題について学生自身が自分の事として考える機会を設けたりといった工夫が必要であるかもしれない。

ただし、例えば少人数制のゼミなど、教員が学生全員の顔と名前を完全に把握している環境下では代返が起こりえないことを考えると、代返が起こる原因を学生自身の規範意識の低さや学習意欲の低さのみに求めるのは適当とは言えない。代返が起こるのは、大教室や多数の受講生など、はからずも代返を可能にする環境が存在していることも原因でもあるため、今後は代返を防ぐための出欠確認方法を考案するだけでなく、学生が代返をしにくくなるような環境や授業の在り方を模索していくことも必要であると考えられる。受講者数や教室の規模に関しては大学側の事情もあるため、代返を完全に防止することは困難であるかもしれないが、今後も代返に関する調査を進めることで、学生が違反行為に手を染める機会を少しでも減らしていくための工夫をすることは必要であろう。

代返を防ぐためにできる工夫としては、例えば①代返をしにくい環境づくり（受講生や教室の規模の調整、出席確認システムの改良など）、②代返ができる環境であったとしても代返を行わない学生の育成（規範意識および倫理観の育成、代返の依頼を断れるようにしたり代返の誘惑に負けないようにしたりするための教育など）、③代返に対する罰則規定の明文化と周知、な

どが考えられる。ただしこのうち③はその大学に所属する教員間で代返の対応に差が生じないために有効であると考えられるものの、罰を用いた学生の統制は教育的には望ましいとはいえないことには留意する必要がある。

今回の調査の問題点としては、回答者の男女比率にやや偏りがあったことと、モデル適合度がやや低かったことからその後の詳細な統計的分析が行えなかったことが挙げられる。また、今回はアナログな方法で出席確認が行われていた大学の学生のみを対象とした調査であったことから、今後はその他の出席確認方法が行われている大学の学生も対象とするなど、調査対象者を増やすとともに質問項目の内容自体についても見直しを行っていく必要があるといえるだろう。

注

- 1) 田中薫・川澄岩雄(1995)出席に関する調査と出席カードの設計. 杏林医学誌, 26(1), 120-121.
- 2) 参照条文 大学設置基準(昭和31年文部省令第28号)(抜粋)
第21条 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。
2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。
- 3) 多くの教育機関において欠席は特別な理由による欠席とそれ以外の欠席とで区別されている。特別な理由による欠席の例としては、忌引き、教育実習、部活動の公式試合への参加、裁判員制度に伴う裁判員候補者となった場合などによる欠席がある。また、学校保健安全法で定められている「学校において予防すべき感染症」(第一種としてはエボラ出血熱など、第二種としては風疹、第三種としてはコレラなどが指定されている)に罹患した場合、大学側が学生に「出席停止通知書」を送付する場合もある(例えば帝京科学大学など)。
- 4) 田中・川澄(1995)¹⁾は、杏林大学保健学部の教員を対象とした出席確認に関する調査において、約半数の教員は学生の氏名を呼ぶ方法で出席確認を行っているが、59%の教員はその問題点として「代返」を挙げていることを報告していることから、大学教員にとって代返は身近な問題であることが示唆

される。

- 5) 村山博紀 (2006) 大学別出席確認方法とその重要度についての分析. 文教大学 平成 18 年度卒業研究. 1-8.
- 6) 神奈川県内の大学生を対象とした聞き込み調査では個別の出席カードを配布し記入する方法をとる大学が多かったことから、これが一般的な出席方法であると述べられている。ただし論文内では対象者の年齢や人数等具体的なデータは報告されていない。
- 7) 村山 (2006)⁵⁾ は学生の講義内容の理解度を測る上で良い方法であるとしつつ、その分手間がかかることが欠点として挙げられている。
- 8) 村山 (2006)⁵⁾ による同論文内において、神奈川工科大学情報学部では 2006 年よりこの方法が導入されたことが報告されている。
- 9) 先駆的な取り組みとして、青山学院大学社会情報学部における iPhone を使用した出席確認の試みが毎日新聞 2009 年 7 月 17 日東京夕刊 4 頁総合面において紹介された。この方法では携帯電話の位置情報が送信され、学生が本当に教室内にいるのかを判別できるため、「『代返』ができにくい仕組み」であると紹介されている。ただし、携帯電話そのものを知人に預けておき、代理で操作をしてもらうことで、「代返」は不可能ではないことも指摘されている。
- 10) 例えば Zoom や GoogleMeet などを用いたオンライン授業の場合、カメラをオンにして受講生の顔を表示させたり、チャット欄への書き込みを指示したりすることで、受講生自身が情報端末の前にいるかどうかを確認することが可能である。
- 11) IC チップが内蔵された学生証を用いた出欠確認における代返方法の通称。「学生証をかざしてピッと鳴ったらすぐに教室を出る」方法として紹介されている。大学によっては、各教室の入り口付近に学生証をかざすことで出欠確認を行うことができる機器があらかじめ取り付けられている (例: 共立女子大学、立教大学熊谷キャンパス、帝京科学大千住キャンパスなど)。また、携帯型のカードリーダーを必要に応じて教員に貸し出す大学もある (例: 帝京科学大学東京西キャンパスなど)。これらはいずれも授業開始前に学生証をかざす方法であるため、授業時間前に出席登録をし、そのまま授業には出席せずに教室を後にしてしまう学生が存在する。
- 12) 動画配信型のオンライン授業におけるごまかし行為のこと。朝日新聞の同記事内では、動画の視聴履歴が記録され、「単位取得の条件になることもある」場合などに、パソコン上で複数の画面を一度に開いて再生する方法であると紹介されている。また、早稲田大学では「同時再生していた学生は約 100 人にのぼるとみられ、大学は『不可』を与えることを決めたと報じられる」と

述べられている。

- 13) 鬘谷要・鈴木ちひろ・鈴木成美 (2016) 先進 IT 機器利用および実験機器のデジタル化による科学系教育科目の理解および修学意欲の促進：平成 26 (2014) 年度和洋女子大学教育振興支援助成成果報告. 和洋女子大学紀要, 56, 133-142.
- 14) これに関して鬘谷・鈴木・鈴木 (2016)¹³⁾ は、学生証は貴重品であるという認識が無い学生が一定数存在しており、そうした学生にとっては代返のために学生証を友人に預けることに精神的抵抗が無いことや、こうした出席確認方法はむしろ代返を助長しかねない可能性を指摘している。
- 15) 信州大学は「代返」に対する罰則規定を明示している数少ない大学の一つであり、「本学が実施する試験等における不正行為の事例」の中に「他の学生に成り代わり授業に出席または代返等の行為を行った者並びに同行為を依頼した者」を挙げている。当該科目の単位については「認定しないことができる」、不正行為を行った学期の科目については「特に悪質な場合認定しないことができる」と定めている。(「信州大学 学生総合支援センター 学生の懲戒について」https://www.shinshu-u.ac.jp/campus_life/studentsupport/life/choukai.html (2024 年 12 月 8 日閲覧))
- 16) 例えば慶應義塾大学は、不正行為の例として「代筆」「剽窃・盗用・カンニング」「試験答案用紙の持ち帰り」「試験監督者の指示に意図的に従わない行為」「追加試験の申請における虚偽申告」を挙げ、違反があった場合は「懲戒として情状により譴責、減点、停学または退学の処分をするとしている (学部学則第 188 条)。(「慶應義塾大学塾生サイト「不正行為」<https://www.students.keio.ac.jp/sfc/pmei/class/fraud/>)」(2024 年 12 月 8 日閲覧) また、お茶の水女子大学は「国立大学法人お茶の水女子大学学生懲戒規程」の中に懲戒処分標準例を挙げている。区分は「犯罪行為等」「交通事故」「飲酒」「研究活動不正行為」「試験・論文等不正行為」「その他の非違行為例」であり、このうち「代返」に相当する可能性があるのは「試験・論文等不正行為」の「本学が実施する試験等における不正行為で身代わり受験等の悪質な場合」であると考えられる。その処分は「退学又は停学」とあるが、通常授業における代返が「身代わり受験等」に相当するか、また、ここでいう「悪質な場合」もしくは悪質でない場合とはどのような場合であるのかについての明言はない。(「国立大学法人お茶の水女子大学学生懲戒規程」https://www.ocha.ac.jp/reiki/reiki_honbun/x243RG00000455.html#e000000287) (2024 年 12 月 8 日閲覧)
- 17) それに対し、試験におけるカンニングやレポートにおける盗作や剽窃に関しては学則等で罰則規定が明文化されているほか、新入生ガイダンスや 1 年

次のゼミなどでも注意喚起がなされるため、学生・教員間でもそれらの行為に対しては、「してはいけないこと」という意識が共有されていると考えられる。

- 18) 例えば、これまで無遅刻無欠席であった学生が急に無断欠席をし、それが数週間にわたった場合、その事由に関する調査ないし適切な支援や介入が必要である可能性があり、場合によっては保護者との連携も必要となる。
- 19) 反骨精神こそ大学において養うべきであるという議論や、不正行為を行った学生の心の弱さを受け止め、過ちを赦す寛容さを養う機会とすべきであるという議論もありえるが、ここでは一般的な道徳心を身に着けることを「望ましき」として議論する。
- 20) 大学において学業不正行為を行っていた学生は、卒業後にも剽窃や虚偽陳述など他の形態の不正行為にも手を染めやすい傾向があるとされている (Sims, 1993) ほかに、社会的地位を濫用したホワイトカラー犯罪にも関わりやすい可能性があることが報告されている (Sierles et al., 1980)。
- 21) この点に関し、「代返」の対策を考えるのであれば、居眠りや内職も「授業をうけているふり」にあたる行為として取り締まるべきという意見も考えられる。しかし、居眠りや内職は代返と比較して、それを行った者に利益が少ない欺き行為であること、単独による実行が可能であり他者を共犯者に仕立て上げる欺き行為ではないこと、学生の生活状況の把握という面では代返の方がそれを行われた際の大学側のデメリットが大きいことから、今回は代返を取り上げて考察を行うこととした。
- 22) 例えば以下に挙げる論文は代返や途中退席といった学生の行為に対処するためのシステムないしアプリケーションの開発やその有効性の検証を目的している。
鞆大輔 (2011) 携帯電話の GPS 機能を用いた出席管理システムの有効性に関する考察～近畿大学での測位データ分析を基に～. 近畿大学商経学会商経学叢, 58(2), 257-267.
野村一葵・田中成典・中村健二・北川悦司・井上晴可 (2013) 出席確認アプリケーションの開発. 第 75 回全国大会講演論文集 (1), 589-590.
菅原勝也・佐藤永欣・高山毅・村田嘉利 (2013) 複数の Kinect センサを用いた出席管理システムの開発. 第 75 回全国大会講演論文集 (1), 587-588.
増田進也・小高知宏・黒岩丈介・白井治彦 (2016) 携帯端末の Bluetooth 機能を用いた出席管理システム. 第 78 回全国大会講演論文集, 2016(1), 639-640.
宮崎光二・中道上 (2016) タブレット端末を用いた出席管理システムの開発. 日本教育工学会論文誌, 40(2), 105-112.
- 23) 今回の調査協力者は 300 人弱であったが、これは統計分析を行うにあたり

一定の基準を満たすサンプル数であると考えられる。例えば、「教育心理学研究」に掲載された犬塚・三浦・小川（2023）の原著論文は、大学生の意識や行動を調査対象としているが、調査対象者は171名、回答者159名である。また、「心理学研究」に掲載された伏島・津田・田中（2022）の原著論文は北陸地方の工科系大学に在籍する大学1年生から4年生を調査対象としており、有効回答数は305名（男性255名、女性47名、不明3名）であるが、解析結果は「日本人大学生の強みやウェルビーイング、自殺予防を扱う上で、ある程度一般化可能な知見を示している」と結論づけている。ただし、今後はさらに調査対象者を増やすことで報告の精度を上げるとともに、地域差や年代差、大学もしくは学部による差異などについても検討していく必要がある。

引用文献

- 田中薫・川澄岩雄（1995）出席に関する調査と出席カードの設計. 杏林医学誌, 26(1), 120-121.
- 村山博紀（2006）大学別出席確認方法とその重要度についての分析. 文教大学平成18年度卒業研究. 1-8.
- 毎日新聞 2009年7月17日東京夕刊4頁総合面.
- 髷谷要・鈴木ちひろ・鈴木成美（2016）先進IT機器利用および実験機器のデジタル化による科学系教育科目の理解および修学意欲の促進：平成26（2014）年度和洋女子大学教育振興支援助成成果報告. 和洋女子大学紀要, 56, 133-142.
- Sims, R., L. (1993) The Relationship between Academic Dishonesty and Unethical Business Practices, *Journal of Education for Business*, 68, 207-211.
- Sierles, F., Hendrickx, I., & Circle, S. (1980) Cheating in Medical Schools, *The Journal of Medical Education*, 55(2), 124-125.
- 鞆大輔（2011）携帯電話のGPS機能を用いた出席管理システムの有効性に関する考察～近畿大学での測位データ分析を基に～. 近畿大学商経学会商経学叢, 58(2), 257-267.
- 野村一葵・田中成典・中村健二・北川悦司・井上晴可（2013）出席確認アプリケーションの開発. 第75回全国大会講演論文集（1）, 589-590.
- 菅原勝也・佐藤永欣・高山毅・村田嘉利（2013）複数のKinectセンサを用いた出席管理システムの開発. 第75回全国大会講演論文集（1）, 587-588.
- 増田進也・小高知宏・黒岩丈介・白井治彦（2016）携帯端末のBluetooth機能を用いた出席管理システム. 第78回全国大会講演論文集, 2016(1), 639-640.
- 宮崎光二・中道上（2016）タブレット端末を用いた出席管理システムの開発. 日

本教育工学会論文誌, 40(2), 105-112.

犬塚美輪・三浦麻子・小川洋和 (2023) 大学生が作成する事後ノートの質とテスト成績の関連—試験時に参照するための事後ノート作成方略の認知に注目して—. 教育心理学研究, 70(1), 35-47.

伏島あゆみ・津田彰・田中芳幸 (2022) 大学生における強みと自殺親和状態との関連に対するウェルビーイングの媒介効果. 心理学研究, 93(3), 209-218.

謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆さんに感謝申し上げます。また、英文要旨の確認をいただいた先生ならびに査読の先生には本論文の執筆にあたり大変貴重なご指導を賜りました。ここに記して心より感謝申し上げます。

付記

本調査に関し、開示すべき利益相反はありません。

[研究ノート]

PBLによるビジネス日本語教育の実践報告

— 大学学部留学生を対象とした就業体験型授業の試み —

小 竹 直 子

Practical Report on Business Japanese Education Through PBL: Experimental
Work Experience-Based Course for Undergraduate International Students

Naoko Kotake

Abstract

Japanese language education for business purposes aimed at international students requires more than mere knowledge transfer from instructors; it calls for the integration of active learning methodologies. This approach is necessary because the objectives of such education go beyond language proficiency improvement to foster a comprehensive understanding of Japanese corporate culture, business practices, professional norms, and competencies.

To achieve these objectives, this paper reports on a course that adopted project-based learning (PBL), wherein students acquired business Japanese education by engaging in problem-solving projects. The course was conducted by the author in 2022 for third-year international students at Asia University. It involved an internship-based summer program that allowed students to gain hands-on experience in project planning and proposal development. This paper details the specific methods and content of the PBL approach and summarizes the participating students' reflections and feedback.

1. はじめに

亜細亜大学では、日本企業への就職を目指す学部3年生の留学生を対象

にビジネス日本語教育を目的とした科目が開講されている。2019年度の科目設置当初は、夏季休暇中に5日間のインターンシップ実習を実施することを予定していたが、コロナ禍でインターンシップ先の確保が難しくなり、2022年度以降は担当教員主導でインターンシップ実習に代わる授業を行うこととなった。そこで、少しでも就業体験に近い活動を組み込もうと考え、観光企画立案の課題にグループで取り組みさせ、成果発表をさせるというプロジェクト型授業を行った。本稿は、2022年8月にインターンシップ実習として行ったプロジェクト型授業の実践報告である。2022年度は、担当教員である筆者が主導して実習内容を設計し、部分的に企業の担当者に協力してもらう形でインターンシップ実習を実施した。本稿ではその具体的な実施方法と評価の仕方、受講生による成果発表の内容を中心に報告する。また、インターンシップ実習終了後に受講生に対して行ったアンケート調査から本授業実践に対する受講生の反応や感想をまとめる。

2. PBLによるビジネス日本語教育の意義

PBL (Project-Based Learning、以下PBLと略す)とは、学生が問題解決型のプロジェクトを遂行することを通して学ぶアクティブラーニングの手法の一つで、日本語教育においても1990年代にコミュニケーション重視の教授法の広がりとともに広く実施されるようになった。特に、ビジネス日本語教育は、言語能力の育成だけでなく、社会人としての行動規範や行動能力の育成も含めた人材育成の側面を持つことが指摘されており(盛岡ほか2015、栗飯原2015)、PBLによる指導が適していると言われる(堀井2010、作田・寅丸2017)。

実際にPBLによるビジネス日本語教育の実践報告は多数報告されている。大石・遠藤(2009)は学部留学生の就職支援の一環として徳島県の観光地を宣伝するウェブサイトの制作というプロジェクトを取り入れた授業を報告している。鈴木(2009)では、留学生にOB/OG訪問をさせ、先輩たちがどのように志望企業を選んだか、その企業で働くために何が必要かなど

の体験談を聞くインタビューを行わせる PBL を報告している。留学生のビジネス日本語教育に PBL を取り入れる実践例は他にも、太田ほか（2010）、仁科・楊（2011）、寅丸ほか（2020）など多数の報告がある。それぞれ対象となる留学生のニーズに合わせて実施可能なプロジェクトを設定することで教育効果を上げる工夫がなされている。

本稿が報告する授業実践の独自性は、5 日間で短期集中的に実施したことと、日本語教育を専門とする教員がほぼ単独で行った点にあると考えられる。本実践はコロナ禍にあって企業の協力が得られにくい中、担当教員が単独で行えるインターンシップ実習の形を模索する中で実現したものが、同様の状況は今後も起こりうることを考えれば、少ないリソースで実践できるインターンシップの形として耳目に値する部分があるだろう。

3. 本プロジェクトの実践方法と内容

2022 年 8 月にインターンシップ実習として行った本プロジェクトは、受講生 20 名を二つのグループに分けて実施した。グループ 1 は 2022 年 8 月 2 日、3 日、4 日、5 日、8 日の 5 日間、グループ 2 は、2022 年 8 月 22 日、23 日、24 日、29 日、30 日の 5 日間で実施された。グループは受講生の参加希望に沿って分けられた。それぞれのグループの参加者の属性を表 1 に示す。参加者の日本語能力に関しては客観的なデータはないが、全員が日本滞在歴 3 年以上で日本語による口頭表現及び文書作成に十分に対応できるレベルであると考えられる。

協力企業は東急株式会社交通インフラ事業部、東急ホテルズの 2 社で、各 1 名の担当者にインターンシップ実習の初日にオンラインでご登壇いただいた。各企業の担当者から事業説明、課題提示、期待される成果などをご説明いただいた後は担当教員である筆者が課題遂行までを指導し、企業の担当者には最終発表を動画撮影したものを視聴してもらうことで評価と受講生へのフィードバックをお願いした。グループ 1 が東急株式会社交通インフラ事業部、グループ 2 が東急ホテルズで、担当者から提示された課

表1：プロジェクト型授業の参加者

		国籍	性別	所属学部
グループ1	受講生①	ミャンマー	女	経営学部
	受講生②	ベトナム	男	経営学部
	受講生③	香港	女	国際関係学部
	受講生④	中国	女	都市創造学部
	受講生⑤	ベトナム	女	経営学部
	受講生⑥	ベトナム	男	経営学部
	受講生⑦	タイ	女	国際関係学部
	受講生⑧	ベトナム	女	国際関係学部
	受講生⑨	フィリピン	女	国際関係学部
	受講生⑩	タイ	女	国際関係学部
	受講生⑪	タイ	女	国際関係学部
	受講生⑫	インドネシア	女	国際関係学部
グループ2	受講生①	ベトナム	女	経営学部
	受講生②	中国	女	経営学部
	受講生③	中国	女	経営学部
	受講生④	ベトナム	男	国際関係学部
	受講生⑤	ベトナム	女	国際関係学部
	受講生⑥	ベトナム	女	国際関係学部
	受講生⑦	ベトナム	女	国際関係学部
	受講生⑧	ベトナム	女	国際関係学部

題は前者が「アフターコロナの観光戦略」、後者が「ホテル宿泊プランの提案」であった。5日間の実習内容の詳細は表2に示す。

5日間のインターンシップ実習で受講生は4、5名のグループで企画立案作業に取り組み、最終日に15分程度で成果を発表した。最終発表では5つのグループが発表し、成果として表3に示す企画内容が発表された。

表2：インターンシップ実習5日間の実施内容

実施日	活動項目	内容
1日目午前	課題／提案方法／ 評価方法の提示	<ul style="list-style-type: none"> ・企業の担当者による会社説明・事業説明 ・企業の担当者から企画立案のテーマ（企画の目的、期待される成果）を提示する ・質疑応答を通して理解を確認する ・担当教員から評価方法を提示する
1日目午後	企画立案作業	<ul style="list-style-type: none"> ・担当教員が企画の例を示しながら、ターゲットの絞り込み、調査・資料収集の方法などについて説明した後、グループに分かれて作業開始
2日目午前	情報収集／企画立案／ 発表資料作成	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで企画立案作業と発表資料作成に取り組む。迷ったとき、相談したいときは適宜担当教員に質問する。
2日目午後	進捗状況の報告／ 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・終礼でグループごとに進捗状況について報告させ、問題点や課題について共有する。
3日目午前	情報収集／企画立案／ 中間発表の資料作成	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで企画立案作業と発表資料作成に取り組む。迷ったとき、相談したいときは適宜担当教員に質問する。
3日目午後	中間発表／講評	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに中間発表をさせ、他のグループのメンバーや教員が質問をする。 ・発表後に担当教員が修正指示を与える。
4日目午前	企画修正／最終発表の 資料作成	<ul style="list-style-type: none"> ・中間発表を受けて、企画の修正と同時に最終発表の資料を作成する。迷ったとき、相談したいときは適宜担当教員に質問する。
4日目午後	進捗状況の報告／ 振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・終礼でグループごとに進捗状況について報告させ、問題点や課題について共有する。
5日目午前	企画修正／最終発表 準備	<ul style="list-style-type: none"> ・各グループで企画立案作業と発表資料作成に取り組む。迷ったとき、相談したいときは適宜担当教員に質問する。
5日目午後	最終発表／講評 （企業担当者による 評価は後日）	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに最終発表をさせ、動画撮影する ・他のグループのメンバーや教員が質問をする ・発表後に担当教員から講評を述べる ・最終発表の動画データを企業担当者へ送って評価を受ける

表3：受講生による企画立案のタイトルと内容

企画立案タイトル	企画内容
Once in Japan 一期一会の体験	外国人観光客が日本食や和菓子作りなどの日本文化を体験する
インバウンド誘致を目的とする神前結婚式体験企画	外国人観光客が日本の神前結婚式を体験する
Cross Road アニメ聖地巡礼	海外のアニメファンが新海誠監督アニメ作品に登場する「聖地」を巡る
山中湖を満喫するツアー	国内客が山中湖でマリンスポーツを体験する
「おまかせ」京都宿泊プラン	外国人観光客が京都の文化・歴史を学ぶ

4. インターンシップ実習後のアンケート

インターンシップ実習終了後 2022 年 8 月 31 日～9 月 30 日に Google のフォームを使って受講生にアンケートを行った²⁾。インターンシップ実習参加者 20 名のうち 18 名から回答が得られた。主観的かつ断片的な記述ではあるが、受講生自身がインターンシップ実習の意義を実感した点や今後日本語学習への動機づけになった点など好意的な意見が多く見られた。

まず選択回答形式の項目では、「インターンシップ実習に参加してよかったですと思いますか」という質問に対して、14 名 (77.8%) が「とても良かった」、4 名 (22.2%) が「まあまあ良かった」と回答し、「どちらとも言えない」「良くなかった」という回答はなかった。また自由回答形式でその回答の理由を問うと、「今後の就活に役に立つから」「通常の授業では勉強できないことが勉強できたから」「(チームで課題に取り組む中で) チームワークの大切さや問題解決力など、様々なことを学んだ」「コミュニケーション能力や時間管理能力など、自分の能力の足りないところに気づいた」「仕事をするために必要な知識を知ることができた」「自分の短所と長所を知ることができた」「大学で学んだことを実務に近い形で活かすことができた」「情報収集の仕方、マーケティング調査のやり方、色々なことを身につけることができた」などの意見が寄せられた。

また、「インターンシップ実習を通して向上したと思う能力は何か」と

いう質問に対して、選択回答形式（複数回答可）で回答数が多いものから「グループワークを通して協調性が身についた」が16名（88.9%）、「挨拶や身だしなみ、報告・連絡・相談など、ビジネスマナーが身についた」が15名（83.3%）、「時間を守る意識が高まった」と「マーケティングなど、企業において必要となる知識やスキルを理解できた」がいずれも13名（72.2%）と回答多数であった。また、「インターンシップ実習に参加して、自分の能力の足りなさに気づかされた点は何か」という質問に対しては、選択回答形式（複数回答可）で「敬語など、ビジネス場面で必要となる日本語能力が不足している」が15名（83.3%）、「マーケティングや会計など、企業で求められる知識が不足している」が13名（72.2%）、「説得的に説明する能力が不足している」が12名（66.7%）と回答多数であった。

そして、「来年度以降このインターンシップ実習を行うにあたって、改善したほうがいいと思うことがあれば書いてください」という質問に対し、自由回答形式で「大学の教室ではなく企業でインターンシップを行なった方がいい」「一日でも企業見学があればよかった」「（グループ分けで同じ国の人だけだったので）違う国の人と組んだほうがいい」という意見が見られた。本実践では、企業の担当者の参加があったもののオンラインでの参加のみで、実習場所も大学内で行ったため、企業の職場環境に触れてみたいという希望が強く表れたものと思われる。しかしながら、本実践に対する否定的なコメントは実施場所や環境に関することのみで、内容に関しては概ね満足していることが伺える。

5. まとめ

本稿では、ビジネス日本語教育を目的とした科目においてインターンシップ実習としてPBLを授業に取り入れる教育実践を報告した。特に、コロナ禍にあってインターンシップ受け入れ企業の確保が難しい中で、さらに受講生20名全員が疑似的にでも就業体験を得ることができる形としてPBLを取り入れたことは、限られたリソースで人材育成を行う手法とし

て一定の情報価値を持つと考えられる。今回 PBL を取り入れた科目は留学生のみを対象としており、一般のキャリア教育よりも留学生の日本語能力や社会文化的知識に合わせた情報提供やアドバイスが可能であった点は、日本語教育の担当教員が主導する形で行った意義が発揮されやすかった。しかし当然ながら、日本語教員だけでは企業経営戦略、マーケティング、商品開発などに関する指導が行き届かず、あくまで疑似的な体験を提供するに留まった点はインターンシップ実習として不十分であるばかりか、ビジネス日本語教育としても物足りない部分があったであろう。

今回の PBL によるビジネス日本語教育の実践において見えてきた日本語教員の役割と企業との連携の必要性を踏まえて、産学連携によるビジネス日本語教育のあり方を再考していきたい。

謝辞

本授業実践のためにご協力いただいた東急株式会社様、東急ホテルズ様に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 協力企業の開拓については亜細亜大学キャリアセンターおよびインターナショナルセンターの協力を得た。
- 2) アンケートの言語は日本語のみで、回答は全て日本語による。非母語話者の日本語表現であり直接引用ではわかりにくい場合は表現意図を損なわない範囲で修正した。

参考文献

- 粟飯原志宣 (2015) 「再考：ビジネス日本語の定義と領域」前田直子編『ビジネス日本語の展開と課題』ココ出版、pp.103-123.
- 大石寧子・遠藤かおり (2009) 「就職支援のためのプロジェクト・ワーク：アジア人財コース PBL 型授業」『徳島大学国際センター紀要』第 5 巻、pp.1-6.
- 太田亨・今井武・島弘子 (2010) 「アジア人材資金構想・金沢大学コンソーシアムにおける短期集中型ビジネス日本語教育とその評価・課題」『金沢大学留学生センター紀要』第 13 巻、p.1-10.

- 作田奈苗・寅丸真澄（2017）「ビジネス日本語教育における Project-Based Learning の外観」『経営論集』第 27 巻第 1 号、pp.117-131.
- 鈴木伸子（2009）「インタビューを活用したビジネス日本語教育の試み—日本企業の OJT 研修に備えた Project Based Learning として—」『立教大学観光学部紀要』第 11 号、pp.140-147.
- 寅丸真澄・餐場淳子・作田奈苗（2020）「短期ビジネス日本語プログラムにおける Project-Based Learning の意義と可能性—体験による学びとキャリア支援という二つの観点から—」『BJ ジャーナル』第 3 号、pp.16-29.
- 仁科浩美・楊帆（2011）「山形大学における亜細亜人材資金構想『とうほくものづくり国際人材育成プログラム』—平成 20 年度日本語関連科目の指導報告と課題—」『山形大学留学生教育と研究』第 2 号、pp.61-72.
- 堀井恵子（2010）「プロジェクト型ビジネス日本語教育の意義と課題」『武蔵野大学文学部紀要』第 11 号、pp.96-86
- 森岡明美・神吉宇一・野々口ちとせ（2015）「日本における内容重視の日本語教育」佐藤慎司・高見智子・神吉宇一・熊谷由理編『未来を創ることばの教育を目指して—内容重視の批判的言語教育（Critical Content-Based Instruction）の理論と実践』ココ出版、pp.37-75

亜細亜大学 総合学術文化学会会員名簿

(令和六年度 = 2024年9月 所属学部 五十音順)

学会会長：松本 賢信

同副会長：高澤美由紀

経営学部

安形 輝
浅野 麗
大山 岩根
小川 直之
加藤 恵理
鎌田 遵
小池 求
小湊 真衣
鹿内 菜穂
清水 淳
馬場 浩平
原 仁司
堀 玄
三門 準
吉田 律

経済学部

一山 稔之
大森 克徳
岡村 佳奈
奥井 智之
杉渕 忠基
立尾 真士
土屋 亮
長浜 尚史

法学部

池田 明子
稲本 唯史
今津 敏晃
佐藤 知乃
高澤美由紀
堀内 昌一
松本 賢信
三浦 朋子
八谷 舞

国際関係学部

青山 治世
綾野 誠紀
池亀 直子
大野 亮司
金 賢貞
小竹 直子
田部井圭子
東浦 拓郎
ブルックス, ミキオ

都市創造学部

石田 幸生
顧 姍姍
スカウテン, アンドリユー

所収。

- (12) 勝川春章の細判錦絵二枚続「二代目山下金作の大きいそのとら 二代目嵐三五郎の小林のあさひなの三郎」(安永二年正月) (太田記念美術館所蔵) 等。図録「生誕290年記念 勝川春章 北斎誕生の系譜」(太田記念美術館 二〇一六年) 参照。

- (13) まもなく正式に元服するであろう若衆の髪型。評判記ではテンポラルに角鬘之部ないし角鬘(若)立役之部などを設けることがある。

- (14) 武井協三氏「役者女房評判記の紹介」(『芸能史研究』六五 一九七九年)。

- (15) 鈴木重三氏「役者絵本の効用」(同氏『絵本と浮世絵』(美術出版社 一九七九年) 所収)。橋崎宗重氏編『秘蔵浮世絵大観 ドイツ・プルヴェラー・コレクション』(講談社 一九九〇年) 図版解説一五八―二二六参照(執筆服部幸雄氏)。

- (16) (9) に同じ。

- (17) 初代豊国の高弟三代目豊国(国貞)の筆になる『古今俳優似顔大全』シリーズは、文久二、三年(一八六二―六三)にかけて出版され、元禄から当時までの人気役者三〇〇人以上もの似顔絵集成として知られる。このうちでも二代目音八は、への字のような眉、二重三重のまぶたと大きな目、大きな耳、額の中央で結んだ鉢巻、顎を胸元にぐつと引いたポーズで描かれる。役名は『仮名手本忠臣蔵』に登場する半道敵(おどけた敵役)鷺坂伴内(『忠臣蔵』の人形浄瑠璃初演は寛延元年(一七四八)大坂竹本座、翌年には江戸三座でも歌舞伎化された)。

座元たちの名前を揭示する。太夫元の嗣子が「若太夫」で、通常その肩書で太夫元之部に並ぶが、このときは若太夫之部が独立して設けられた。七三郎は座元でも後継者でもないが、中村座に縁の深い名跡であるところから若太夫之部に入っ
たらしい。ただしこのときの七三郎の位付「惣巻軸」は本来、部を超越した位置づけである。

- (3) 初代嵐三五郎と初代音八は師弟関係にあり(寛延三年(一七五〇)刊『新撰古今役者大全 二』嵐音八の条)、その息子たちも無交流ではあるまい。彦吉(二代目音八)は上坂したという七年度の評判記大坂之巻にあらわれず、上坂中の動向の詳細が不明で、しかも一年かきりで江戸に戻っている。襲名に際して師匠筋に挨拶することが上坂の主目的だった可能性がある。そして三五郎を同伴して八年度に帰江したということもできる。

- (4) 仲蔵の弟子、のち四代目桜山四郎三郎。
(5) のち三代目宮崎十四郎。

- (6) 東洲齋写楽の大判錦絵のうちに「篠塚浦右衛門の都座口上図」がある(東京国立博物館等所蔵)(図録「特別展写楽」(東京国立博物館 二〇一一年) 図版八一参照)。寛政六年(一七九四)七、八月の写楽第二期の作品群のうちでも、この作品の考証が遅れたのは、口上役はベテラン役者ではあっても有名役者ではなかったためである。『絵本舞台扇』以外で彼の若き日の姿を確認することができるのがこの「新板役者双六」(二一—A)となる。

- (7) 武藤純子氏「初期鳥居派の役者似顔」(同氏「初期浮世絵と歌舞伎 役者絵に注目して」笠間書院 二〇〇五年) 所収。

- (8) 拙稿「江戸歌舞伎の興行と狂言——寛保三年「春曙塚曾我」の場合——」(『近世文芸』六九号 一九九九年一月)、拙著『近世中期歌舞伎の諸相』(和泉書院 二〇一三年)に改稿再録。

- (9) 拙稿「歌舞伎の役者絵本」(『亜細亜大学学術文化紀要』二七号 二〇一五年)等。

- (10) 展示パンフレット「江戸、芝居町発掘——江戸の歌舞伎と考古学——」(編集執筆仲光克顕氏・折原覚氏 中央区教育委員会・中央区立郷土天文館 二〇一五年)。

- (11) 拙稿「初期鳥居派の役者絵と上演資料——「柏峠吉例相撲」、拙著『近世中期歌舞伎の諸相』(和泉書院 二〇一三年)

例えば上方役者三五郎はその一人である（安永三年（一七七四）刊『役者全書 二』等）。同じく嵐姓の道外方音八はおおかたは蛭子屋を用いるが（同前）、京蛭子屋、京屋とする場合もある。

あえていえば（二―E）は、のち初代歌川豊国らに描かれる二代目音八を連想させる（音八）。そして『舞台扇』に描かれた彦吉（二代目音八）の顔だちは、文調の複数の役者絵に描かれた父初代によく似る。父子だから似てもいようし、また息子の二重まぶたは生得のもので、父のそれは加齢によるものということもあろう。もしも（二―E）を若き日の二代目と見るなら、飛び双六の性質上、同一名称の升（同一人物等の呼称により指示される升）は配置できないため、（二―B）を二代目に酷似した初代と見なすことにならうか。すると空間的には同時に存在しないはずの二人の音八が、資料上には並ぶことになってしまう。

糸屋は、役者の屋号としては見つけることができなかった。そして、人物等の名称によってその升が記載指示されておらず、そこに描かれた人物が何者とも不明のままの升が一つ残っており、それが（一―A）「ふり出し」である。糸屋とは、顔かたちも身元もあかさされぬまま、棧敷で興行の成功を祈念する金主の替名ではないかという可能性を書きそえたい。これら屋号をめぐる調査については今後の課題とする。

註

- (1) 拙稿「近世期木板印刷の改刻——芝居双六の場合」（『亜細亜大学学術文化紀要』三六号 二〇一九年）、同「芝居双六にみる演劇情報——『けいせい福引名護屋』と道成寺物の地理」（『演劇研究会会報』四五号 二〇一九年五月）。
- (2) 江戸の座元は世襲制で上方よりも権威があり、役者評判記の江戸之巻ではたいてい「太夫元之部」を立てて三大劇場の

なかったかで、彼は「上り」の升に入ったままとなったのではないだろうか。

役者たちの所属は九年度の江戸三座に分散していることから、「新板役者双六」は特定の劇場をとりあげようとしたものではない。役者評判記は役者について評判することが本領であり、原則として正月と三月に定期刊行され、役者の移動から各劇場の座組まで都度情報は更新され、正月のものは顔見世興行を、三月のものは初春（二の替）興行を中心に記事を掲載し、ほぼ幕末まで継続的に刊行された。双六も丹念に役者たちの動静を拾うが、必ずしも一年かぎりの消耗品ではなく、数年にわたったのしまれることが想定される。「新板役者双六」は、評判記のような、ある年度、ある興行に集中した関心というよりは、もっと百科全書的な、劇書に近い興味をもって江戸歌舞伎の繁栄の様相を活写しているようにおもわれる。その態度には、江戸土産を志向した『舞台扇』成立の経緯と通じるものがある。

ここで、保留してきた屋号「京屋」「糸屋」について言及しなければならない。

双六上の「数字」をふれは「人名等」へゆく」には、すべてそれに対応する升が存在し、京屋にも丸に京の字を明示する（二―E）がある。この人物の、眉頭でいったんあがつてからさがる眉、くつきりした二重の目元、大きな耳、鉢巻をして顎に棒にはさむように見込むポーズからは、特定のモデルの存在がうかがわれる。二枚目ではなく、憎くもなく、軽みと垢抜けなさは道外方をおもわせる。ひるがえって京屋を屋号とする役者たちは複数おり、

どは勝川派のほかの役者絵を手本としていることがうかがわれ、勝川派早期の弟子筋の誰かの筆になるものと推則する。

判明した双六上の役者名等を（図版10）に示した。役者たちの動向のうち、資料の板行時期の見極めに寄与する情報を再掲する。

明和七年（一七七〇）正月刊の初板本『舞台扇』は四代目団十郎を掲載し、主として五代目襲名の情報を得て、七年冬に改刻本を出板した。双六の団十郎も五代目と判断される。

少長も前名七三郎を孫に譲り、八年度以降、自身はそれまでの俳名少長を役者名とした。

二代目音八も、七年度の詳しい動向は不明ながら、八年度江戸では音八と名のっている。

上方役者たち——三五郎の下江は八年度で、十蔵の下りは九年度。

また双六の松助は、実悪にいったんおちついた九年度以降の姿とみられる。

そして二代目幸四郎（四代目団十郎）が三代目海老蔵と改名して名跡を空け、入れ替わりに高麗蔵が四代目幸四郎を継承するのも九年度である。

当初より当該資料を『舞台扇』と離れない時期の成立とみてきたが、掲載情報の上限は明和九年度となるようだ（明和九年は一月一六日に改元して安永元年となる）。団蔵が同年六月に他界することを考慮しても、出板時期は九年正月とみるのが妥当である。半五郎の上方行は双六の作成段階ではつかめていなかったか、差替対応がまにあわ

の成立には俳諧ネットワークが関与し、ことに初板本は採算を度外視した入銀物として成立し、上梓されたのではないかと考察できる。¹⁶ 大本一葉につき役者一名の半身図似顔絵を有名絵師二名が描き、全篇を錦絵摺で仕上げたことは、当時の役者絵本として異例の達成である。

対して「新板役者双六」ははるかに手軽な墨摺一色の一枚物であり、それに見合つて絵師も無名―無落款ながら、篠塚浦右衛門、宮崎八蔵、嵐音八、市川八百蔵、大谷広治、中村助五郎、中村仲蔵、嵐三五郎（再板本口絵）、松本幸四郎、坂田半五郎、市川団十郎らの描写からは、『舞台扇』を全面的に参照利用しており、また『舞台扇』に掲載のない山下金作な

								新板役者双六
								(角)
四	大谷広右衛門 (四―H)	市川八百蔵 (四―G)	松本幸四郎 (四―F)	中村富十郎 (三―E)	市川団十郎 (四―D) 「上り」 坂田半五郎 中村仲蔵	大谷広治 (四―C)	山下金作 (四―B)	嵐三五郎 (四―A)
三	市川団蔵 (三―H)	中村松江 (三―G)	大谷友右衛門 (三―F)	中村少長 (三―E)	中村仲蔵 (三―D)	中村助五郎 (三―C)	尾上松助 (三―B)	中村十蔵 (三―A)
二	宮崎八蔵 (二―H)	若衆 (二―G)	拍子木 (二―F)	京屋 (二―E)	後見 (二―D)	中村此蔵 (二―C)	嵐音八 (二―B)	篠塚浦右衛門／顔 (二―A)
一	陣笠 (二―H)	口上 (二―G)	鮎壳 (二―F)	門付カ (二―E)	茶売 (二―D)	幕引 (二―C)		「ふり出し」 (二―A)
	H	G	F	E	D	C	B	A

図版10

初代芳沢あやめ（一六七三生、一七二九没）の三男で、上方に本拠をおきつつ江戸へもたびたび訪れ、三都のどこでも歓迎された。後年、父をも上まわる「三ヶ津巻首 歌舞妓一道 惣芸頭」という位にのぼりつめる（天明四年（一七八四）正月『役者千両箱』京之巻役者目録）。

「上り」の升に団十郎と半五郎と居並ぶにふさわしいこの時期の江戸の女方は菊之丞か富十郎のどちらかであり、菊之丞なら定紋は結綿、富十郎なら矢車である。双六の女方の紋はそれだけならば判断しづらいものの、二択とするなら鷹羽八つ矢車のほうだろう。なお富十郎は寛保二年度江戸初下り、このときは二年間の滞在だったが、宝暦三年度からは七年間、明和八年度からは八年間連続で江戸に在勤する。菊之丞のほうは初板本『舞台扇』に三葉を描かれた翌明和八年度から休演が続き、やがて安永二年閏三月に世を去る。こうした状況も（四―D）「上り」にどの女方を描くかに影響したと推量される。

絵組では、半五郎は水引蝶飾りの長柄銚子を手にし、富十郎は六角形の供笥に盃をのせ、「暫」にかぎりなく近い扮装の団十郎がその様子を見込む。半五郎が注いだ酒を、富十郎が団十郎に差し出さんとするもので、それはめでたい屠蘇にちがいない。江戸の多くの出版物がそうであるように、この双六も正月の板行であることが示唆される。

『絵本舞台扇』が役者名と俳名を並記することはすでに述べた。役者たちが俳名をもつのは通例ながら、『舞台扇』

立役に入る。三年度に江戸に戻り、同年正月『役者有難』江戸之巻でも立役之部。

(四―D) 上の素袍に三升紋に大太刀の扮装は容易に「暫」を連想させ、団十郎の記号を集中させたようなものである。再板本『舞台扇』が増補口絵冒頭の団十郎を「暫」の姿としたことは述べたが、双六はよく見ると力紙をつけておらず、冠り物も折烏帽子でなくふつうの烏帽子(折り畳んでいない揉烏帽子)で、「暫」のようにみせて「暫」ではないのは、(四―G) 八百

蔵の「暫」との重複を避けたものだろう。顔貌は『舞台扇』とあい通じ(図版9)、その若々しさからも五代目である。二代目幸四郎に復していた父四代目(前述)は、明和九年度(安永元年度)から三代目市川海老蔵を名のり(二年正月『陽来』江戸之巻・海老蔵の条)、五年九月に引退する。

(四―D) 右の女方は似顔からは特定にいたらない。『舞台扇』でも純粹に似顔によって見分けられる女方は、位付が最も高い二代目瀬川菊之丞と初代中村富十郎くらいではなからうか。菊之丞(一七四一生、七三没)は、上方から江戸に移って定着した父初代(一六九三生、一七四九没)を早くに亡くしたが、叔父菊次郎の手厚い薫育のもと、江戸育ちの本格的な女方として若くして熱狂的な人気を集めた。富十郎(一七一九生、八六没)は「女方の守り神」



図版9 『絵本舞台扇』(国立国会図書館蔵(寄別5-6-4-9)増補立姿1丁ウラ)

その姿を掲載するのが(四―F)で、女中の人気をとりそうな和事味があり、『舞台扇』の高麗蔵と比定すると眉と目元がよく似ている。明和六年正月『千畳頂位指』に「当年は若立役之部を立テました。関東は駒殿を居へました」(同書江戸之巻・高麗蔵の条)と、当時三二歳にして若立役之部に入ったこともある高麗蔵だが、双六ではほうれい線が描きこまれている。この幸四郎が何歳になったのかを知るためには、双六の板行年次を考証する必要がある。

残るは最上段中央「上り」である。この升へ進む指示は、(四―B)に「二をふれは上り」とあるのみで、(四―B)の金作に入って、そこで賽をふって二の目をださないかぎり、「上がる」ことはできない。描かれた三人が役者であることは一目瞭然で、それも最上位の役者たちだろう。

三人をそれぞれ、(四―D)左、同右、同上とすると、(四―D)左は二代目坂田半五郎。明和八年正月『歳旦帳』江戸之巻の実悪之部で筆頭、上上吉の役者である。双六は再板本『舞台扇』の半五郎を逆向きにしたかのように、眉、目の表情、輪郭、顎から首もとまで非常によく似ている(図版8)。紋は丸に並び横矢筈。九年度は上京し、翌安永二年度は大坂に滞在、この間



図版8 『絵本舞台扇』(国立国会図書館蔵(寄別5-6-4-9)本文8丁ウラ)

も得手だった。傾城事の系譜を継承する上方では、やわらかみのある二枚目役者が不可欠で、同八年度に下った嵐三五郎はその典型である。同年正月『歳旦帳』江戸之巻は、彼らの芸風の共通する点に目をつけ、初下りの嵐三五郎と高麗蔵に吊りをかけて批評し、同年三月『役者いろいろ有』は「高麗蔵三五郎は一對の和事師、軽重はござりませぬ」（高麗蔵三五郎の条）ともいう。その高麗蔵としての姿を描いた『舞台扇』三葉のうち一葉を掲げる（図版7）。絵師は文調。『舞台扇』では、女方や若衆方などより優美な役者たちは文調が、実悪や敵役を含めたより手強い役者たちは春章が手がけるというおおむねの分担がある。⁵⁵

そうして明和九年度、三六歳にして四代目幸四郎の襲名にいたる。「高麗や此度より松、本幸、四郎の名跡を相続（中略）幸四郎と改ては是までのしやれは成まい。そして悪「実悪」をせずばなるまい（中略）元祖幸四郎は実事の上手（中略）然れば昔にかへつて実事をせらるゝも面白い」（同年正月『一陽来』江戸之巻・幸四郎の条）。幸四郎といえば実悪というイメージは二代目（後名四代目团十郎）によって生成され、息子の三代目（五代目团十郎）も実悪之部に入ることが多かったが、四代目は当面の持ち味を優先したとみえ、武十郎以来の立役之部に居なりである。



図版7 『絵本舞台扇』（国立国会図書館蔵（寄別5-6-4-9）本文2丁オモテ）

さかのぼると延享三年三月『役者三好桜』江戸之巻役者目録・中村座色子之分に瀬川金吾の名前を見つけることができる（同年正月『役者三叶和』江戸之巻役者目録・中村座色子の分の瀬川重吾は同一人物の可能性がある）。七歳での大舞台デビューとなる。初代菊之丞といつも同座しており、抱えの色子（駆出しの少年役者）の一人と見つめることができ。菊之丞没後はその弟菊次郎としばらく同座を続け、宝暦四年度、瀬川金次を名のって角鬘立役之部¹³に入る（同四年正月『役者懐相性』江戸之巻役者目録）。

同八年度、团十郎の門下に転じ、市川武十郎と改名。「瀬川錦治三升」「四代目团十郎」の門弟と成、此度市川武十郎と改名」（同八年正月『役者初火桶』江戸之巻・角鬘之部・武十郎の条）、「路考の弟子にて若衆形の時¹⁴は瀬川金五。立役をしならひ栢庭「团十郎の俳名」舞をうつし」（同年三月『役者将棋経』江戸之巻・立役之部・武十郎の条）。市川家と瀬川家は、菊次郎の未亡人お松（大坂代々の座本岩井半四郎の三代目の養女）が、襲名したばかりの甥二代目菊之丞を連れて四代目团十郎に再嫁したという姻戚関係にある。

武十郎は宝暦一三年度、さらに市川染五郎と改名。「名も改めて二度のかけは梶原源太」（同年正月『役者籤筈』江戸之巻役者目録）、「此度改名して染五郎と三柝の引合せ」（同書染五郎の条）。翌明和元年度、またも改名して市川高麗蔵となり、明和年間はこの名前におちつく。「誰レじやと思ふたら染五郎殿。又名を改られた（中略）所作は第一と存る」（同年正月『役者初庚申』江戸之巻・高麗蔵の条）。

江戸の立役は「暫」のような荒っぽいヒーローを起点とするが、高麗蔵には「今和事の天といふは錦考」（同四年正月『役者巡炭』江戸之巻・高麗蔵の条）といわれるようなやさしげな風情があり、瀬川姓のときから所作事（舞踊）

三代目幸四郎も、明和八年度以降は五代目団十郎となった。その姿は最上段中央(四―D)「上り」の升に描かれているようだ(後述)。すると(四―F)はその次の幸四郎になるのではないか。二代目幸四郎は九年度に海老蔵と改名し、同時に四代目幸四郎が誕生する。四代目は左のごとく多くの改名を経て名跡の継承にいたり、その後は三〇年近くを幸四郎としてすごすことになる(一七三七生、一八〇二没)。

延享三年度(一七四六)から瀬川金吾(金五)として色子

寛延三年度(一七五〇)から瀬川錦次(金次・錦治)として若衆方

宝暦四年度(一七五四)から角鬘立役

宝暦八年度から市川武十郎として角鬘ないし立役

宝暦一三年度から初代市川染五郎

宝暦一四年度(六月改元明和元年)(一七六四)から二代目市川高麗蔵

明和九年度(十一月改元安永元年)(一七七二)から四代目松本幸四郎

享和二年度(一八〇二)から男女川京十郎

市川武十郎のとき、宝暦九年単年度上京し、「色子の時分瀬川路考」「初代菊之丞」弟子にて瀬川金五とて、若衆形を勤、八九年以前(中略)角かづら荒事師瀬川錦次と改め(中略)今の市川団十郎「四代目」弟子と成、丑の顔見せ「宝暦七年冬」より市川武十郎と改名(中略)扱もよい口中かな。顔に愛嬌も有よい人品なり。所作も成ますと聞きました」と紹介された(同年正月『役者談合藤』京之巻・武十郎の条)。

理想化が役者絵より根づよいように、女方は立役たちよりは識別しにくいきらいがあるところ、(四―B)の紫帽子に半ば隠れた眉は短く、鳥居の笠木のようにやや上反りし、目尻は上がっても下がってもいい。眉も目もほとんど横一直線に並び、それらが平行している。その表情はまるで何かに困惑しているかのようだ。金作は『舞台扇』には登場しないが、こうした表情で勝川派絵師に描かれた例が複数あり、¹²⁾双六もその特有の顔貌(化粧)を(四―B)をとらえている。また双六では上段に進むにつれて人気役者があらわれる。明和九年正月『万歳曆』では金作の位付は上上吉、松江は上上半白吉と、金作が上位である。やはり(四―B)は金作で、紋は半ばかくれているもの、山下姓の女方が共有する九枚笹に竜胆でよさそうだ。

松江は通常菱形に祇園守の紋を使い、『舞台扇』でもそうで、(三―G)の紋と一致しない。替紋が用いられることもあり、双六にも餅売と鮎売のような小さな不調和があるので、消去法的ながら(三―G)を松江としておく。

残る升は(三―B)と(四―F)で、名前が出ていて同定できていない役者は松本幸四郎と尾上松助である。松助の紋は通常重ね扇に抱き柏の紋で、その中央に松の字を入れることもある。(三―B)の升の下部の、紋ともみえる黒丸のなかにどうやら松の字が読みとれる。先に述べたように、松助は女方から立役、立役から実悪へと役替する。立役となった姿が再板本『舞台扇』は増補口絵に描かれる。双六では鬢や刷毛先を割った鬢に「すすどい」表情で、明和九年度以降の、実悪(色悪)に転じた松助を写したものとみることができそうである。

そして(四―F)で鼓を持つのは、三つ銀杏の紋から立役松本幸四郎にまぎれもない。だが何代目だろうか。すでに初板本『舞台扇』でその老いを表出していた四代目団十郎(二代目幸四郎と復名)とは到底みえない。息子の

な印象である。ほかに丸十紋で大谷姓の役者としては、(三一F)に敵役大谷友右衛門(丸十に友の字の紋)、(四―H)に実悪大谷広右衛門がいる。双六の広右衛門は、月代が剃つてある、袴を着けているというちがいはあるが、顔貌や首の傾げぐあいまで、『舞台扇』を参考にしているようだ(図版6)。

(三一D)は上弦の三日月のような目元から初代中村仲蔵。一目でわかる実悪の実力者である。紋も中車に仲の字。『仮名手本忠臣蔵』五段目の端役、斧定九郎の扮装演技の成功をきっかけに座頭まで出世をとげた名優で、色悪と称された時期もある。

(三一E)は重釘貫の紋からも立役中村少長(前述)。目元、口元、顎に年齢があらわれる。

(四―A)(三一A)はどちらも上方役者で、前者は桐の字の紋から立役嵐三五郎。明和八年度に江戸下向(前述)、再板本『舞台扇』は増補口絵に「嵐三五郎／来芝」の立姿を描く。後者は向かい銀杏の紋から立役中村十蔵と目される。下りは明和九年度(同年正月『万歳暦』江戸之巻)。双六の情報の上限は九年度まで下げてよいようだ。

「金作へゆく」また「松江へゆく」の指示があったことから、双六には若女方山下金作と中村松江が描かれていることが予測される。女方を描くものは(四―D)「上り」をのぞけば(三一G)と(四―B)しかない。美人絵の



図版6 『絵本舞台扇』(国立国会図書館蔵(寄別5-6-4-9)本文4丁オモテ)

みていくと、三升紋に八を入れた右上(四―G)は若手の立役市川八百蔵である。眉、目、頬の広さなど、顔貌描写も『舞台扇』とよく似る。

左側(三―H)は、「五で団蔵へゆく」(二―G)、「四をふれは団蔵ゆく」(三―C)とある立役市川団蔵だろう。長いほうれい線に年齢があらわれる。『舞台扇』の描写も同様で、ひき比べる八百蔵の若々しさが引き立つ。初代団十郎の高弟初代団蔵の養子となつてその名を継ぎ、明和九年六月に五四歳で世を去るのが三代目団蔵、四代目の登場は安永三年度で、襲名時二八、九歳なので、双六が描くのは老巧の三代目と考えられる。

(四―C)と(三―C)の上下は、それぞれ立役大谷広治と敵役二代目中村助五郎。広治の紋が丸十、助五郎の紋が丸仙(初代の本姓が仙石)で、『舞台扇』と比定しても、容貌、恰幅のよさ、特徴的な見得の姿勢をよくつかんでいる(図版5)。とくに助五郎はしばしば、肩と顔を相反するようにかしげ、目線を顎先とは逆方向に流し、全身をひねるようにしてポーズをとつた姿で勝川派の絵に描かれている。広次とはコンビ役者として知られ、どちらも体格がよく、相撲の場面ではないつも評判をとつた。^①初板本『舞台扇』では両者向かい合わせの見開きもあり、双六はそれを上下に分けたよう



図版5 『絵本舞台扇』(国立国会図書館蔵(寄別5-6-4-9)本文23丁オモテ)

「弁蔵を改此度若衆形の名とり門之介の名を継れ、則紋所も丸に、一の字」(八年正月『歳旦帳』江戸之巻・門之助の条)とあるように、この門之助の襲名は八年度顔見世である。前名の弁蔵では、七年正月『不老紋』江戸之巻役者目録・若衆形之部などに位付上白半吉とされ、初板本『舞台扇』にも「市川弁蔵／海丸」として二葉描かれ、紋は三升の中央に弁の字を置く。三升紋を共有する役者たちのあいだで同様の運用がみられるが、名優初代門之助(一六九一生、一七二九没)は

丸に一の字の紋で知られ、通称を丸まゐち一殿といったくらいで、新門之介はもちろんこれを継承した。再板本『舞台扇』は、新門之介の似顔は初板本の弁蔵を踏襲しながら、紋のみ丸一に改刻する。双六の三升紋の中央は角張った文様で門の字を、また似顔も弁蔵こと二代目門之介をおもわせないではないが、やはりこの若衆の名は確定しがたい。このころ江戸の三大劇場では、数名の若衆方が所属することがふつうである。この双六が特定の年度の特定の座組を写しているのであれば、若衆方の名もしほりこめそうなものだが、そうでないのであれば、この資料はより一般的な芝居の情景を写しだすことを優先しているということができよう。

三段目と四段目は合わせて扱ひ、対応する文字情報のない(四―D)「上り」の升はひとまずおく。三升紋から



図版4 『絵本舞台扇』(国立国会図書館蔵(寄別5-6-4-9)本文37丁オモテ)

けになるのは紋で、双六も『舞台扇』も、浦右衛門には「頬」、八藏には「巴」を示す。してみると、「二をふれは頬へゆく」(二―H)、「三をふれはすこぶるへ」(ゆく)「(三―H)とあったのも、浦右衛門を意味していたということだ。浦右衛門は明和九年正月『万歳暦』の段階で位付「上」にとどまり、評文もなく情報がすくない。その紋は『舞台扇』によっても判明するが、紋にちなむ二つ名までは、この双六によらなければわからないだろう。

(二―B)、坊主頭に長い鬢(いわゆる鯉坊主)の滑稽味は道外方の風情で、隅切角に小の字の紋は嵐姓の役者たちによく用いられる。改名後の風音八と見当をつけることができる。『舞台扇』を参照すると、扮装は異なるが、下がり眉や目元が共通する。目尻にはしわが見えるようで、まだ若い二代目音八としては気になるところである。

(二―C)の紋は中村姓の役者に多用される中車紋で、中央の此の字から敵役中村此藏である。敵役らしい舞台化粧といえる。

(二―D)は蠟燭の差出し(面^{おもて}あかり)を手にした「後見」。

(二―E)に示された「京」の字は無意味ではあるまい。「六をふれは京やへゆく」(二―H)、「六をふれは京屋へゆく」(三―B)とあった京屋をただちに連想させる。だが京屋を屋号とする役者たちは複数いる。この升は保留とする。

(二―F)は開幕や閉幕を舞台周辺に知らせる「拍子木」。

(二―G)は前髪のある若衆方で、文字情報は「若衆へゆく」ということで名なしだったが、紋は三升で市川姓がほのめかされる。再板本『舞台扇』には「市川門之介／海丸」の姿があり(図版4)、紋は丸に一の字である。

うに、陣笠が通称となっており、芝居にとつてなじみの存在であったようだ。

芝居がいつも大入り大当りでありたいという予祝をこめつつ、棧敷客、舞台進行者たち、物売、立寄りの芸能者から役人まで、場内の殷賑と混沌をとらえる観察力は見事である。

二段目は半数以上を役者と見なすことができる。『舞台扇』と対照してみると、(二―A)は「篠塚浦右衛門／少振」(図版3右)、(二―H)は「宮崎八蔵／登方」(図版3左)と、それぞれ識別することができる。『舞台扇』は、絵本を開いたときの役者の取合せにも配慮しており、八蔵と浦右衛門は見開きの左右に向かい合わせに描かれている。どちらも上位ではない敵役であって、釣合いもよい。双六はそれを分割するように、二段目の左端と右端に置く。顔貌表現はそっくりとはいえないが、どちらも姿勢がよく似ている。また依然として識別の助



図版3 『絵本舞台扇』(国立国会図書館蔵(寄別5-6-4-9)本文24丁ウラ25丁オモテ)

り札（木製の入場券）で、「切「落」」と書かれたものがある¹⁰。切落しは仕切のない大衆席で、芝居が当たって小屋（劇場）が混み合えば見物をそこに追いこんだ。興行の成功はあらゆる関係者の究極の念願である。（一―A）はあるいは金主（スポンサー）を暗示するものかもしれない。芝居興行は名代（興行権者）、小屋主（劇場の所有者）、座本（役者の束ね）がそろって成立する。上方ではこれらが分立し、リスクも分散されるが、江戸では三権とも座元に集中し、しかも世襲される。そうした江戸の座元の権威にも劣らぬ力を有するのが表面化することのない金主である。その身元が知られることはめつたにない。

続いて「幕引」（一―C）、「茶売」（一―D）、飛んで「鮎売」（一―F）、「口上」（一―G）となるだろう。幕を開け閉めするのは弟子クラスの役者、口上役を勤めるのは、有名ではなかったとしても経験豊富な役者である。

双六中に「茶売」が描かれていることは、本文中の「茶売へゆく」等の指示から予想され、それは（一―D）の薬缶を手にした男のほかにはない。また「六をふれは餅売へゆく」（一―A）、「三ふれは餅売へゆく」（一―E）とテキストにはあるところ、餅売を描く升はなく、対応しそうな升は鮎を担ぐ（一―F）である。テキストと絵のあいだに若干の齟齬もあるということだ。

（一―E）の手拭をかぶった紙衣姿の人物は門付のようにみえる。これが永沈の升であることを考慮すると、周縁的身分である可能性は高い。他方、左端（一―H）の、下級武士に用いられる陣笠をかぶり、陣羽織を着し、十手を手にする人物は同心だろう。町奉行所配下で与力の補佐をする下級役人である。貴賤の老若男女が群集する劇場は巡邏先のひとつであったとみえる。「三てちんかさへゆく」（一―F）、「六でちん笠へゆく」（一―G）とあるよ

浮世絵の摺刷技術の伸展と似顔描写の本格化の結節点に役者絵本『絵本舞台扇』は登場した。

ほかならぬ文調・春章によって共同制作されたこの豪華本は大きな成功を収め、初板から一年も経たないうちに改板、再板され、板木（出版権）は板元から板元へと移動し、改竄本ともいふべき『続絵本舞台扇』の板行もあり、墨摺の後印本が文政二年（一八一九）まで存在する。こうした人気は、浮世絵における写実の追求への支持を意味する。初期鳥居派は圧倒され、明和末に文調が画壇を離れたあとも、春章が勝川派を率いて安永・天明（一七八一—一八九）期の斯界を主導した。

「新板役者双六」は勝川派早期（流派形成以前の文調・春章も含む）の様式であり、成立時期は『舞台扇』からそれほど離れていないと推定できる。文字情報から判明したのは、双六の情報は初板本『舞台扇』より更新されており、早くとも明和八、九年度以降の劇壇状況を反映しているということであった。

本章では、おもに双六の絵から読みとることのできるものについて検討する。役者似顔は『舞台扇』を基準として同定を試みる。『舞台扇』諸板、諸本のうちでは、七年冬の再板本（国立国会図書館所蔵）に拠る。なお『舞台扇』の判型は大本で、その半丁を役者一名の半身図に充当し、それをフルカラーで摺りあげる。これに対して、双六が各人を描く升のひとつあたりの大きさは大本半丁のおよそ九分の一となり、摺りも墨一色、絵師も不明で習作的であり、全般に表現力や到達度のおよばない点には留意する必要がある。

双六の最下段には人気役者は描かれていない。（一—A）「ふり出し」では棧敷席に御簾が下ろされ、なかに座る人物は膝先に煙草入と煙管を置き、くつろいだ様子である。手前の容れ物には「大人」とあり、入っているのは通

上 篠塚浦右衛門(後述) 中 (二—H) (三—H)

▲道外形之部

上白上 (二代目) 嵐音八 市村座 (一—F) (二—G)

▲若女形之部

上上吉 (二代目) 山下金作 森田座 (三—E) (三—G) (四—F)
 上上半白吉 (初代) 中村松江 中村座 (三—B) (四—C) (四—H)

二 「新板役者双六」に描かれた情報と『絵本舞台扇』

日本絵画における肖像画表現は、やまと絵系統の似絵や頂相によって中世期には実現され、宮廷周辺や大寺院で享受された。近世期に入ると、木板印刷の商業化とともに浮世絵が広範に流通する。当初人物は類型描写され、美人絵では最終的にもその傾向を否定できない。役者絵では、初期鳥居派が立役、敵役、若女方といった役柄別の描き分けをおこない、やがて似顔表現への関心も表出した。⁷⁾鳥居派は劇界と緊密に提携し、絵看板や出板物の挿絵等を継続的に請け負ったが、明和年間(一七六四—七二)に入ると作品数は減少し、同五、六、七年ごろには、役者絵の担い手は一筆斎文調や勝川春章に移行し、似顔表現が推進された。

延宝(一六七三—八一)末に誕生したときは墨摺一色であった「うきよ絵」が、筆彩をほどこした(漆絵・紅絵)、限定的な板彩の(紅摺絵)⁸⁾を経て、(錦絵)すなわち多色摺木板画となったのが明和二年(一七六五)。その五年後、

極上上吉

〔二代目〕松本幸四郎

中村座

〔三―D〕〔四―A〕

大上上吉

〔二代目〕市川団藏

同座

〔二―G〕〔三―C〕

上上吉

〔二代目〕嵐三五郎

市村座

〔三―F〕〔四―G〕

上上半白吉

〔二代目〕市川八百藏

中村座

〔二―D〕〔三―H〕〔四―C〕

上上半白吉

〔三代目〕大谷広治

市村座

〔四―H〕

上上半白吉

〔二代目〕中村十藏

森田座

〔二―B〕〔四―F〕

立役巻軸功上上吉

〔二代目〕中村少長

中村座

〔四―B〕

▲実悪之部

上上半白吉

〔初代〕中村仲藏

中村座

〔二―A〕〔二―E〕

上上半白吉

〔三代目〕大谷広右衛門

森田座

〔三―A〕〔四―A〕

上上半白半吉

〔初代〕尾上松助

市村座

〔四―G〕

▲敵役之部

上上半吉

〔二代目〕中村助五郎

森田座

〔二―D〕〔二―C〕

上上半吉

〔初代〕大谷友右衛門

市村座

〔三―A〕〔三―C〕

上

中村此藏⁴

中

〔二―A〕〔二―F〕

上

宮崎八藏⁵

中

〔二―A〕〔三―E〕

もあつた。初板本『舞台扇』に「尾上松助／＼三朝」（「松介」は表記ゆれ）として掲載される二葉の似顔絵は、どちらも顔に紫帽子をかけた嫺々とした女方の姿であり、七年正月『不老紋』江戸之巻役者目録・若女形之部にも「上上白吉 尾上松助 市村座」とあるとおりである。しかるに八年正月『歳旦帳』では松助は立役之部に転じており、「上上白半吉 尾上松助 市村座」／＼元服になを出世をいふ三朝」と記される。女方から立役への役替である。再板本『舞台扇』は、女方の丁はそのまま摺り、増補口絵に立役姿の「尾上松助」を掲載する。

さらに九年正月『役者万歳曆』では松助は実悪之部に入り、翌安永二年度も実悪之部で「上上白半吉 色悪尾上松助 市村座」（同年正月『役者一陽来』江戸之巻役者目録）と揭示される。単純な悪役である敵役に対し、実悪には善と悪のあいだを往来する複雑さがあり、悪役としても国家転覆を謀るようなスケールの大きさがある。色悪は、敵役ないし実悪で、二枚目の条件を備えた役者にまま与えられる肩書である。松助は三年度も実悪之部（正月『役者有難』江戸之巻）におり、四年度からは上京して立役之部（同年正月『役者酸辛廿』京之巻など）に入る。

試みに、松助が実悪之部にいったんおちついた明和九年正月『万歳曆』江戸之巻役者目録をさらうと、左のごとく、「新板役者双六」記載の人名を見つけることができた。双六の情報の上限は九年度まで下がるかもしれない。年度ごとの役者たちの動静を記録報告することは評判記にとつては責務ともいえるが、双六のような資料も、存外

に細やかにそれらを拾っていることが看取される。

▲立役之部

ていたということになる。再板本『舞台扇』は彦吉の似顔絵はそのまま使い、「嵐彦吉／和考」を「嵐音八／和考」と改刻する。双六の情報が入年度以降のものならば、双六の音八は二代目となる。

改名二件が確認できたが、八年度江戸劇壇の話題をさらったのは、江戸歌舞伎を代表する大名跡、市川団十郎の襲名だったに相違ない。七年十一月の顔見世で三代目松本幸四郎が五代目団十郎となり、その父、四代目団十郎は旧名二代目幸四郎に復した（八年正月『歳旦帳』江戸之巻・無類之部・幸四郎の冬）。双六には団十郎の名はみえず、幸四郎も代数まで記されてはいない。初板本『舞台扇』（七年正月刊）に「市川団十郎／三升」とあるのは四代目団十郎（父）、「松本幸四郎／男女川」とあるのは三代目幸四郎（息子）ということになり、再板本（同年冬）は、やはり似顔絵は初板のまま、文字情報をそれぞれ「松本幸四郎／五粒」（父）、「市川団十郎／三升」（息子）と改刻する。さらに再板本は口絵を増補し、その冒頭に「暫」の主人公に扮した三升紋の役者の立姿を配置する。役者名を欠くが、三升は市川家の定紋、「暫」は市川家の芸で顔見世の三建目に上演される慣習があり、名前が示されなかったとしてもそれが五代目団十郎だということは明白である。

また役者たちは土地を移動することがある。江戸歌舞伎と上方歌舞伎の交流である。双六にあらわれる三五郎とは、上方役者嵐三五郎にちがいない。父の代から大坂中心に活躍した有力役者で、明和七年度まで在坂、八年度に下江し、安永六年度まで七年連続で江戸に在勤する。同姓の音八（前名彦吉）と縁があつたのかもしれない。³八年度にならなければ江戸にあらわれない三五郎の登場も、双六の情報が入年度以降のものであることを支持する。

くわえて役替もある。彦吉（後名音八）が父の名跡を継承することは、子役から道外方に役柄を変更することで

この孫の三代目七三郎は当時六歳ほどで、双六にはそこまでの子役は見当たらない。双六のいう少長とは、七年一月に名前を譲り、自身はそれまでの俳名を役者名とした少長すなわち（前名）二代目七三郎ということになる。

芝居の年度は一月に始まり、翌秋一〇月までをひとめぐりとする。各劇場は霜月の顔見世でその年度の所属役者の顔ぶれを披露する。この顔見世の情報を反映するのが、正月に刊行される評判記である。『舞台扇』は評判記のような定期刊行物ではなく、単発の役者絵本であるにもかかわらず、七年冬に再板をおこなった。再板本『舞台扇』では、似顔絵はそのまま、その背後に入る文字だけが「中村少長「俳名なし」と改刻されている。この例からは、双六が反映する劇壇状況は初板本『舞台扇』よりは再板本に近いもので、早くても明和八年度以降のものだということがわかる。

嵐音八をめぐっても類似の状況がある。この名前は七年正月『不老紋』にはみえないが、八年正月『歳旦帳』江戸之巻役者目録・道外形之部に「上 和考 嵐音八 中村座」が掲げられ、評文に「嵐彦吉改名して音八と名のられ此度大坂より下られ名改のすり物も出ました」（傍点筆者、以下同）とある。さかのぼると、六年正月『役者千畳肩位指』江戸之巻役者目録・子役之部に「上上 嵐彦吉 市村座」をみつけることができる。同年五月『役者太夫位』江戸之巻役者目録・道外形之部には「上 嵐彦吉 和子」とあり、また同役者目録末尾に同年三月に「初代」嵐音八死去の記事があり、評文には「おやこの跡をつぎ名をあげ給へ」（彦吉の条）とある。

彦吉は宝暦（二七五—一六四）後期にデビュー、久しく子役之部に入っていたが、明和六年三月に父初代音八（道外方）を亡くし、五月には父を追って道外方に役替、七年度は上坂、八年度には江戸に戻って二代目音八を名のつ

音八	嵐彦吉／和考	※改名
仲蔵	中村仲蔵／秀鶴	
団蔵	市川団蔵／市紅	
広右衛門	大谷広右衛門／蟠風	
幸四郎	松本幸四郎／男女川	※代数
八百蔵	市川八百蔵／中車	
少長	中村七三郎／少長	※改名
松江	中村松江／里公	
松介	尾上松助／三朝	※役替
広治	大谷広治／十町	

初板本『舞台扇』（ブルヴェラー・コレクション）には「中村七三郎／少長（役者名・俳名）」と掲出される。双六の少長と初板本『舞台扇』の七三郎は同一人物であって、そうでもない。明和七年正月の役者評判記『役者不老紋』江戸之巻の役者目録若太夫之部に「惣巻軸真上上吉 中村七三郎」とある。翌八年正月『役者歳旦帳』江戸之巻役者目録には「惣巻軸 中村少長 / 七三郎の名をゆづり其身は少長」、同・子役之部に「名物男三代目 沙長 中村七三郎 中村座」とあり、評文に「当顔みせより孫七之介どの二名をゆづる」（少長の条）とみえる。

衆方という役柄は衰退の方向に進んでいたものの、江戸では初代佐野川市松（一七二二生、六二没）が功績を残したこと、その二代目を含め、勝川派の活動期にも名前を知られた若衆方が何人もいる（後述）。

ほか幕引（二―D）（二―H）（二―F）、拍子木（二―G）（二―C）（三―D）、後見（二―B）（三―F）、口上（二―A）（二―C）（二―D）（二―H）も、それぞれの役割を担う無名に近い役者たちであり、くわえて劇場出入りの諸色商人として、茶売（二―A）（二―F）と餅売（二―A）（二―E）が挙げられている。一見不明な呼称や屋号などもみえる。

これら双六の人物描写の様式からただちに想起されるのは、明和七年（一七七〇）正月初板の役者絵本『絵本舞台扇』である。『舞台扇』はこの年の江戸在勤役者約八〇名の半身図を色摺の似顔絵であらわし、役者名と俳名を添える。当該双六を役者絵の派生物とするならば、『舞台扇』は一種の役者絵集成である。絵についての検証は次章に送り、まずは文字情報の対照をおこなう。双六掲載の役者名一七のうち、一二を、左表のように『舞台扇』に見つけることができた。やや注意が必要な者もある。

「新板役者双六」	初板本『絵本舞台扇』
八蔵	宮崎八蔵／登方
助五郎	中村助五郎／魚楽

- 三をふれは金作へゆく
- 五をふれは十蔵へゆく(四―F)
- 六をふれは松介へゆく
- 三をふれは三五郎へゆく(四―G)
- 三をふれは広治へゆく
- 五をふれは松江へゆく(四―H)

「上り」をのぞく全区画に「数字」をふれは「人名等」へゆく」との記載があるのは、飛び双六の「飛ぶ」先を指示するもので、各区画に描かれた人物(人物の一部)がこれら「人名等」に対応するものとなるはずだ。当該双六にみえる明確な人名として、此蔵(二―A)(二―F)、八蔵(二―A)(三―E)、助五郎(二―D)(二―C)、音八(二―G)、仲蔵(二―A)(二―E)、十蔵(二―B)(四―F)、団蔵(二―G)(三―C)、友右衛門(三―A)(三―C)、広右衛門(三―A)(四―A)、幸四郎(三―D)(四―A)、金作(三―E)(三―G)(四―F)、三五郎(三―F)(四―G)、八百蔵(二―D)(三―H)(四―C)、少長(四―B)、松江(三―B)(四―C)(四―H)、松介(四―G)、広治(四―H)を抽出することができる。

右はみな役者名であり、役柄は立役、実悪、敵役、道外方、若女方におよぶ。平均的な座組を想定した場合、女方の数が極端にすくない。また若衆方にかぎり、役者名が特定されず、「若衆」(二―A)(二―C)とのみある。若

- 三をふれは金作へゆく
 五八蔵へゆく(三―E)
 二をふれはかうけんへゆく
 五ふれは三五郎へゆく(三―F)
 一をふれは金作へゆく
 六をふれはようちんへゆく(三―G)
 壺をふれは八百蔵へゆく
 三をふれはすこぶるへ「ゆく」(三―H)
 三をふれは幸四郎へゆく
 五をふれは広右衛門へゆく(四―A)
 三ふれは少長へゆく
 二をふれは上り(四―B)
 四ふれは八百蔵へゆく
 六ふれは松江へゆく(四―C)
 上り(四―D)

- 三ふれは餅売へゆく(二―E)
- 二をふれは此蔵へゆく
- 四ふれはまく引へゆく(二―F)
- 六でちん笠へゆく
- 五で団蔵へゆく(二―G)
- 二をふれは顔へゆく
- 四をふれは口上ゆく(二―H)
- 六をふれは友右衛門へゆく
- 四で広右衛門へ(三―A)
- 六をふれは京屋へゆく
- 三をふれは松江へゆく(三―B)
- 四をふれは団蔵ゆく
- 三をふれは友右衛門へゆく(三―C)
- 二をふれは幸四郎へゆく
- 四をふれは拍子木へゆく(三―D)

- 三てちんかきへゆく
六で茶うりへゆく(一—F)
四をふれは音八へゆく
二をふれはひやうしぎへゆく(一—G)
六をふれは京やへゆく
三でまくひきへゆく(一—H)
- 五仲蔵へゆく
四系ヤへゆく(二—A)
二でかうけんへゆく
三て十蔵へゆく(二—B)
四ふれは助五郎へゆく
五をふれはひやうしぎへゆく(二—C)
二で口上へゆく
五て八百蔵へゆく(二—D)
一をふれは仲蔵へゆく

〔題名〕新板役者双六

〔板元〕○に角

〔以下本文〕

ふり出し

一をふれは茶売へゆく

二をふれは口上へゆく

三をふれは此藏へゆく

四をふれは八藏へゆく

五をふれは若衆へゆく

六をふれは餅売へゆく

大入(一―A)

三をふれは口上へゆく

五をふれは若衆へゆく(二―C)

一をふれはまく引へゆく

六をふれは助五郎へゆく(二―D)

ようちん(一―E)

四	(四―H)	(四―G)	(四―F)		(四―D)「上リ」	(四―C)	(四―B)	(四―A)	新板役者双六 ⊙
三	(三―H)	(三―G)	(三―F)	(三―E)	(三―D)	(三―C)	(三―B)	(三―A)	
二	(二―H)	(二―G)	(二―F)	(二―E)	(二―D)	(二―C)	(二―B)	(二―A)	
一	(一―H)	(一―G)	(一―F)	「ようちん」(一―E)	(一―D)	(一―C)		「ふり出し」(一―A)	
	H	G	F	E	D	C	B	A	

図版2



图版 1 「新板役者双六」(東京国立博物館所蔵)



『双六類聚』(歴資709)所収)

する。鳥居派と交替するように興隆した流れに勝川派があり、本稿では勝川派早期の様式で描かれた資料をとりあげる。

資料としての時点の情報がどれほどの範囲で反映されているのかを解明するとともに、出版年次を考証し、当該双六の出版意図や意義を考察する。

一、芝居双六「新板役者双六」書誌

対象とする資料は東京国立博物館所蔵『双六類聚』（歴資七〇九）所収の「新板役者双六」である。一枚物で墨摺、一部筆彩（図版1）。大きさは三〇・三×四四・〇センチメートル（右端および下端トリミング）。落款なし。

絵双六には、賽の目の数に合わせてコマを進める廻り双六と、数に応じて進む先が指示される飛び双六がある。これは飛び双六で、最下段右の升が振り出して、最上段中央が「上り」である。原則として横四段、縦八列に区切られ、最下段右と最上段中央では二区画分を合わせ、全体として三〇升に分割される。各升特定の便宜上、下段から上段へ一、二、三、四と数え、縦の列には右から左へアルファベットを付した（図版2）。（一―A）は、第一段のA列の略記である。（一―E）にみえる「ようちん（永沈）」とは長く沈むの意で、この升に入るともう賽を振ることができない。

以下に翻字を示す。

identify around 21 actors from their portraits and other information.

From their movements, we have been able to establish that the information contained in the book is up to the year 1772, and I believe that the book was published in the same year. In the course of my research, I have also discovered a close relationship in terms of expression with the unusual actor picture book "Ehon Butai Uagi", which was first published in 1770. The Sugoroku reflects the movements of actors fairly faithfully up to the 1772 fiscal year, but the way it is interested in them is not focused on a particular year or performance, but rather it vividly depicts the flourishing aspects of Edo kabuki with a more encyclopedic interest so that it will be loved by people for a longer time, and its attitude is similar to the circumstances surrounding the creation of the "Ehon Butai Uagi", which was intended as a souvenir of Edo.

近世期の歌舞伎資料には、台帳（台本）に類するもの、役者情報を主体とするもの（代表的には役者評判記）、興行資料（劇場出板物）、役者絵（浮世絵のうち役者等を画題とするもの）、そのほか（役者絵本、諸種画証資料、随筆等）がある。役者絵のバリエーションないし画証資料としてあつかうことができるものうちに芝居双六がある。

遊戯としての双六の発祥は古くまた遠く、本朝には奈良時代以前にもたらされた。もともとはバックギャモンに近いゲームで、太い台盤を用いた。この盤双六を紙上に再現しようとしたものが絵双六で、その先駆けは寺院内外で成立した浄土双六であり、中世期にはおこなわれた。近世期にはより娯楽的な道中双六や芝居双六が流行した。

芝居双六は演劇資料としての情報も備えており、これまでに「むけんの／かね」福引なご屋双六¹、「中村富十郎（三年立たら／極の字が付）ませう双六」の調査をおこない、興行ならびに作劇にかかわる貴重な情報を得た。出版年代は、それぞれ享保一六年（一七三一）頃、また元文二年（一七三七）頃初板／寛保二年（一七四二）頃改板と特定することができ、いずれも絵師不明ながら、浮世絵初期鳥居派の様式で描かれ、年代も同派の活動期と一致

役者似顔絵の可能性

佐藤知乃

A Study of Kabuki-style Sugoroku: The Potential of Actor Portraits

SATO Chino

Abstract

Among the Kabuki-related materials from the early modern period, there are some that can be treated as variations of actor portraits or as pictorial materials. On the one hand, Kabuki-style sugoroku are theatrical materials, and in some cases, it is possible to read valuable information related to theatrical performances and playwrighting. We conducted a survey of the “Shinpan Yakusya Sugoroku” (in the collection of the Tokyo National Museum), which was drawn in the style of the early Katsukawa school, following the early Torii school of *ukiyo-e*, and which uses portrait-style expression.

This Sugoroku (traditional Japanese board game) uses rich powers of observation to capture the bustle and chaos of the theater, and divides the board into 30 squares, depicting 32 different people.

Four of these are merchants, officials, and so on familiar with the theater, and four more are people involved in running the board (strictly speaking, actors). Although the identities of some of them are not entirely clear, I have been able to

執筆者紹介（執筆順）

杉 潤 忠 基 経済学部教授（アメリカ史）
池 田 明 子 法学部准教授（英文学）
土 屋 亮 経済学部准教授（スペイン語学、ロマンス語学）
Joshua Trued 英語教育センター講師（応用言語学）
小 湊 真 衣 経営学部講師（教育心理学）
佐 藤 知 乃 法学部准教授（日本近世文学）
小 竹 直 子 国際関係学部教授（日本語学、日本語教育学、留学生教育）

編集委員（五十音順 ○印委員長）

一 山 稔 之 経済学部教授
小 池 求 経営学部准教授
高 澤 美由紀 法学部教授
東 浦 拓 郎 国際関係学部准教授
ブルックス、ミキオ 国際関係学部准教授
○松 本 賢 信 法学部教授

亜細亜大学学術文化紀要 第45号（2025）

ISSN 2436-9411（オンライン）

2025年3月31日 発行

編集者 亜細亜大学総合学術文化学会
発行者 亜細亜大学総合学術文化学会
製作者 株式会社 南窓社

発行所 〒180-8629 東京都武蔵野市境5丁目8番 ☎(0422) 54-3111 亜細亜大学

**Journal of the Society
for
General Academic and Cultural Research**

No. 45 2025

CONTENTS

Political Violence and the 1875 Plot to Overthrow the Republican Government in Mississippi	<i>Tadaki Sugibuchi</i>	1
Shakespeare and Emotions: Hamlet on Grief	<i>Akiko Ikeda</i>	21
On ungrammatical uses of superlative-forming suffixes in colloquial Spanish	<i>Ryo Tsuchiya</i>	39
Japanese University Students' Opinion of Readtheory	<i>Joshua Trued</i>	57
College Students' Attitudes toward Substitute Attendance ("Daihen") as an Academic Dishonesty	<i>Mai Kominato</i>	73
— From a survey of students who predominantly use analog methods to check attendance. —		
A Study of Kabuki-style Sugoroku: The Potential of Actor Portraits	<i>Chino Sato</i>	140
[Research Note]		
Practical Report on Business Japanese Education Through PBL: Experimental Work Experience-Based Course for Undergraduate International Students	<i>Naoko Kotake</i>	93
